921. 4-Mo45a7
1200500759563

921.4
M045a

教科書

唐詩選評釋

下

註補穗田豐・著南槐森

富山房百科文庫

27

富山房版

730
258

唐詩選評釋下卷目次

卷五

七言律

古意……沈佺期 二
龍池篇……〃 七
侍宴安樂公主新宅應制……〃 九
紅樓院應制……〃 一三
再入道場紀事應制……〃 一四
遙同杜員外審言過嶺……〃 一六
興慶池侍宴應制……韋元旦 一八
侍宴安樂公主新宅應制……蘇頲 二一
奉和春日幸望春宮應制……〃 二五
奉和初春幸太平公主南莊應制……蘇頲 二五
幽州新歲作……張說 二六
滻湖山寺……〃 二八
遙同蔡起居偃松篇……〃 三〇
奉和春日出苑矚目應令……賈曾 三二
奉和初春幸太平公主南莊應制……李嶠 三五
和左司張員外自洛使入京中路先赴長安
逢立春日贈韋侍御及諸公……孫逖 三八
黃鶴樓……崔顥 三九
行經華陰……〃 四六
登金陵鳳皇臺……李白 四八
早朝大明宮呈兩省僚友……賈至 五一

和賈至舍人早朝大明宮之作……王維 五五
和太常韋主簿五郎溫泉寓目……〃 五七
大同殿生玉芝 龍池上有慶雲 百官
共觀 聖恩便賜燕樂 敢書即事……〃 五九
奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留
春雨中春望之作應制……〃 六一
敕賜百官櫻桃……〃 六三
酌酒與裴迪……〃 六八
酬郭給事……〃 七〇
過乘如禪師·蕭居士嵩丘蘭若……〃 七二
奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留
春雨中春望之作應制……李澄 七四
送魏萬之京……李頎 七五
寄盧司勳員外……〃 七七
題璿公山池……〃 七八
寄綦毋三……李頎 七九
送李回……〃 八一
宿瑩公禪房聞梵……〃 八二
贈盧五舊居……〃 八四
望薊門……祖詠 八四
九日登仙臺呈劉明府……崔署 八六
五日觀妓……萬楚 八八
杜侍御送貢物戲贈……張謂 八九
送李少府貶峽中王少府貶長沙……高適 九一
夜別韋司士……〃 九三
和賈至舍人早朝大明宮之作……岑參 九四
和祠部王員外雪後早朝即事……〃 九六
西掖省即事……〃 九七
九日使君席奉餞衛中丞赴長水……〃 九八
首春渭西郊行呈藍田張二主簿……〃 一〇〇

暮春虢州東亭送李司馬歸扶風別廬 岑參 一〇一
萬歲樓……王昌齡 一〇三
題張氏隱居……杜甫 一〇四
宣政殿退朝晚出左掖……〃 一〇八
紫宸殿退朝口號……〃 一一〇
曲江對酒……〃 一一三
九日藍田崔氏莊……〃 一一六
野望……〃 一一九
登樓……〃 一二三
秋興四首……〃 一二七
吹笛……〃 一四九
閣夜……〃 一五一
返照……〃 一五五
登高……〃 一五七
閿下贈裴舍人……錢起 一五九
和王員外晴雪早朝……〃 一六一
自鞏洛舟行入黃河即事寄府縣僚友……韋應物 一六二
贈錢起秋夜宿靈臺寺見寄……郎士元 一六三
長安春望……盧綸 一六五
陸勝宅秋雨中探韻……張南史 一六七
鹽州過胡兒飲馬泉……李益 一六九
登柳州城樓寄漳汀封連四州刺史……柳宗元 一七一
奉和座部盧四兄曹長元日朝廻……韓愈 一七三

卷六

五言絕句

題袁氏別業……賀知章 一七六
夜送趙縱……楊炯 一八〇
易水送別……駱賓王 一八一
贈喬侍御……陳子昂 一八三

子夜春歌……郭振 一八四
南樓望……盧僕 一八六
汾上驚秋……蘇頲 一八六
蜀道後期……張說 一八七
照鏡見白髮……張九齡 一八八
同洛陽李少府觀永樂公主入蕃……孫逖 一八九
靜夜思……李白 一九〇
怨情……〃 一九二
秋浦歌……〃 一九三
獨坐敬亭山……〃 一九五
見京兆韋參軍量移東陽……〃 一九五
臨高臺送黎拾遺昕……王維 一九六
班婕妤……〃 一九七
雜詩……〃 二〇〇
鹿柴……〃 二〇〇
竹里館……王維 二〇二
長信草……崔國輔 二〇三
少年行……〃 二〇四
送朱大入秦……孟浩然 二〇五
春曉……〃 二〇六
洛陽訪袁拾遺不遇……〃 二〇七
洛陽道獻呂四郎中……儲光羲 二〇八
長安道……〃 二一〇
關山月……〃 二一一
送郭司倉……王昌齡 二一一
答武陵田太守……〃 二一二
孟城坳……裴迪 二一三
鹿柴……〃 二一四
復愁……杜甫 二一五
絕句……〃 二一六

長干行……崔顥 二一七
詠史……高適 二一八
田家春望……〃 二一九
行軍九日思長安故園……岑參 二二〇
見渭水思秦川……〃 二二一
登鸛雀樓……王之渙 二二一
終南望餘雪……祖詠 二二二
罷相作……李適之 二二三
奉送五叔入京兼寄蕭母三……李頎 二二四
左掖梨花……丘爲 二二五
九日陪元魯山登北城留別……蕭穎士 二二五
平蕃曲二首……劉長卿 二二七
逢俠者……錢起 二二八
江行無題……〃 二二九
秋夜寄丘二十二員外……韋應物 二二九
聽江笛送陸侍御……韋應物 二三〇
聞雁……〃 二三一
答李澣……〃 二三一
婕妤怨……皇甫冉 二三二
題竹林寺……朱放 二三三
秋日……耿湋 二三三
和張僕射塞下曲……盧綸 二三四
別盧秦卿……司空曙 二三五
幽州……李益 二三六
三閭廟……戴叔倫 二三七
思君恩……令狐楚 二三八
登柳州峯山……柳宗元 二三九
秋風引……劉禹錫 二三九
瑩路感懷……呂溫 二四〇
古別離……孟郊 二四一

韓隱者不遇……賈島 二四三
宮中題……文宗皇帝 二四四
勸酒……于武陵 二四八
秋日湖上……薛瑩 二四八
題慈恩塔……荊叔 二四九
伊州歌二首……無名氏 二四九
哥舒歌……西鄙人 二五一
答人……太上隱者 二五二

卷七

七言絶句

蜀中九日……王勃 二五六
渡湘江……杜審言 二五八
贈蘇綰書記……〃 二五九
戲贈越使君美人……〃 二六〇
銅雀臺……劉廷琦 二六三
邙山……沈佺期 二六四
送司馬道士游天台……宋之問 二六七
送梁六……張說 二六六
涼州詞……王翰 二六七
清平調詞三首……李白 二六八
客中行……〃 二八〇
峨眉山月歌……〃 二八一
上皇西巡南京歌二首……〃 二八二
聞王昌齡左遷龍標尉遙有此寄……〃 二八九
黃鶴樓送孟浩然之廣陵……〃 二九一
陪族叔刑部侍郎曄及中書舍人賈至游洞庭湖……〃 二九六
望天門山……〃 三〇一
早發白帝城……〃 三〇三

秋下荊門……李白 三〇四
蘇臺覽古……〃 三〇五
越中懷古……〃 三〇六
與史郎中欽聽黃鶴樓中吹笛……〃 三〇七
春夜洛城聞笛……〃 三〇九
春宮曲……王昌齡 三一〇
西宮春怨……〃 三一三
西宮秋怨……〃 三一四
長信秋詞……〃 三一五
青樓曲……〃 三一七
閨怨……〃 三一八
出塞行……〃 三一九
從軍行三首……〃 三二〇
梁苑……〃 三二四
芙蓉樓送辛漸……〃 三二四
送薛大赴安陸……王昌齡 三二五
送別魏三……〃 三二七
盧溪別人……〃 三二八
重別李評事……〃 三二八
少年行……王維 三二九
九月九日憶山東兄弟……〃 三三〇
與盧員外象過崔處士興宗林亭……〃 三三一
送韋評事……〃 三三二
送沈子福之江南……〃 三三三
春思二首……賈至 三三七
西亭春望……〃 三三九
初至巴陵與李十二白同泛洞庭湖……〃 三三九
送李侍郎赴常州……〃 三四〇
岳陽樓重宴別王八員外貶長沙……〃 三四一
封大夫破播仙凱歌二首……岑參 三四二

首宿烽寄家人……岑參 三四四
玉關寄長安李主簿……〃 三四五
達人京使……〃 三四五
磧中作……〃 三四六
虢州後亭送李判官使赴晉絳得秋字……〃 三四七
送人還京……〃 三五〇
赴北庭度隴思家……〃 三五一
酒泉太守席上醉後作……〃 三五五
送劉判官赴磧西……〃 三五六
山房春事……〃 三五七
寄孫山人……儲光羲 三五七
贈花卿……杜甫 三五八
重贈鄭鍊……〃 三六一
奉和嚴國公軍城早秋……〃 三六二
解悶……〃 三六五
書堂飲既夜復邀李尚書下馬月下賦……杜甫 三六八
塞下曲二首……常建 三六九
送宇文六……〃 三七一
三日尋李九莊……〃 三七一
九曲詞……高適 三七三
除夜作……〃 三七四
塞上聞吹笛……〃 三七五
別董大……〃 三七五
送杜十四之江南……孟浩然 三七八
寄韓鵬……李頎 三七九
九日……崔國輔 三八〇
題長安主人壁……張謂 三八〇
送人使河源……〃 三八一
涼州詞……王之渙 三八一
九日送別……〃 三八四

洛陽客舍逢祖詠留宴……蔡希寂 三八五
少年行……吳象之 三八五
江南行……張潮 三八六
軍城早秋……嚴武 三八七
重送裴郎中貶吉州……劉長卿 三八八
送李判官之潤州行營……〃 三八九
春行寄興……李華 三九〇
歸雁……錢起 三九一
登樓寄王卿……韋應物 三九二
酬柳郎中春日歸揚州南郭見別之作……〃 三九二
送魏十六還蘇州……皇甫冉 三九四
曾山送別……〃 三九四
寒食……韓翃 三九五
送客知鄂州……〃 三九六
宿石邑山中……〃 三九七
送劉侍郎……李端 四〇〇
楓橋夜泊……張繼 四〇二
聽角思歸……顧況 四〇五
宿昭應……〃 四〇六
湖中……〃 四〇七
夜發袁江寄李穎川・劉侍郎……戴叔倫 四〇八
寄楊侍御……包何 四〇九
汴河曲……李益 四〇九
聽曉角……〃 四一〇
夜上受降城聞笛……〃 四一一
從軍北征……〃 四一二
楊柳枝詞……劉禹錫 四一三
浪淘沙詞……〃 四一四
自朗州至京戲贈看花諸君子……〃 四一六
與歌者何戡……〃 四一九

涼州詞……張籍 四三一
十五夜望月……王建 四三三
送盧起居……武元衡 四三三
嘉陵驛……〃 四三五
漢苑行……張仲素 四三四
塞下曲二首……〃 四三五
秋閨思……〃 四三七
郡中即事……羊士諤 四三八
登樓……〃 四三八
酬浩初上人欲登仙人山見貽……柳宗元 四三九
題延平劍潭……歐陽詹 四三〇
聞白樂天左降江州司馬……元稹 四三一
胡渭州……張祜 四三三
雨淋鈴……〃 四三四
虢夫人……〃 四三五
度桑乾……賈島 四三六
成德樂……王表 四三七
漢宮詞……李商隱 四三八
夜雨寄北……〃 四四〇
寄令狐郎中……〃 四四一
秋思……許渾 四四三
江樓書感……趙嘏 四四四
楊柳枝……溫庭筠 四四五
折楊柳……段成式 四四七
宮怨……司馬禮 四四八
宴邊將……張喬 四四九
退朝望終南山……李拯 四五〇
華清宮……崔魯 四五一
古別離……韋莊 四五一
宮怨……李建勳 四五二

水調歌第一疊……張子容 四五三
涼州歌第二疊……〃 四五四
水鼓子第一曲……〃 四五四
雜詩……陳祐 四五五
初過漢江……無名氏 四五五
胡笳曲……〃 四五六
塞上曲二首……王烈 四五七
邊詞……張敬忠 四五八
九日宴……張諤 四五八
西施石……樓穎 四五九
和李秀才邊庭四時怨二首……盧弼 四六〇
宴城東莊……崔敏童 四六一
奉和同前……崔惠童 四六二
宿疎陂驛……王周 四六三
塞下曲……釋皎然 四六三
僧院……釋靈一 四六六

索引……（四六九—四八三）

唐詩選評釋

卷五

明　李攀龍　原本
日本　森大來　評釋

七言律

古意　沈佺期

盧家少婦鬱金堂。　海燕雙棲玳瑁梁。
九月寒砧催木葉。　十年征戍憶遼陽。
白狼河北音書斷。　丹鳳城南秋夜長。
誰爲含愁獨不見。　更教明月照流黃。

七言律詩も亦六朝に濫觴す、然れどもその結んで一體を成せしは斷として沈・宋に創まる。五言八句の沈・宋以前に於て已に誦すべきもの多きが如きの比に非ざるなり、則ち本選の沈佺期を以て開首とせるは最もその當を得たるものと謂ふべし。

五律は作るに難くして好詩を成すに易し、七律は作るに易くして好詩を成すに難し。蓋し五言は句旣に短促、歩歩古意を失はざらんことを要し、七言は字漸く數多、時に新意を出すに妨げず、是れその易なる處、已に新意を出すに妨げずと雖も、亦必ず氣魄全篇に充實し、屬對は穩なるべく、遣事は切なるべく、捶字は

老なるべく、結響は高なるべく、血脈動盪して首尾腰腹俱に渾成ならんことを期す、虛字を用ふる甚だ多ければ、勢ひ流利にして弱孱に入り、實字を用ふる太だ過ぐるときは、調膚廓にして呆板に落つ、是れその難なる處、若し一聯一句の警策を爭ひ、青を儷べ白を配し、紅を剪し綠を裁し、沾沾焉として自ら喜ぶもののごときは、斯れ則ち下劣の詩魔のみ、與に斯道の正法眼藏を語るべからず。この風晩唐に於て漸く成り、終に詞曲の先聲を開き、近代に至つてはまた、七律詩翁の嘲あり。今、于鱗の選する所を觀るに、力めて秀練高華のものを取り、一卑俗の句の堂に上るを許さず、以て詩の正變を盡すに足らざるも、取りて準的として時弊を拯救するに餘あり、若しその王維・李頎を心慕、手追するの極、終に杜少陵の雄奇崛鬱たるものを斥して頽唐自放なりとし、境を取る太だ狹くして、百年萬里・白雲明月の陋習を養成したるが如きは、是れ于鱗が選を恪奉するものゝ過にして、于鱗が選する所の詩の罪に非ざるなり。錢牧齋云はずや、于鱗の七律その字を擧ぐれば則ち三十餘字これを盡し、その句を擧ぐれば則ち數十句これを盡せりと。朱竹垞云はずや、于鱗の七律、句は重なり字は複し、氣、斷續して而して神、脈離す、亦絕品に非ずと。于鱗その人の七律に於ける大抵此の如し、然れば則ち太選錄する所のものに依つて、能く悟して最上一乘に到るも、將た誤つて旁門側徑に入るも、みな學者の如何に在り、その選の有唐傑特の作たるに於て、毫末も損益する所あらざるなり。

沈歸愚の云はく、沈雲卿が獨不見の一章は骨高く氣高く、色澤・情韻俱に高し、中唐の「鶯啼燕語報新年」の詩の味薄く語纖なるに視れば牀の上下を分てりと。蓋し詩は實情を貴ぶと雖も、亦必ずその品位の如何を顧みざるべからず、本篇閨中の思婦が邊塞の征人を憶ふの情を抒ぶる切にして至れりと雖も、絕えて一詞の纖

歸に渉るものなし、歸愚の評允當と稱するに足れり。本集に據れば本篇は則ち喬補闕知之に呈するの作にして、題して古意と云ふは梁の武帝が「河中之水歌」中の盧家少婦を借り來りて一篇の結構とし、樂府に獨不見の曲あるに由り、之を奏合して以て無限の離思を寓したればなり、故に又一に題して獨不見と云ふ、按ずるに獨不見は梁の柳惲の作る所、その詩、

別島望雲臺。　天淵臨水殿。　芳草生未積。　春花落如霰。
出從張公子。　還過趙飛燕。　奉箒長信宮。　誰知獨不見。

是れ宮娥の獨り長信宮に閉居して長く君主に見るを得ざるを傷むもの、獨不見の義推して知るべし。梁の武帝が河中之水歌は則ち云はく、

河中之水向東流。　洛陽女兒名莫愁。　莫愁十三能織綺。
十四採桑南陌頭。　十五嫁爲盧家婦。　十六生兒字阿侯。
蘆家蘭室桂爲梁。　中有鬱金蘇合香。　頭上金釵十二行。
足下絲履五文章。　珊瑚挂鏡燭生光。　平頭奴子擎履箱。
人生富貴何所望。　恨不早嫁東家王。

是れ專ら莫愁婦の憨態を寫す、本篇は卽ち之を活用し、莫愁の少婦にして轉た獨不見の悲況に落ちたるを述べ、その傷悲更に甚だしきを見る轉化の工を悟るべし、雲卿がこの作ある、想ふにその中宗の初め、杜審言等と鎖表に配流されしの時に在りて、當時喬知之は補闕を以て京師に在官したり、故に天涯遷謫の恨を少婦が別愁離緒に託し、遙かに寄せて哀を訴へたるに疑ひなきなり、而かも敢へて斥言せずして題するに古意を

以てしたるは所謂溫柔敦厚の敎を遵守するものなり。本事詩に據るに、喬知之の愛姬を窈娘と云ふ、美麗にして歌舞を善くし、色藝當時の第一たり、權臣武延嗣聞いて一見せんことを求む、知之勢の抑止すべからざるを以て、已むを得ずして之を送るに、延嗣終に奪つて肯へて還さず、知之憤痛して疾を成し、絲珠篇を作りて情を寄せ、密かに閽守に賂うて之を窈娘が許に達す、窈娘詩を得て悲惋感激し、井に投じて死す、延嗣大いに怒り、因つて酷吏に諷して知之を羅織し、之を死に致さしむと。斯れ知之は固より情に深き者、雲卿が託するに閨情を以てしたるは、能くその人を知るものに非ずと謂ふ可けんや。

鬱金の堂正にこれ盧家少婦の居る所、海燕あり來つてその玳瑁梁上に雙栖す、燕は則ち雙棲すと雖も、人は則ち離居せり、離居の人を以て雙栖の燕を看る、その情寧ろ耐ふ可き歟、正に獨不見の苦を寫さんと欲して、先づ燕の雙栖を寫し、反面より孑然獨立の狀を映射し出す、立意一に何ぞ工なるや、章法を以てこれを言へば、二聯を以て離離情を搖曳し、七句獨不見の三字を以て之を點破するが故に、故らに爰に雙棲の二字を着して、逆挑して意を見はしたるものなり。

九秋の月、寒砧斷續して、木葉蕭蕭の響と相和す、少婦にして若しその夫と雙棲する一に海燕の如くならん乎、この悲哉の秋光も猶ほ相慰藉するに足るべし、而して今は然らず、夫は遼陽を戍る十年にして曾て一たびも歸ることなし、白狼河は遼陽に在り、特に夫の歸期の知るべからざる而已ならず音書も亦已に久しく斷えたり、丹鳳城は鬱金堂の在る所、秋夜の長き、獨り空床を守り眼に看る所則ち海燕の雙栖なり、耳に聞く所は則ち寒砧落葉の凄切なり、この時この際、誠に何を以てか自ら堪へんや、二聯「音書斷」を以て「十年征戍」を一邊に排し、「秋夜長」を以て「九月寒砧」を緊住し、又、「憶」の一字を解釋して更に飛んで

末句の「明月流黄」に映ず、開闔自在の筆に非ずして何ぞや。

抑〻少婦の此の如くに含愁して自ら堪へざるは果して是れ誰が爲ぞ、獨り傷悲してその夫を見る能はざるが爲のみ、流黄の鐘は是れ少婦が曾てその夫と坐臥を共にせしもの、その坐臥を共にせし時に當りては、海燕の雙栖亦何ぞ羨むに足らん、而して今秋夜の長き、徒らに明月をして之を照らしむるのみ、その人は則ち見えざるなり、是に至つて木石の臭見も亦迴腸百結せざるを得ず、況んや莫愁の少婦をや、一結の悲、巴猿の月に叫び蜀宇の雨に哭するが如し、何人か情を移さざるものぞ。

唐の韋毅が才調集、亦雲卿がこの篇を收む、字句互異の處多し、姑く之を後に錄す。

織錦少婦鬱金堂。　海燕雙栖玳瑁梁。　九月寒砧催下葉。
十年征戍憶遼陽。　白狼河上音書斷。　丹鳳城南秋夜長。
誰知含愁獨不見。　使妾明月對流黄。

唐人を以て本朝の詩を選す、自ら當に據あるべし、然れども此れに從ふときは頗る失律の疑あり。清の馮默庵之を解して曰はく、古意は原と是れ樂府なり、故に平仄叶はず、品彙(唐詩品彙)派して律詩と爲す、故に許多の字を改却せりと、この說果して信ならば、本選の從ふ所は實に高樣が改竄に出でしなり。默庵又云ふ、下葉は寒砧之を催すなり、木の字に作れば呆にして笑ふべし、これ亦品彙の改むる所にして意以て下句に對せんとす、然れども木葉は遼陽に對すべきも、征戍は如何ぞ寒砧に對せんやと。又、云ふ、結末「誰知」「使妾」文義甚だ明かなり、一たび「誰爲」「更教」と改めて、便ち不通となれりと、この評甚だ理あり。且つ末句「流黄」の二字、今鐘色と做して解すと雖も、終に歇後不瑩の語たるを免れず、若し首句を「織錦少婦」に作るものとせば、則ちこの語、彼の三婦豔の「大婦織綺羅。中婦織流黄。」、周の王褒が詩の「淮南桂中明月影。淮黄機上織成文。」(燕歌行)等と齊しく、機中織る所の色と做して解すを得べし、則ち本詩を視て純然たる律調とせず、仍ほ是れ樂府の遺なりとするもの是に近からん歟。別本又鬱金堂を鬱金香に作る、是れ「河中之水歌」に「中有鬱金蘇合香」と云へるを混じたるものにして堂に作らずんば下の玳瑁梁と相連屬せず、斷として從ふべからざるなり。僧大典の解は流黄を以て帷帳の色とす、帷帳その物を異にすと雖も、その歇後の語たるは予が前說に同じ、高樣の改本若し從ふべくんば、此れ亦一說として參に存するに妨なし、因つて併せ錄して覆査に資す。

龍池篇

龍池躍龍龍已飛。　龍德先天天不違。
池開天漢分黄道。　龍向天門入紫微。
邸第樓臺多氣色。　君王鳧雁有光輝。
爲報寰中百川水。　來朝此地莫東歸。

長安隆慶坊の南に、民家の廢井一所あり、忽焉として湧いて小池と爲り周袤十數畝に亙る、常に雲氣あり

て散ぜず、或は黄龍のその中に游泳するを見る、既にして水益〻浸廣し遂に鴻洞たる一大池と爲り、里中の民悉くその居を移すに至り、望氣の者以て鬱鬱として帝王の氣ありと爲せり。中宗の神龍五年、帝舟を池に泛べ群臣を宴してその氣を壓し、號して龍池と云へり、而して玄宗帝が未だ卽位せざりし以前の舊邸は、實にこの龍池の側に在りしなり、玄宗登極に及んで邸宅を以て離宮となし、隆慶の隆字、帝の御諱を冒すを以て、改めて興慶宮と號し、姚崇・沈佺期等の詞臣に命じて龍池樂章十篇を作らしむ、本篇は蓋しその一章にして、則ち本篇の成るは實に玄宗帝始めて宮闈の濁亂を廓清し、新に寶位に登りし開元の初年に在るなり。須らくその語語符瑞祥徵を離れず、中興の氣象、蔚然として五十六字に充滿せるを玩味すべきなり。

龍池を以て篇を命ず、龍は是れ主、一筆題面の正位を提破して、以て玄宗卽位の頌に充つ、筆も亦飛龍冲天の勢あり、抑〻龍を以て君に喩ふるは易の乾卦已に然り、その九四或は躍つて淵に在りと云ふもの、譬へば猶ほ玄宗の未だ卽位せざるとき、この龍池の潛邸に在りしが如し、而して今入つて九五の尊位を踐む、故に「龍已飛」と云ふ、九五飛龍在天の語を用ひるなり、易の文言(繫)に云はずや、「先レ天而天弗レ違、後レ天而奉二天時一」と、今この龍池の徽德、亦能く姑語に切中するを見る、何となれば玄宗未だ天子と爲らざるに、龍已に池中に見はる、是れ所謂天に先だつものなり、既にして玄宗果して天子と爲る、則ち天の違はざるものなればなり、更にこれをその始に溯れば、この池無端にしてこの地に湧出す、想ふに嘗に天上雲漢の水の、日行黄道の側より分れて、以て豫め祥兆を示したるものなるべし。然らずんば、安んぞ龍のこの池より飛んで天門に向ひ、終に紫微の帝座に登ることを得んや、然らば則ち玄宗の今日あるは、龍池湧出せしの時に於て、早く已に天の默契する所たりしを知るなり、以上前半段。龍池天の三字を疊用して一種の奇格を創す、

その神化自在なる、越女の劍を論じ宜僚の丸を轉ずるが如し。黄道は日行の軌道なり、紫微は泰帝の座なり、池を以て黄道に屬し、龍を以て紫微に屬す、並に玄宗の龍池舊邸より入つて天子と爲りしを影寫する所以なり。

龍池の龍は已に飛んで天に在り、潛邸の玄宗は已に入つて寶祚を履む、是に於て乎池畔の邸宅は、化して宮殿と爲り、その氣色一新して頓に舊觀を改めたり、池中の鳧雁も亦此れよりは尋常の鳧雁に非ず、則ち君王の御物として一倍の光輝を加へたるを見る、豈に千秋の一大慶事に非ずや、夫れ百川の水は東に流れて海に朝宗す、此篇結語乃ち之を翻用し、寰中百川の水の盡くこの龍池に來朝せんことを願ふものは、玄宗始めて四海に君臨したれば、天下億兆の心を歸すること一にこの水の如くならんことを希望するの意なり、以上後半段。前半は意を龍の一邊に用ひ、後半は詞を池の一邊に措く、齊しく新帝登極の慶を述ぶと雖も、前は龍を借つて之を虛寫し、後は池に就きて之を實寫す、合して之を觀れば壯麗堂皇、典重比なし、眞に毫髮も遺憾なきものと謂ふべし。

この篇起手疊字法を用ふるが爲に、その音節を拗して全篇を振起す、崔顥が黄鶴樓の作と同例に屬す、沈碻士(德潛)は謂ふ、雲卿が龍池篇、崔司勳が黄鶴樓は意を象先に得て、筆の到る所を縱にし、遂に古今の奇を擅にせり、所謂章法の妙は句法を見ず、句法の妙は字法を見ざる者なりと、この語卽ち正鵠に中れり。

侍宴安樂公主新宅應制

（侍宴安樂公主新宅應制）

皇家貴主好神仙。　別業初開雲漢邊。
山出盡如鳴鳳嶺。　池成不讓飲龍川。
粧樓翠幌教春住。　舞閣金鋪借日懸。
敬從乘輿來此地。　稱觴獻壽樂鈞天。

安樂公主は中宗の女、その新宅に群臣を延して置酒賦詩せしは、中宗景龍三年十一月の事にして、五言律詩及び排律の部に歷見したる、李嶠が長寧公主東莊の侍宴、韋嗣立山莊の應制、宋之問が沙門玄奘等の荊州に歸るを送るの詩、晦日昆明池の作、及び沈佺期が回波の舞詞を爲したる等、みな同年の事實にして、中宗修文館を設け、盛んに李嶠以下の文人名士を網羅し、日に游幸飲讌を事とせし時に在り。故に時代を以て論ずれば此れ前の龍池篇に比して數年以前の作ならざるべからず、特に彼の作を把つて上に列したるものは、その詩の優劣を以て之を次第したるものゝみ、詩に因つて史を考へ人を知り世を論ぜんと欲するものは、須らく先づこの點に着眼して、細かに參核を加へざるべからざるなり。

按ずるに中宗卽位の二年閏正月丙午、太平・長寧・安樂・宜城・新都・定安・金城の七公主に制して、並に府を開き官屬を置かしむ。是れ宮闈の權勢內外を傾くるの始めにして、長寧以下の六公主はみな中宗の女、就中安樂最も寵あり、初め武三思の子崇訓に適し、崇訓の誅せらるゝに及んで又、武延秀に降嫁す、官を賣

り獄を鬻ぎ、驕橫傳恣至らざる所なく、甚だしきは自ら制勅を作りて、その文を掩ひ、中宗に遍りてこれに親署せしむるに至る。これを以て當時の宰相以下、亦多くその門に出でたり、又、太子を廢して自ら皇太女と稱せんことを圖りて遂げず、卽ち長寧公主と俱に競うて第舍を起し、侈麗を以て相高うし、宮掖に擬して精巧之に過ぎたり、時に昆明池を請うて大いに園囿を營まんと欲せしに亦許されず、乃ち更に民田を奪うて一大池を鑿し、石を累ねて華山に象どり、水を引いて天津に擬し、昆明に勝らんことを欲して名を定昆池と命ず、その平生繫ぐ所の裙は錢一億に値し、織る所の花卉鳥獸みな粟粒の如く、正視・旁視・日中・影中・各〻一色を爲せしと云ふ。窮侈極欲、以て類推すべし。而して中宗庸弱の君、愛に溺れて之を優容し、左拾遺京兆辛替否が上疏に、「公主は陛下の愛女なり、然り而して用は古義に合はず、行は人心に根せず、將に恐らくは愛を變じて憎となし福を翻して禍と爲さんことを、何となれば人の力を竭し、人の財を費し、人の家を奪ひ、數子を愛して三怨を取り、邊疆の士をして力を盡さず、朝廷の士をして忠を盡さゞらしむればなり」云云と直言せしむるに至つて顧みず、その極終に弑逆・簒奪を圖りて毒を中宗に進む、此れ韋后の逆謀に出づると雖も、安樂實に與つて力あり、玄宗の事を擧ぐるに及んで率先誅に伏し、悖逆庶人の貶稱を得て臭を千歲に貽す、安樂公主の如きものは洵に死して餘罪ありと謂ふべきなり、而して沈佺期等が侍宴應制の作を見るに、滿紙の諛辭備至せざるなし、その倖免して玄宗の朝に事ふるに至つては、則ち又安樂に媚ぶる所のものを以て玄宗に媚び、極口頌揚惟、及ばざらんことを恐るゝ彼の龍池篇の如きあり、文人の特操なき、一に以て此に至る、何ぞ無恥の甚だしきや。

首句に好神仙の三字を着す、全首立言乃ち此に胚胎す、次句承くるに雲漢の邊を以てし、末結ぶに鈞天廣

樂を以てす、みな是れ神仙の本事なり、則ち山にして鳴鳳、池にして飲龍、以て粧樓の春を住め、舞閣の日を懸くるに至るまで、亦俱に仙家の樂趣に外ならず、是れ字句の針線なり、合して而して之を觀、その命意を疏釋すれば、即ち第一句は是れ安樂公主、第二句は是れ公主の新宅、前聯は新宅前後左右の景を寫し、後聯は新宅の結構を鋪敍す、七八は是れ侍宴應制の本題、不盡の言なく不顯の意なく五十六字渾然として天成し、一句を增すべからず、一字を減ずべからず、洵に七律の上乘なり、鳴鳳は嶺の名、因つて借りて蕭史・弄玉・吹簫引鳳の事とし、以て公主の身分に切ならしむ、飲龍川は即ち渭水なり、池は蓋し昆明池を指す、安樂のこの池を鑿する、本と勝を昆明池に求めんと欲す、今池にして飲龍の大川に讓らずと云へばその夐かに昆明池に勝れるの意は言外に隱躍たるなり、春秋代序は天候の常經、公主の粧樓翠幌、乃ち獨り長く春を駐むるかと疑ふ、その富貴想ふべし。日月雙懸は天子の城闕、公主の舞閣金鋪、却つてその光を借る、その寵幸の深き亦知るべきなり、この二句力を極めて公主の恩榮を寫すと雖も、亦適〻以てその驕僭の甚だしきを見るべし、韋后の敗に及んで蒼黃として戮に就く、洵に惜しむに足らざるなり。

紅樓院應制

紅樓疑見白毫光。　寺逼宸居福盛唐。
支遁愛山情漫切。　曇摩泛海路空長。

經聲夜息聞天語。　爐氣晨飄接御香。
誰謂此中難可到。　自憐深院得徊翔。

紅樓院は長安の嘉猷觀中に在り、武后の朝此に於て內廷の佛事を修す、故に內道場と云ふ。蓋しその內廷に接近せるを以て極めて車駕の出入に便なるが故なり、この一篇立意亦此に在り。

寺の宸居に逼近せる、第二句に於て之を點明す、是れ正面の題意なり、已に宸居に逼近す、則ち常人の妄に到るべき所に非ず、是れ反面の題意なり、二聯先づ開いて反面に入り、後、闔して正面に歸る、七八は則ち常人妄に到り難きより推拓して、自己が偏に其中に徊翔するを得たるを喜び、感恩の意を以て應制の體に合す、これを全篇の組織とす。

破題則ち云はく、「紅樓疑見白毫光。」と、寺院を名づくるに紅樓を以てす、看て甚だ不倫に似たり、然れども接するに「疑見白毫光」の五字を以てすれば、則ち名は紅樓と雖も實は寺院たること言下に提醒せらる、而して紅樓白毫、色相を以て空相に對し、造語精麗自ら異樣の文粹を煥發す、是れ詩家煉字の法なり、知らず他が落筆の時、如何かして想うて這の步の田地に到れるを。

支遁は晉の高僧、曾て邛山を買うて以て隱栖に充てんとす、是れ愛山の故事。曇摩は達摩なり、泛海は即ち一葦西來の事を指す、この二人なるもの、一は邛山を買はんと欲して得ず、故にその情漫に切なり、一は泛海して來ると雖も、その機に契せず、終に面壁九年端居して逝く、故にその路空しく長し、豈にこの院の宸

居に過りて反つて如來眉間の白毫光を見るに如かんや、而して漫と云ひ空と云ふ、その中自ら方今若響ありと雖も斷じてこの禁近清切の地に到る能はざるの意を蘊包す、所謂先づ開いて反面に入るものなり。

經聲・爐氣みな寺院中の物、天語・御香は、明かに是れ宸居なり、則ち經聲夜息んで微に天語を聞き、爐氣晨に飄りて暗に御香に接す、寺の宸居に過るに非ずして何ぞや、この聯上聯を反挑して第二句を申言す、所謂後、闔して正面に歸るものなり。

「誰謂此中難可到。」「此中」の二字後聯を一束す、「難可到」の三字前聯に一映す、而して又「誰謂」の二字を冠して末句を提起したり、深く自己が此中に徊翔するを得たるを榮とするなり、首に「紅樓」の二字を點し、結句に又「院」の一字を醒す、寺名を析用せるに於て亦活變を極めたり。

再入道場紀事應制

南方歸去再生天。　内殿今年異昔年。
見闘乾坤新定位。　看題日月更高懸。
行隨香輦登仙路。　坐近爐烟講法筵。
自喜深恩陪侍從。　兩朝長在聖人前。

この詩の道場は即ち前詩の紅樓院なり、沈佺期武后の敗に及んで嶺外に流竄せられ、中宗即位、再び召されて修文館の學士を拜す、此詩は蓋しこの時の作、紅樓院應制の時に視れば佺期に在つては當に恍として隔生の如きものあるべし、故に鼓篇立意の在る所亦竄かに前篇に同じからず、專ら重きを再入の一邊に置けり。

起句は嶺南放竄の後重ねて召還を蒙りしを言ふ、是れ自家の身分より落筆するもの、明かに再入の根と爲し、又、生天成佛を以て召還に比して道場の爲に端を發す、唯この七字全首の神理鉤攝せられざるは無し、次句は再入の所見にして、前聯の爲に大綱を提す、昔年と云ふものは則ち紅樓院應制の日を指すなり。

中宗朝に臨んで一時の人文盡く京師に聚り、頗る太平雍容の盛觀を極む、武后末年の穢亂に視れば、氣象頓然として一新せり、故に「見闘乾坤新定位」と云ふ。而して「看題日月」の語より推測すれば、當時必ず宸翰の題額の新にこの道場に掛けられたるものありしなるべし、是れ即ち昔年に異なれる所以にして、再入に由つて始めて之を見ることを得たりしものなり、「新」・「更」の二虚字、特に再入のために之を點逗す、並に泛然に非ず。

後聯二句は再入の時の事實を直寫す、行〻香輦に隨ふ、是れ自己扈從の列に在り、座は爐烟に近し、是れ天子道場の筵に臨む、合して之を見れば、中宗時に法筵に行幸ありて自己陪駕の榮を荷ふことを得たりしなり、是れ題目の所謂紀事にして自己が再入を得たるの所以亦分明ならざるはなし、故に七八に於て抃喜の情を致し、中に頌德の語を寓して以て應制の意を足成したり、兩朝は武后・中宗の二朝を言ふ、而して今年、昔年の二語、恰もこの二字中に收束し了らる。

遙同杜員外審言過嶺

天長地濶嶺頭分。
洛浦風光何所似。
南浮漲海人何處。
兩地江山萬餘里。

去國離家見白雲。
崇山瘴癘不堪聞。
北望衡陽雁幾群。
何時重謁聖明君。

此れ則ち雲卿、嶺外に流竄せられし時の作、次第を以て論ずれば前數詩の前に屬す、宜しく之を開卷に錄すべきものたり、武后の朝、張易之兄弟の敗るゝや、沈・杜の二人俱に易之の黨を以て遷謫せられ、沈は驩州に流し、杜は峯州に流せらる、二州共に嶺外の邊陬に在り、而して驩州は唐の時安南都護の治下に屬す、舜の禪を堯に受くるや、首として四凶を竄逐し、驩兜を崇山に放つ、蓋し卽ちこの地、故に州は驩を以て名づく、詩中に所謂崇山瘴癘亦これを指すなり。沈・宋、唐初に於て首として應制の體を創し、雄麗瑰偉千古に冠絕すと雖も、而かも感寓言情の諸作は固とその所長に非ず、故に此等の作、神氣沮喪して每に觀るに足るものなし、予七古に於て已に宋之問がこの篇を見て和酬するの一詩を取らず、沈がこの篇、その品亦實に彼と伯仲の間に在り、故に今は唯〻略〻その字句を梳櫛して止まんとす。

沈・杜の二人相前後して嶺を過ぐ、杜は當に沈が前に在るべし、故に題して「遙同」と云ふなり、國を去り家を離れて同じく貶謫の路に上りしよりこの嶺頭に至りて始めて分岐して、一は巳に峯州に赴き、一は將に驩州に行かんとす、天長地濶にして、各〻相聞ゆることを得ず、前程渺莽として惟〻白雲を見るのみ、前聯は次句に緊接して洛浦の風光を以て「去國離家」を申し、崇山の瘴癘を以て「見白雲」を申す、洛浦は則ち家國の有る所、而して南荒風土の迥異なる、一も以てその風光に似たるものあるなし、崇山は將に行かんとするの地、卽ち眼前白雲容容たるの處、その中彼の瘴癘の氣の恐るべきものありと聞きては、身未だ到らずと雖も早く已に堪へざるものあるなり、「聞」の字「見」の字に射映して尤も玩味に耐ふ、後聯は天長地濶を承けて兩人遠竄の苦況を句敍す、「南浮漲海」は杜審言を指稱す、「人何處」と云ふものは杜已に沈に先だつて貶所に赴けばなり、「北望衡陽」は沈自ら言ふ、相傳ふ雁は衡陽に至つて復た南せず、故に上に回雁峯ありと、而して今は乃ち衡陽を北に望まざるべからず、是れ足は巳に極南の地に在るなり、「雁幾群」とは疑似不了の詞、當にこれあるべからずして偶〻一あり、卽ち沈自ら況する所以なり、この一聯巳に二人を包括す、故に七句、「兩地」の二字を明點して自らこれが解釋に當て、更に「江山萬餘里」を以て上文の意を一束し、轉じて恩赦を切望するの意を開出し、跌落して以て結句となす、この詩固より至れる者に非ずと雖も、然れどもその文字の針線を尋繹すれば、斷じて法とすべきもの無きに非ず、之を後世率爾命題して支離滅裂復た收拾すべからざるものに觀れば、豈に霄壤の別のみならんや、唐詩の尙ぶべき所以寔に此に在り。

興慶池侍宴應制

滄池滃沆帝城邊。
夾岸旌旗疏輦道。
雲峯四起迎宸幄。
宴樂已深魚藻咏。

韋元旦

殊勝昆明鑿漢年。
中流簫鼓振樓船。
水樹千重入御筵。
承恩更欲奏甘泉。

韋元旦は京兆萬年の人、進士の第に擢でられ、東阿の尉に補し、左臺監察御史に遷り、亦張易之と姻婭の親を訂す、張の敗るゝに及んで、感義の尉に貶せらる。後、復た用ひられて中書舍人に終ふ、この詩は蓋し玄宗即位後の作、即ちその中書舍人たりし時の作なり、興慶池は卽ち龍池、事は沈雲卿が龍池篇に詳具す、この詩未だ龍池篇の操縱自在の致に乏しと雖も、宏麗典雅、亦初唐應制語篇中有數の作なり。

起正面より着筆し、先づ興慶池を點破す、「滄池滃沆」の四字は張衡が西京賦中の語、用ひ來りて恰も合す、滃沆は寬大の貌なり、昆明池の事亦已に屢〻見ゆ、彼れは漢武が疏鑿せし所、此れは則ち天然の龍池、豫め玄宗登極の瑞を兆す、復た人工を用ひず、是れ相較べて殊に勝れりとなす所以なり、夾岸の輦道旌旗の片片たるを見る、明かに天子、池上に游幸あるなり、中流の樓船、簫鼓の嘒嘒たるを聞く、船中御讌のすでに開かれしを知るなり。この二句「疏」の字「振」の字、用ひ得て殊に靈活、「疏」は疏通の疏、蓋し輦道は雲樹の間に在り、遠より之を望む、辨別すべからず、旌旗の林立せるあるに依つて始めてその輦道なるを認知し得たるを狀するなり、後聯の「雲峯」「水樹」その神理乃ちこの一字に由つて攝し出さる。「振」の字は解釋を待たず、而してこの字あつて始めて簫鼓樓船みな活動し、後聯の「四起」「千重」宛として響應するが如きを覺ゆ、神來の筆と謂ふべきなり。

雲峯は四もに起りて而して迎ふ、是れ宸幄は中流の船に在ればなり、この七字の第四句を承くるを知るべし。寶樹は千重にして而して入る、是れ御筵の夾岸の道に對すればなり、この七字の第三句を頂するを悟すべし、二聯を合して之を觀れば則ち亦惟〻是れ滄池滃沆中の景象、都べて天子の供御に備ふ、興慶池侍宴の題意、曲々俱に寫し到らざる所なし、故に七八應制の意を足して以て結ぶ、魚藻は周雅、天子諸侯を宴して而して諸侯天子を美するの什たり、甘泉は漢賦、成帝甘泉に郊祀して、楊雄扈從の列に居り、盛んに之を鋪張侈陳せしの作たり、その魚藻と曰ひ甘泉と曰ふ、その字面みな池水に緣故あり、是れ作者が殊更に之を用ひし所以にして、而かも文脈自然少しも附會の痕跡を留めず、所謂金銀銅鐵之を一鑪に鎔かしてその雜を覺えざる者、渾然として化に入るの妙あり、今人偶〻その渾成を學べば則ち呆笨と爲り、その巧細を學べば則ち纖仄と爲る、これみな膚流膚淺の見、復たその神理自然の處を解識する能はざるに由る、詩の一悟を重んずるは此れが爲のみ。

漢の武帝が秋風辭に云はずや、「汎楼船兮濟汾河。横中流兮揚素波。簫鼓鳴兮發櫂歌。歡樂極兮哀情多。少壯幾時兮奈老何。」

而して楊雄が述作は史に勸百諷一の譏ありと雖も、甘泉・諫獵の諸賦の如きは、その意の歸着する所實に侈盈を申戒するに在り、元旦がこの篇、四句に中流の簫鼓を用ひ、八句に甘泉の賦を用ふ、前後映帶してその頌中に規を寓するものなるを知る、然れども語みな含蓄蘊藉にして絶えて一筆を露はさず、風人溫敦の旨に協へり、興慶侍宴同時の作、沈佺期・蘇頲等亦みな七律を以てす。沈が詩に云はく、

碧水澄潭映遠空。　紫雲香駕御微風。　漢家城闕疑天上。
秦地山川似鏡中。　向浦迴舟萍已綠。　分林蔽殿槿初紅。
古來徒羨橫汾曲。　今日宸游聖藻雄。

蘇が作に云はく、

降鶴池前迴步輦。　棲鸞樹杪出行宮。　山光積翠遙疑遏。
水態含青近若空。　直視天河垂象外。　俯窺京室畫圖中。
皇情未使恩波極。　日暮樓船更起風。

この二作造詞固より高妙ならざるに非ず、然れども沈が詩、「橫汾曲」は亦漢武の秋風辭を用ひて、而して「徒羨」と云ふ、是れ頌ありて規なきなり。蘇が詩七八、これも亦秋風辭を根本として、而して「更起風」と云ふ。則ち諷意太だ露はれ、之を君主の前に唱ふるは、未だ甚だ不祥の語たるを免るゝ能はざるものあり。韋が此篇の一唱三歎循環回味に耐ふるが如きの比に非ざるなり、滄溟彼れを捨てゝ此れを取る、亦善く馬を牝牡驪黃の外に相するものと謂ふ可き歟、清初の朱東巖は韋が此篇を評して「前四句是頌後四句是規」と云へり、知らず前後の兩段各、その末句に於て微に規意を見るのみ、斷じて此の如く分別して看るを容れざることを、

瞶瞶者流の言深く辨ずるを須ひず、初學の或は惑はんことを恐れて特に一言する耳。

天寶中、興慶池上に小龍あり、出でゝ宮垣の南なる溝水中に游び、蜿蜒たる奇狀、衆人瞻觀せざるは莫し、祿山の長安に逼るに及んで、玄宗蜀に幸するの前一夕、人みな此龍の雲雨に乘じて池中より昇り、西を望んで去るを見たり、玄宗嘉陵江に至るに、忽ち龍あり舟を翼して進む、上泫然として流涕し、左右を顧みて曰く、吾が興慶池中の龍なりと、命じて酒を以て之に沃がしむ、是に於て彼の龍振甲して天に昇りしと云云、事は小說家言に見ゆ、固より信を置くに足らず、然れども亦玄宗の符瑞に惑へる深きを徵するに足る、韋・蘇の二篇の規箴を寓する豈に偶然ならんや。

侍宴安樂公主新宅應制

蘇頲

駸駸羽騎歷城池。　帝女樓臺向晚披。
露灑旌旗雲外出。　風廻巖岫雨中移。
當軒半落天河水。　遶徑全低月樹枝。
簫鼓宸遊陪宴日。　和鳴雙鳳喜來儀。

この詩重きを天子に歸す、故に公主の新宅を以て破題せずして、天子の行幸を以て落筆す、極めて立言の

體を得たり。駸駸たる羽騎、蹕蠎を擁し城池を歴て、馳驟して去る、是れ鴛の安樂公主が新宅に幸するなり。因つて第二句に於て帝女樓臺を明點す、起句に「歴城池」と云ふ、則ち新宅の遠く市城を離れて雲靜の間に在るを知るべし、是に於て前聯の專らその遠を寫すあり、承句に「樓臺向晩披」と云ふ、則ちその地の高く巖壑の表に聳出せるを見るべし、是に於て後聯の專らその高を寫すあり、結末「簫鼓宸游」「雙鳳來儀」仍ほ公主の雙栖を以て之を天子の御筵に繫ぎ、主客輕重首尾一貫して少しも紊亂せず、謹嚴の至なり。

前聯の筆路は首句を頂すと雖も、風露雲雨の諸景象、實は「向晩披」の三字より開出す、雲外の旌旗、露灑いで出づ、是れ途中驟雨の光景、雨中の巖壑風廻つて移る、是れ山上乍ち晴るるの時候、兩句眞に暮山雨霽れて、千乘萬騎の夕陽明滅中に出沒するを觀るが如し、銀河の水、半ば落ちて軒頭に當り、月中桂樹の枝、全く低れて徑畔を繞る、後聯高きを狀するの工、此の如くにして、而して妙は銀河の織女、月宮の嫦娥、その意を裏面に隱躍して、暗に公主の宅たるを點逗するに在り、之を綜ぶるに前聯は實寫にして後聯は虛寫なり、而かも天河月樹に公主を陰影すとせば、是れ虛中に實あるなり、然らば則ち前聯の實中、果して虛寫なき乎、曰く有、有、他なし、此れ山雨乍晴の景を寫すと雖も、亦暗に「風伯清レ塵雨師灑レ道」の意を虛用して、以て天子の駕幸に適切ならしめたるものなればなり。

「簫鼓宸游陪宴日」一句是れ侍宴の正文、有鳳來儀は尙書(益)の字面、今一雙字を着けて、公主の身分に貼す、蓋し公主この時已に武延秀に嫁したるを以てなり、此れ瑣事と雖も亦故典活用の法に參すべし。

蘇頲は蘇瓌の子、父の封爵を襲ぎて小許公と號し、夙に玄宗の知遇を受け、聲望燕國公張說と相捋し、今に至つて燕許の大手筆と稱す。曾て春游應制の詩を作る、「飛埃結紅霧。游蓋飄青雲」の

句あり、玄帝之を覽て擊賞し、遂に御花を以て、親しく頲が巾上に挿む。時人之を榮とす、又張九齡その文卷を閲し、同僚に謂つて曰はく、蘇生の俊贍天下に敵なし、眞に文陣の雄帥なりと。頲、少うして父に得られず、常に僕夫傭保と雜處す、而かも猶ほ學を好んで倦まず、每に書を讀まんと欲するに、又燈燭なきを患ひ、馬廐の竈中に於て自ら火光を吹き、之に由りて讀誦することを得たりと云ふ、その力學此の如し、一時の推服する所と爲る、良に以あり、詩の如きは特にその餘技のみ。

奉和春日幸望春宮應制

東望望春春可憐。
宮中下見南山盡。
細草偏承回輦處。
宸遊對此歡無極。

更逢晴日柳含烟。
城上平臨北斗懸。
飛花故落舞觴前。
鳥弄歌聲雜管絃。

望春宮は隋の文帝の創建に係り、長安滻水の西に在り、煬帝の時、名を長樂宮と改め、唐に於て更に舊名に復す、地は長安の東方に位せるを以て、唐初歴朝の天子、春日此に幸して以て東郊迎春の故事に擬したり。この詩は玄宗の御製に和して作るもの、詩意甚だ明晰、解疏を須ひず。

前聯高壯の狀を寫し得て出づ、終南の山連脈蜿蜒、宮中より之を下見すれば一望して以て盡すべく、眼前城市に平臨したれば雲物蒼茫として北斗の高懸するを視る、蓋し北方の曠濶なるを以てなり。後聯は卽ち游幸の現狀、細草の萋萋たる偏へに回輦の處を承くるを喜ぶが如く、飛花の片片たる故らに舞觴の前に落つるを榮とするに似たり、飛花・細草、原と是れ非情の物、則ち一「偏」字、一「故」字に由つて、卻つて意ありて然るものゝ如し、是れ造語の妙にして、無情を化して有情と爲す、所謂非非想に入るものなり。要するに前聯は上句の晴日含烟より開拓し、後聯は首句の可憐の二字より胚胎す、結句の鳥聲管絃は則ち細草飛花の餘波なり。

同時張說が詩、

別館芳菲上苑東。　飛花澹蕩御筵紅。
闕對南山雨露通。　遶殿流鶯凡幾樹。
春園既醉心和樂。　共識皇恩造化同。

崔湜が詩、

澹蕩春光滿曉空。　趙遙御輦到離宮。
臺榭參差煙霧中。　庭際花飛錦繡合。
卽此歡娛齊鎬宴。　唯應率土樂薰風。

駘蕩穠秀の光景、色を設けて點染す、大致は約略として相類せり、然れども終に蘇がこの作に及ばざるものは全く氣格の渾成なるに在り、凡そ詩を作る、必ず興會を待つ、興會來らざるときは神氣屬せず、神氣屬

せざれば同一の事を詠じ同一の景を賦すと雖も、必ず一片の活趣を缺き、之を萬世に傳ふること能はず、諸作を合觀して細かに考較し去れば、亦以てこの理を悟すべきなり。

奉和初春幸太平公主南莊應制

主第山門起灞川。　城臨渭水天河靜。
鳳凰樓下交天杖。　山河眺望雲天外。
往往花開逢綵石。　當蹊亂蝶許多叢。
今朝扈蹕平陽館。　枝間鳥囀管絃同。

宸遊風景入初年。
烏鵲橋頭敞御筵。
時時竹裏見紅泉。
不羨乘槎雲漢邊。

灞水は長安の南、秦嶺より出づ、主第にして灞川に臨めり、明かに是れ公主が南莊たるなり、初春において游幸の事あり、故にその時序を點明す、三四は是れ駕幸を寫す、而して弄玉が鳳凰樓、織女が烏鵲橋、並に公主の第宅たるに映合せしめたり。五六は是れ南莊の景物、綵石紅泉と云ふものは、當時天仗御筵の盛、錦帳繡幕、翠蓋彩支、樹林流水の間を點綴し、照耀映發、石も亦綵を帶び、水も亦紅ならんと欲するを狀するなり。而して往往と云ふ、林巒の屛疊たる知るべく、而して時時といふ、溪壑の紆折せる思ふべし、仙源仙境、人をして應接に暇あらざらしむ、是れ結尾に雲漢を羨まざるの意を言ふ所以なり。

前安樂公主が新宅の詩、天河月樹を以て公主を形す。この作弄玉織女の事と作法極めて相類せり。然れども彼れは只新宅の高爽を狀して、暗に公主に切ならしむるのみ、此れは則ち明かに鳳凰樓・烏鵲橋を明示してその指斥する所を表す、是れ明用・暗用の別なり、又、後聯、綵石の二字は暗に織女が支機石の事を含みて、烏鵲橋の語脈を引き、以て結句乘槎雲漢の伏線と爲したり、此等の處は斯道に三折肱するものと雖も、恐らくは未だ容易にその妙味を領略する能はず。

平陽公主は漢武の姉、一時驕僭淫縱を極めたる、殆ど唐の太平公主に讓らず、今、蘇頲此を以て太平に擬す、借用に出づると雖も未だ託諷する所なしと謂ふべからざるに似たり。

幽州新歲作　張說

去歲荆南梅似雪。　今年薊北雪如梅。
共知人事何嘗定。　且喜年華去復來。
邊鎭戍歌連日動。　京城燎火徹明開。
遙遙西向長安日。　願上南山壽一杯。

此れ當に五律選中幽州夜飲の作と並論を爲すべきもの、即ち燕公檢校幽州都督たりし時の作なり。是より

先き姚崇と合はざるを以て岳州に貶せらる、岳州は即ち湖湘、古の荆楚の地なり。是に至つて又遙かに北方幽州の軍を督す、天南地北、風土氣候の異、實に霄壤の差のみにあらずして、而して身の遷客たるは一なり、京師輦轂の下に於て堯天舜日を瞻る能はざるは一なり、是れ此篇の歎慨を發するに止む能はざる所以なり。

去歲荆南に在るや、地暖かにして梅開くこと雪の如くなりき、今年薊北に來れば則ち天寒くして積雪梅の如し、同一新歲の節物にして、その夐異なる、一に以て此に至る。而して同一の我れ親しくその境を歷てその景を觀たれば、我が居止の定まらざる實に驚くに堪へたるものあり、是れ他なし、偏へに人事の常なきに坐するのみ。但し臘盡き春回る年華の次序に於ては、去歲・今年、少しも相違する所あるなし、是れ人事は定まりなしと雖も、且つこの新歲を迎へて、聊か自ら慰藉せざる能はざるなり。以上の命意、重きを人事定めなきの一邊に置き、一身の萍蓬流轉を嗟歎す、是れ本篇發慨の端なり。

「邊鎭戍歌連日動。」一句正面より幽州の新歲を寫し、「京城燎火徹明開。」斗然として轉じて側面に入り發慨の本意を逼出し、依依戀闕の誠忱を致して以て結ぶ。用筆の捷快なる洵に天然にして克く臻る、斷として人工を用ひざるものなり、身は幽州に在りてこの戍歌の連りに動くに當り、心に京城を憶うて、遙かに燎火の徹夜通宵、禁闕を照耀するを想像す、同一新歲の事のみ、而して戍歌の動くは凄悲極まりなく、燎火の明かなるは繁華何ぞ限らん、凄悲に居りて繁華を想ふ、即ち是れ發慨の本意、上文荆南・薊北の感より更に竿頭の一步を進めたり、去歲荆南に梅を看る、亦是れ長安に在らず、今年薊北に雪に逢ふ、亦是れ長安に在らず、この身の流轉は猶ほ人事の不定として自ら遣るべし、その終に殿陛に承趨して親しく捧日の誠を至尊が前に披陳するの期無きに至つては、天耶人耶、將た之を奈何せん、則ち只西向の一拜、遙かに南山の壽を上り、

聊か聖壽の無疆を祝して已まんのみ。一腔の慨意、此に至つて覺えず流露す、而かも亦一語の怨憤に渉るものなし、正に幽州夜飲のいはゆる「不作邊城將。誰知恩遇深。」と同一の筆法、彼此參觀して愈〻詩の婉曲を貴ぶの理を悟るに足るべきなり。

滻湖山寺

空山寂歷道心生。　虛谷迢遙野鳥聲。
禪室從來雲外賞。　香臺豈是世中情。
雲閒東嶺千重出。　樹裏南湖一片明。
若使巢由同此意。　不將蘿薜易簪纓。

「道心生」の三字を以て一篇立意の骨子とし、直ちに貫いて七八の二句に到り、自己が未だ塵累を脱する能はざるを以て慨みとす、亦是れ失意の篇、滻湖は沅湘澧汨の諸水の滙聚する所、地、荊楚に在り、則ち張岳州に貶せられし時の作たるを見るべし。

歩して空山寂歷の處に至れば、風塵中の客と雖も、亦油然として道心の生起するを覺ゆ、蓋し虛谷迢遙たる數里が間、耳に聞く所は野鳥の聲のみ、絶えて人蹤なき知るべきなり。此の如き靜寂空漠の地、正に淨業を修め、清眞を養ふに適す、卽ち我が凡夫も亦一點の道心を動かさざるを得ず、然らば則ち此に於て一梵刹あるは最もその所を得たるものなり。三四は山寺の爲に加一倍の寫法を用ふ、世固より城市の間に堂塔伽藍の壯を誇り、閭閻の中に莊嚴金碧の美を競ふものあり、是れ徒らに浮屠を炫耀して愚民を蠱惑す、已に佛家虛寂の理に無き、亦修眞見道の旨に違へり。夫れ參禪の室は、必ず白雲の外に在るべし、燒香の臺、豈に塵世の物ならんや。而してこの寺は乃ち空山寂歷の間、虛谷迢遙の內に在り、洵にその所を得たるものに非ずして何ぞや、五六は寺中所見の景、兼ねて「寂歷」「迢遙」の狀を剖析す、千重東嶺の積翠、白雲窈渺の間に參差として疊出す、その深幽なる此の如し。宜なり寂歷として人なきや、一片南湖の明光、綠樹鬱葱の中より、隱約として見ゆ、その曠濶なる想ふべし、故に迢遙として涯なきなり、是に於て我が道心愈〻動いて禁遏すべからず、然れども身は已に出仕を行へり、貶落せらると雖も亦謫臣たり、今に及びて棄てて去らんとするは臣子の義に非ず、嗚呼若し我をして早く道心を生じ、巢父・許由とこの意を同じうせしめば則ち應に初めより蘿薜の幽棲を以て簪纓の榮位に易へんとはせざるべかりしに、惜しいかな、當初に於て巢由の踪を追ふに心なく、以て今日遷謫の悲況に淪し、空山虛谷に來るも、養靜樂眞の人と爲る能はざるを致せり、是れを歎喟すべしとす。是れ七八命意の在る所なり。

「樹裏南湖一片明。」七字、寫景の工、盡も及ばざる所あり、南湖は卽ち所謂滻湖なり。「若使巢由同此意。」の句は「若使」の下に「與」の一字を加へて解釋せんと要す、然らざれば二句の意終に貫下する能はざるなり、坊刻本巢由の下に「ヲシテ」と旁訓したるあり、是れ正に何の解を爲すやを知らず。「雲外」「雲閒」、特に字の複するのみならず、語格亦頗重の嫌あり、但し前聯は山寺に就いての議論、後聯は寺中所見の景物

なるを以て虛實の差あるのみ、借りて以て口實と爲すことを得ず、一本には「物外」に作れり。

遙同蔡起居偃松篇

清都衆木總榮芬。　傳道孤松最出群。
名接天庭多景色。　氣連宮闕借氛氳。
懸池的的停華露。　偃蓋重重拂瑞雲。
不惜流膏助仙鼎。　願將楨幹捧明君。

張の本集、この篇末猶ほ「莫比冥靈楚南樹。朽老江邊代不聞」とあり、乃ち知る是れ十句五韻の變調、尋常八句格と同じからず、且つこの二句の意を審して、始めてこの篇は亦岳州謫官の時の作なるを徵す、今刪削に從ふときは、律調の正格に入ると雖も、終に作詩の本意を沒却せざるを得ず、惧むべきなり。

偃松は松形偃蹇、屈蟠して四邊に披起し、張蓋の狀の如きものを云ふ。蔡起居は蓋し當時京師に在るもの、張、謫所に在つてその詩を讀み、自己が遷謫淪落に感あり、因つて遙かに此篇を和して以て寄與す、乃ち偃松を借つて、以て蔡起居が清切禁近の地に在りてこの才藻を呈することを得たるを羨美し、楚國の冥靈の江邊に

朽老して終に諸を闕廷に致すこと能はざるを以て自況したり、冥靈は楚國の樹の名、南華經に見ゆ、岳州は乃ち楚の地なり。

起、清都の二字を以て全篇を領す、この二字直ちに貫いて第八句に至れり、張が望を帝都輦轂の下に致す所以のもの、惟、此れ已に之を窺ふに足るべし、清都の衆木は總べて榮芬を帶ぶ、蓋しその帝居に接近せるを以て、みな欣欣然として榮に向ふの意あるなり、而して衆木中に於て殊に孤松の最も出群なるを覺ゆ、「傳道」と云ふものは蔡起居が詩あるに依つて之を知ることを得たるが故なり。夫れ京師は人才輻輳の地、而して蔡起居が才藻の美、この詩篇の如きあり、譬へば猶ほ孤松の衆木榮芬中より擢出するが如し、落筆命題の意、卽ち松を以て蔡に比す、以下松を詠ずるものは筆筆みな蔡を詠ずるものなるを知るべきなり。

この松已に天庭宮闕の間に接して、一たび天子の宸賞を經、その名大いに著れ、五雲氛氳の景象を借り得て、倍〻鬱葱の佳氣を長ぜり、明かに松の宮庭に在るを言うて、蔡が禁近に官するを羨美するなり、然れども二句は重きを天庭宮闕の一邊に置く、卽ち只〻松の榮幸を言ふのみ、その何を以てか衆木の上に傑出したるやは未だ之を文字に形せず、是を以て後聯二句あり。

この松横枝側出して高く池面に懸り、その葉上、的的として空際の華露を停め、偃蹇の態宛も翠蓋を覆ふが如く、その陰、重重として地上の瑞雲を拂へり。上文の「多景色」「借氛氳」の六字、この二句に由つて解し出され、而して偃松特殊の形狀斷として衆木の比に非ず、從つて蔡起居が才華詞藻の贍美なる、遠く時流に超出するを見るなり、起句より一氣して此に到り、偃松を賦するもの盡態曲妍せざるはなく、因つて次二句に於て筆を轉じて松の特效と資質とに入り、併せて蔡が材能眞に棟梁の器たるに協へるを述ぶ。妙は前

六句純ら松を咏じて人を裏面に藏し、此に至つて忽ち「不惜」「頗將」の兩虛字を用ひ、松を以て人に繫け、略〻雙關の意を一露したるに在り。

千年松脂の膏、地に入りて茯苓と爲るときは、之を服するに益壽延年の效あり、故に仙道を修せんとするものは每に之を重んず、植幹は卽ち松の本莖、以て人の材質に比すべし、この二句の意、松を以てせば、分明に是れ宮廷の松、他處に移易し得ず、人を以てせば則ち又至誠奉公、鞠躬盡瘁して止まざるの概あり。是れ一面に蔡を美すと雖も、他の一面には、暗に自己が抱負を寓するものあり、我れをして京師に在りて禁近に侍せしめば、決してこの松この人に愧なきを信ず、而して今は然らず、遂に楚南冥靈の樹となりて江邊に朽老し、沒世不聞を以て終らんとす、寧ろ憐むべきにあらずや、此の如くに解釋せば、何人も亦末句の尤も必要にして刪るべからざるを感ずべきなり。

奉和春日出苑囑目應令

賈曾

銅龍曉闢問安廻。　金輅春遊博望開。
渭水晴光搖草樹。　終南佳氣入樓臺。
招賢已從商山老。　託乘還徵鄴下才。
臣在東南獨留滯。　忻逢睿藻日邊來。

賈曾は河南洛陽の人にして少うして至孝の聞あり、玄宗の東宮に在るとき、太子舍人と爲りてその特達の知を受け、のち、直言極諫を以て諫議大夫と爲り、蘇晉と共に制誥を掌り、時に蘇・賈の目あり、詩意を按ずるに、亦仍ほ是れ玄宗太子たりしとき、曾偶〻洛陽に在り、太子の遙かに春日出苑囑目の詩を寄せて和を徵せられしに因り、令に應じて作りしものなり。天子の命を奉じて詩を賦するを應制と曰ひ、太子の教を奉ずるを應令と曰ふ、蓋し秦法に太子は令と稱すと謂へるに本づくなり。

この詩前四句は是れ春日出苑囑目の正文、後聯は當時太子賓客唱酬の盛況、結末は自己遠方に在りて獨り遐棄せられず、感恩の語を作して以て奉和應令の實事を述ぶるなり、通篇用ふる所みな太子の故事、細かに疏剔を施さずんば、恐らくは作者苦心の處を埋沒せん、故に先づ、その故事を臚陳し、その意義を剖明す。

銅龍は門の名にして、漢書成帝紀に帝嘗て太子を宣召して銅龍門より出でしむとあり、蓋し門樓上に銅龍を飾れるが故に名づけたるなり。問安は文王世子たりしとき日に三たび父王の安を問へることを用ふ、唐書車服志を按ずるに、皇太子の車に金輅あるものは、從祀朝賀納妃等の大禮に用ふとあり、是れ金輅は明かに太子の車なり、又漢書に、武帝元年に於て太子の爲に博望苑を立て賓客を通ぜしむること見ゆ、卽ち博望は太子の苑の名なり、商山の四皓山を出でて太子を輔佐するは人の能く知る所、則ち鄴下の七才子、魏文帝の猶ほ太子たりしときに於て、屢〻公讌應酬の作あるは、亦顯著の典なり。晉の明帝少うして聰叡、日と長安と孰れか近きの問に對して、長安は近し、人の日邊より來るを聞かずと云ふ、末句の「日邊來」此を暗用し、既に以て太子に切ならしめ、亦當時太子の長安に在るを隱躍せしめたり。

銅龍の句は是れ太子出苑の根。銅龍の門、曉に當つて闢けり、明かに太子は東宮を出でたり、是れ何の爲

ぞや、他なし、父皇が問安の爲に出でて宸闕に朝するなり、此の如くに着筆して而して出苑は是れ逸豫のためならざるを見る、その立言の妙自ら一代の定式たり、金輅の句は是れ春日矚目の由、太子の車今は廻り來れり、苑外の春物駘蕩として人を動かす、乃ち矚目の中、詩興盎然として生じ、懷に觸れ情を抒べざるに已む能はざるものあるなり、渭水の晴光は、澹として草樹に搖ぎ、終南の佳氣は、鬱として樓臺に入る、是れ卽ち矚目の景、太子固より光景に留連して歸ることを忘るゝものに非ずと雖も、この風光に對しては那んぞ金輅を停めて暫らく坐賞せざるを得んや、以上所謂春日出苑矚目の正文なり、然れども「博望開」の三字の中、亦自ら後聯太子の諸賓客を領起す、文字の灰線此に一伏す、卽ち後聯鶺突の病なし、學者の尤も忽せにすべからざるものなり。

抑〻太子の英明なる、賢を招きては已に老成練達、商山の四皓の如きを左右に隨從し、才を徵しては又、辭章藻麗、鄒下七子の如きを後乘に託載し、乃ち此輩と賡酬屬和して以て知識を交換す、當時太子が矚目の作一たび成つて、此等應令の才儁、雲の如く、荼の如きの盛況、實に想像に餘あり、而して自己は官太子舍人として偶〻事を以て東南洛都の故鄉に留滯し、獨りこの盛事に陪するを得ず、遺憾何ぞ堪へん、然るに今忽ち日邊の睿藻、遙かに長安より垂示の榮を蒙る、我が菲才を以て、殊に遠方に在る、猶ほ齒錄を荷すとせば、太子が招賢徵才に急なる、微善と雖も擧用せられざること無きを知るべし、安んぞ欣然として命に應じ一篇を奉和せざるを得んや、託乘は楚詞の字面、託は附載するの意なり、洛陽は東都にして河南府の治に屬す、正に長安の東南に在り、故に云ふなり、敢へて洛都と云はざるものは己れが故土なるを以て卑下の意を寓するなり、一本に東周とあり、蓋し亦洛は周の東都たるを以てなり、商山四皓は東園公・綺里季・夏黃公・甪里先生、鄒下七子は孔融・陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・應瑒・劉楨。

奉和初春幸太平公主南莊應制　李邕

傳聞銀漢支機石。　復見金輿出紫微。
織女橋邊烏鵲起。　仙人樓上鳳凰飛。
流風入座飄歌扇。　瀑水當階濺舞衣。
今日還同犯牛斗。　乘槎共泛海潮歸。

李北海の碑版、天下を聳動し、前後の製する所凡そ數百首、饋遺を受納すること、多く鉅萬に及び、時議以て古より文を鬻ぎて財を獲たる未だ邕が如きものあらずと爲すに至れり。その武后の朝に在りては頗る危諫を以て聞え、張易之の權を用ふる、人その口を畏れて、而して邕はその角を折り、韋后の勢を恃める、言出で禍應じて、而してその鋒を挫く、是を以て屢〻貶責に逢ふと雖も、終に屈することなく、仕へて玄宗の朝に及びて累りに詞賦を獻じ、甚だ帝の旨に稱ふ。のち、張說の搆陷する所と爲り殆ど刑辟に觸るゝを致せしと雖も、名聲赫赫として天寶の初めに亙り、四十年間獨步の譽あり、傲岸傑卓の士と稱するに足る。而して又その愛才虛己の懷、往往後進を誘掖し、杜少陵の如きも亦少壯の時に於て深くその奬引を蒙れり、その

當代の文字を論ずる、楊盈川を推して崔融・蘇味道を揚げ、李喬を斥けて張說に服せず、燕公の之を忌刻して終に以て擠陷の毒を逞しうするに至る、亦此れがためなり、北海の人と爲り大略此の如くなるときは、この詩侍宴應制の作と雖も、必ず專ら頌揚を盡して止むものに非ず、則ち通篇前きに錄する所の蘇頲の詩と相似たるものあるも、その意に至つては筆筆風霜を挾み、語語鋒刄を帶ぶ、未だ日を同じうして語るべからざるものあるなり。詩中の故事、織女銀漢、張騫乘槎を以て公主の莊宅に切ならしむる等は、已に蘇作其他に於て屢〻之を解析す、故に今復た喋辨せず、讀者彼此參核して、細かに文字の線索を尋繹せば、自ら瞭然たらんのみ。

「傳聞」「復見」の二虛字を以て起承の二句を領起す、則ち大いに怪訝の意あり、張騫槎に乘じて銀漢を溯り、織女の支機石を得て歸りしと云ふは、昔之を傳聞に得たり、荒唐幻冥の說曾て信を措かざる所、蓋し人間復た見るべからざるの事と思へばなり、而して今や天子の金輿は紫微の宮闕を出でたり、その去つて向ふ所は、織女の烏鵲橋なり、仙人の鳳凰樓なり。總べて車駕の公主が南莊に下幸する洵に異事たるを形容す、則ち己れが當に有るべからざるの事と信じたるもの、誰れか圖らん今眼のあたり之を目睹せんとは、驚疑せざらんと欲すと雖も得べからざるなり、烏鵲起つて橋を爲すときは則ち牽牛、織女と相會し、鳳凰飛んで樓に入るときは、則ち蕭史、弄玉と相見る、男女雜坐して、耳鬢相磨し、羅襦半ば解けて微に蕙澤(香氣)を聞く、その事固より訓すべからず、今車駕の南莊に幸するに依りて此あるを致すとせば、獨り驚疑に堪へざるのみならず亦大いに寒心を爲すべし、この意言外に躍然たり。

歌扇舞衣は御筵の宜しく有るべき所、然れども亦已に流風に飄されたり、亦已に瀑水に濺がれたり、一

「飄」字、一「濺」字に由つて、當日滿座の朝臣・宮娥等、嬉戲、顚倒、狼藉の情態を繪がき盡くす、正に杜少陵が「麗人行」に虢國兄妹が淫縱を狀して「楊花雪落覆白蘋。青鳥飛去銜紅巾。」と云へると同筆法たり、亦以て天子の如何に懦弱にして公主の如何に驕逸なるかを想ひ見るべし、是に於て七八仍ほ起手に呼應して斷として宜しく有るべからざるの事たるを申言し、一「犯」字を用ひて力諍苦諫の意を致したり。銀漢・乘槎は我が斷として荒唐なるを信ずる所なりと雖も、今日の事實は着着之を實するの跡あるを如何にせん。若し此等の逸游を廢せらるゝに非ずんば、始め信ぜざりし我も亦之を信ぜざるを得ざるに至り、終に我が皇を以て聖德の君と稱する能はざるに瀕すべければなり、この意を以て結とす、北海が强項不屈の概、千秋の下、猶ほ人をして想慕せしむ。

「鳳凰樓下交天仗。烏鵲橋頭敞御筵。」「織女橋邊烏鵲起。仙人樓上鳳凰飛。」皮相を以て之を見ば、只その酷だ相似たるを怪むのみ。然れども彼れは天仗・御筵を主とす、鳳樓・鵲橋みな假稱に過ぎず、此れは則ち烏鵲・鳳凰を主とす、その裏面は前陳の如き諷刺を包藏せり、斷として此れを以て彼れに諷意ありと謂ふことを得ず、亦斷として彼れを以て此れただ公主の第を泛言するのみと謂ふことを得ず、能く語氣の輕重を判し、參するに作者の性情を以てし、形似のために誤を致さず、是の若き乎詩を讀む、亦必ず一隻眼を具せざるべからざるなり。

張說の詩を論ずるに曰はく、楊盈川の文思は懸河の水に注ぐが如く之を酌めども竭きず、既に盧照隣に優り、亦王勃に減せず、又李嶠・崔融等の文は良金美玉の如く施すとして可ならざるは無し云云、是れ半は李北海が持論と相合す、何を以てか相扼して少しも貸さず、終に反目して視るに至れるや、甚だ解すべからざるが

如し。饒虞山は曰はく、是れ崔・李は已にみな沒して、邕獨り說と名を爭ふ、故に說が猜忌に出づと雖も、亦邕の才を露はし己を揚ぐる、以て之を取ることありたるなりと。其れ或は然らん乎、杜少陵八哀の詩、邕がこの事を述べて、「論文到崔蘇味道。指盡流水逝。近伏盈川雄。未甘特進(李嶠)麗。是非張相國(說)。相扼一危脆。」と、蓋し亦實を紀するなり、八哀の詩、邕が人と爲りに於て曲悉せざることなし、推して「鍾律儼高懸。鯢鯨噴迢遞。」と云ひ、又「衮俗凜生風。排蕩秋旻霽。」と云ふが如き、北海の風概恍として覩るが如し、讀者若し杜集を開いて參觀せば、亦知人論世の一端たらずんばあらず。

和左司張員外自洛使入京中路先赴長安逢立春日贈韋侍御及諸公

孫逖

忽覩雲閒數雁廻。　更逢山上一花開。
河邊淑氣迎芳草。　林下輕風待落梅。
秋憲府中高唱入。　春卿署裏和歌來。
共言東閣招賢地。　自有西征作賦才。

題意に據ればこの詩蓋し左司張員外なる者洛陽よりして西し長安の帝都に使す、未だ闕廷に詣らざるに先づ長安縣に赴く、偶〻立春の日に逢へり、因つて一詩を賦して韋侍御及び諸官僚に贈りたるを、孫逖觀て以て之に和したるなり。詩意を按ずれば、その先づ長安縣に至るは當時の宰相此に家したるを以て之に謁せんがためなる如く、又所謂諸公は卽ち禮部の諸大僚を指すもの〻如し、詩甚だ淺率、只その初盛の間に在るを以て、氣格自ら後世に同じからざるを玩味すれば則ち足らんのみ。

前四句は連續して看んことを要す、卽ち是れ所謂「逢二立春日一」ものなり、逖よりして之を言へば、則ち張員外が途中に見るところ當に此の如くなるべきを想像したるなり。雁の回るは煖の催すがため、花の開くは節の至るがため、共に立春の日たるを描寫す、河邊の草は淑氣を迎へて漸く芳に、林下の梅は輕風を待つて將に落ちんとす、物物是れ立春の光景、而してその「覩」と云ひ「迎」と云ひ「待」と云ふ、みな「逢」の一字を相襯染す、亦工整と稱すべし、落の字或は「始」の義と做して解す、是れ尤も適切に似たるなり。

秋憲は御史執法の官、凜として秋霜の如くなるべきを以て然か言ふ、韋侍御を指すなり、春卿は禮部の宮、此に依つて題の諸公は禮部を指すを知る、東閣招賢は宰相の家を言ふ、亦この句に依つて題の「先赴長安」は宰相に謁するものなるを知るべし、東洛より來る、故に西征と曰ふ。

黃鶴樓

崔顥

昔人已乘黃鶴去。　此地空餘黃鶴樓。

黄鶴一去不復返。
晴川歷歷漢陽樹。
日暮鄉關何處是。
煙波江上使人愁。
白雲千載空悠悠。
芳草萋萋鸚鵡洲。

崔顥がこの詩、眞に沈歸愚が所謂意を象先に得たるもの、天然の神韻、五十六字に充滿して一句を湊泊すべからず、黄庭經を寫して恰も好處に至るとは、殆ど此を謂なり、李太白黄鶴樓を過ぎ、顥がこの篇を讀みて擊節嘆賞し、乃ち「眼前有レ景道不レ得。崔顥題詩在二上頭一」と言うて而して筆を擱して復た作らず、劉後村盛んに古人服善の虛懷を推して、美を太白に歸すと雖も、然れども顥が作亦實に空靈跌宕にして彼の謫仙人をして、低首せしむるものあるを知るべきなり。

沈雲卿（佺期）が龍池篇、所謂「龍池躍龍龍已飛。龍德先天天不違。池開天漢分黄道。龍向天門入紫微。」筆を用ひる兎起鶻落の如く、擒縱の自在なる、名狀すべからず、是れ實に顥が生平心服して手摹せんと欲する所のものなり、故に顥、雁門胡人の詩を作るに於て、曾て一たびその格に傚へり、云はく、

高山代郡東接燕。　雁門胡人家近邊。
能將代馬獵秋田。　解放胡鷹逐塞鳥。
聞道遼西無鬬戰。　山頭野火寒多燒。
時時醉向酒家眠。　雨裏孤烽濕作煙。

然れども此れ到底卑弱にして以て雪卿を追踪するに足るものにあらず、料るに顥自らも亦以て及ばずと爲せしならん、是に於てその黄鶴樓を賦するに當り、再びその格調を摹せんと欲し、沈思苦吟の餘、忽然として異想天開し、一片の神機は、流れてこの五十六字を成したり。是れ獨り氣格の高く雲卿の上に出でたるのみに非ず、亦獨り當代の詩仙を屈服せしめたるのみに非ず、寔に萬古の絶唱として、今に至るまで、敢へて逼視するものあることなし。蓋し天機の觸發する所は强ひて求むべからざると同時に、亦往往不用意にして之を獲たり、作者その人に在つては殆ど亦自ら何に由つて得たるやを知らず、顥がこの作の如きも初心亦ただ雲卿を規摹せんと欲せしに過ぎず、而して一旦神旺し氣暢び、直ちに胸臆を擧げて、卻つてこの高渾の大篇を成す、顥に在つても實に意料の外に出でたるならん。袁隨園（枚）云ふ、英雄初めより大志なく、風雲の機會、自然にその人に逼りて終に經天緯地の事業を開創するものありと。光武が官は執金吾を願ひ、妻は陰麗華を望みたるの事を擧げて以て之を證す。余は則ち顥がこの作に於て窃かにこの語を移贈せんと欲するなり。

詩已に神氣の流注を貴む、則ち頭より尾に至る一氣連讀するを要す、斷じて毎句に甚解を求め、ために語勢をして間隔する所あらしむべからず。昔人は已に黄鶴に乘じ去つて、この地空しくその樓を餘し、以て後世に傳へたり、昔より今に及ぶまで黄鶴は返らず、只白雲千歲悠悠として空しく存せり、この樓に登れば、所見は則ち晴川の遠樹、芳草の長洲、歷歷萋萋として人をして情自ら已む能はざらしむるものあり、故に日暮に登臨して遙かに鄉關を望めば、悠悠たる白雲、何處なるやを認め出す能はず、ただ江上の煙波の微茫浩淼として愈、我が愁思を生ぜしむるあるのみ。第一句「昔人已乘黄鶴去。」一本黄鶴を白雲に作れり。然れども細かに前四句の神理を考ふれば、黄鶴樓を過ぎて則ち黄鶴より落筆し、之を疊用して第四句に至り、忽ち

「白雲千載空悠悠」を以て之を頓住す、水流れ花開くの妙あり、若し第一句に於て豫め白雲の二字を着け、然る後、後二句に於て、更に前二句の白雲・黄鶴を疊用せしものとせば、是れ作者に於て已に一片の作意あるものとなりて、天然放筆の活趣を缺き、終に第二義に墮つるを免れず、故に從ふ能はざるなり。黄鶴樓は漢江に臨み、江を隔つる七里にして卽ち漢陽縣あり、鸚鵡州は魏の黄祖が禰衡を殺せし處、衡嘗て鸚鵡賦を作る、故に此を以て名とせしなり。

この作千古の絶唱たるを以て、亦後世紛紛聚訟の說を滋す、或はその古體にして律詩にあらざるを辨じ、或はその半律半古體たるを以て別に一格に備ふべしと云ふ。抑、詩の高情遠志は、區區體製格調の末に於て上下左右され得べきものに非ず、吾れはただその黄鶴樓の詩たるを知るのみ、古たると律たるとは敢へて問ふ所に非ず。李西涯（東陽）が懷麓堂詩話に云はく、律は尤も問、古意を出すべし、古は律に涉るべからず、この篇は律にして間、古を出す、要するに自ら脉はずと。此れ稍、持平の論に屬す、又、范德機は曰ふ、絶句にして若し先づ後の二句を得、詩にして先づ中聯を得んは、此れ最も詩を作るの大病なり、起ありて後に承あり、承ありて後に轉あり、轉ありて後に合あるは、此れ秩然の序なり、若し先づ後の二句を得ば、則ち起承に於て必ず貫串せず、先づ中聯を得て後に首尾を得ば、則ち起結必ず自然に出でず、譬へば老杜の「一片花飛減却春」及び「老去悲秋强自寬」等の如き、又崔顥が黄鶴樓の「昔人已乘黄鶴去」の如きは豈に先づ中聯を得るものならんや。詩を作るは最も起句を難しとし、中聯は最も體を得んことを要す云云。此れ固より鄉塾課童の說、神明變化の理を忘れてただ起承轉合の瑣末を講ず、殊に最上一乘たる本篇に於ては寸毫も輕重する所なしと雖も、今世詩家の空疎淺率なる、此等見易きの理をすら、聵聵乎として自ら知らず、支離滅裂、乃ち以て詩と爲すもの往往にして有り、是れ余が特に之を採錄せざるを得ざる所以なり。

李太白一たび筆をこの篇に擱して後、猶ほ深くその風格を愛慕し、則ち鸚鵡洲の一篇を賦したり。

鸚鵡來過吳江水。　江上人傳鸚鵡名。　鸚鵡西飛隴山去。
芳洲之樹何青青。　煙開蘭葉香風暖。　岸夾桃花錦浪生。
遷客此時徒極目。　長洲孤月向誰明。

此れ偶、一たびこの調を彈じたるのみ、勝を爭ふに意あるに非ず。後聯の如きは純然たる初唐の麗格、顥が作に比して覺然として自ら別なり、又、鳳凰臺に登るに及んで、興會の到る所又別に一機軸を出す、詳かに太白が條下に具す、要するに彼れ別に寄託あり、顥がこの作と雌雄を決せんが爲には非ざるなり。太白の夜郎に流竄して放還の命を蒙るや、江夏を過ぎて韋南陵冰に贈つて云はく、

「我且爲君槌碎黄鶴樓。君亦爲吾倒却鸚鵡洲。赤壁爭雄如夢裏。且須歌舞寬離憂。」

此れ蓋し憂愁憤悶慨懼不平の餘、黄鶴樓を槌碎し鸚鵡洲を倒却せんとす、所謂故らに豪快の語を作して以て胸中の磊塊を一吐するものなり。然れどもその言頗る狂に近し、故に醉後丁十八に答ふるの詩を作つて以て嘲を解く、云はく、

黄鶴高樓已槌碎。　黄鶴仙人無所依。　黄鶴上天訴玉帝。
却放黄鶴江南歸。　神明太守再雕飾。　新圖粉壁還芳菲。
一州笑我爲狂客。　少年往往來相識。　君平簾下誰家子。

云是遼東丁令威。　作詩調我驚逸興。　白雲繞筆窗前飛。
待取明朝酒醒罷。　與君爛漫尋春暉。

此れその狂を嘲るに依つて、更に又その事を實にす、游戯の文字有らざる所なくして態、太白が縱逸横絶の高風、灑灑落落の曠懷を見るに足る、曾て一語も崔顥が黄鶴樓の詩篇に關渉する所なきなり。而して唐末五代の初に當りて一禪僧あり、黄鶴樓下を過ぎ太白がこの詩の事を拈して一公案とし、偈を作つて云ふ、

一拳搥碎黄鶴樓。　一脚踢翻鸚鵡洲。
崔顥題詩在上頭。

旁ら一游僧更に竿頭の一歩を進め、題して云ふ、

有意氣時消意氣。　不風流處轉風流。

又一僧贊して云ふ、

酒逢知己。藝壓當行。

分明に是れも亦太白が搥碎云云の語と、その「眼前有景道不得。」云々の語と、この兩事を湊合して辭を設け、借りて禪家悟道の一案と爲したるに過ぎざりしなり。然れどもこの一偈ありてより、終に後、人紛紜の說を釀し、太白、崔顥が詩に及ばざるを羞ぢ、再三刻苦すと雖も、到底その敵すべからざるを知り、焦躁して黄鶴樓を搥碎し鸚鵡洲を翻倒せんとすと云ふに至れりとの謬解を生ずるに至る、洵に噴飯すべし、その最も謬乖なるを明の瞿宗吉とす。彼れその歸田詩話に於てこの事を記して云はく、崔顥、黄鶴樓に題するの詩、太白之を過ぎて更に作らず、時人に「眼前有景道不得。崔顥題詩在上頭。」の讖あり、又太白別に「搥碎黄鶴

樓」の句あり、その顥に於ける未だ嘗て耿耿たらずんばあらざるなりと。是れ獨り搥碎の語を以て太白、顥がために憂すと爲すのみならず、又太白自道の語を誤つて時人が刺讖に出でたるものなりと爲す。所謂悠悠耳食の論、眞に齒牙に掛くるに足らざるものなり。楊昇庵に至つては、搥碎云云の語を以て全く禪僧に始まるものとし、丁十八に答ふるの古詩を、宋人の僞作なりとし、明初の學士解縉が太白を弔するの詩に、「也曾搥碎黄鶴樓。也曾踢翻鸚鵡洲。」の句あるを嘲りて、殆ど優伶副淨・太保の語に類す、噫太白一に何ぞ不幸なるやと謂へり（丹鉛雜錄卷十八搥碎黄鶴樓）、而して此れ亦太白が江夏韋南陵に贈るの詩に於て實にこの語あることを知らず、搥碎の黄鶴樓詩の爲ならざるを辨ずるは善しと雖も、全く太白の語に非ずとして、遂に丁十八に答ふるの一篇をも併せ誣ひ、目するに僞作を以てす、その妄斷に至つては更に瞿佑に過ぎたるものあり。昇庵は明の中葉に於て頗る通才の目あり、而かも猶ほ一知半解、師心自是、僅かに目睫の及ぶ所を以て之をその臆擬に逞す。甚だしいかな讀書の難きや。後人昇庵を論じて、千里に明かなるも眼前に失すと謂ふ、吾れはその確當なるを信ぜんと欲す。乾隆帝、太白が鳳凰臺の詩を批するに於て則ち云ふ、後世白、實に崔に擬して以て勝負を較ぶと謂ひ、謬を搥碎鶴樓等の篇に致すが如きに至つては、鄙陋の談一噱に値せざるなりと。此れ大いに我心を獲たり。因つて細かにその本末を舉げ、爲に致謬の緣由を辨ずること右の如し。

黄鶴樓は武昌黄鶴山の麓黄鶴磯の側に在り、相傳ふ蜀の費禕屍解して仙と爲り、黄鶴に駕して此に來り憩ふ、樓故に以て名づくと。是れその一說なり。又、武昌志に據れば、昔、一仙人あり辛氏の酒樓に到り、一黄鶴を壁に畫がきて以て酒債に當つ、坐する者手を拍つて歌へば、壁上の畫鶴節に應じて舞ふ、故に衆人錢を費して之を觀る、十年許にして辛氏巨萬の富を累ねたり、後、彼の仙人飄然として至り、忽ち笛を取つて數弄を

吹けば、畫鶴飛んで仙人の側に來る、遂に之に跨り雲に乘じて去ると。是れ又、一說なり。李太白が詩「黃鶴樓中吹玉笛」（與史郎中欽聽黃鶴樓上吹笛）云云は則ち後說を用ひたるもの丶如し。又、江夏辨疑に、大江江夏郡の西を過ぎ、稍〻北して既に漢水を受け滙して大灣と爲る、郡人傳へて以て煙波江と爲し、その傍の村を煙波村と曰ふとあり。宋の胡仔、此を駁して顥が所謂「煙波江上使人愁」は斷として江名に非ざるを辨ず。其言や善し、然れども、安んぞ崔がこの句あるに依つて、後來その地を名づけて煙波江と爲せしに非ざるを知らんや、亦以てこの詩流傳の廣を徵すべし。

行經華陰

岩嶢太華俯咸京。
天外三峯削不成。
武帝祠前雲欲散。
仙人掌上雨初晴。
河山北枕秦關險。
驛路西連漢畤平。
借問路傍名利客。
無如此處學長生。

崔顥は汴州の人、開元十一年の進士にして、俊才あり、たゞ行履稍〻劣にして蒲博を好み、酒を嗜み、妻を娶るに美なるものを擇み、少しく意に恢はざれば、即ち之を棄て、前後その配偶を易ふること數回に及びしと云ふ、故にその少年の作は概ね意を浮豔に屬して多く輕薄を踏めり。李北海曾てその才名を聞き、舍を虛しうして之を邀ふ、顥至りて詩を獻ず、首章に曰はく「十五嫁王昌。」と、李亟之を觀て叱して曰はく、小兒無禮なりと、終に復た面接せずして歸り去らしむ。然れどもその詩に於ける刻苦の工を極む、一時苦吟詩瘦の譏を得たり、宜なりその晩年に及びて、忽ち常體を一變し、遂に殷璠が所謂風骨凜然として鮑照・江淹をして慚色あらしむに至れること、黃鶴樓並に本篇の如きはみな即ち風骨凜然たるもの、斷としてその人を以てその詩を廢する能はざるなり。

黃鶴の作は本と是れ最上の一乘、必ず贅せず、本篇の如きは稍〻、その次に屬すと雖も、二聯雄麗、初盛遞降の間に於ては首として一指を屈せざるを得ず、太華は即ち西嶽華山、天然の三峯高く空際に峙聳す、咸京は咸陽、秦の都する所なり、漢の武帝西嶽に幸し、華陰縣內に於て巨靈祠を建つ、武帝祠は此を指す、仙人掌は亦是れ華山中の一勝、その狀形手掌を展べたるが如きを以て名づく、詳かに排律の部に見えたり、「削不成」と云ふものは天然截然の貌、人工を以て削鑿すとも成るべからざるの意なり。岩嶢の一句破題、前聯は專らその上四字を承けて岩嶢の景を寫し、後聯はその下三字を承けて形勝の雄を伏す、語意自ら瞭然たり。但しこの作、題して「途經華陰」と云ふ、乃ち是れ行旅の作、故に「驛路」の句に於て又、暗にこの意を點じ因つて以て名利に奔走せんよりは、山に入つて道を學ぶに如かざるの意を轉出したり。相傳ふ仙人茅濛、華山に入つて道を修め、雲に乘じ鶴に駕して昇天すと。則ちこの語固より華山に切なり、泛然として題外に佚出せしものにあらず。

登金陵鳳皇臺

李白

鳳皇臺上鳳皇遊。
吳宮花草埋幽徑。
二水中分白鷺洲。
長安不見使人愁。

鳳去臺空江自流。
晉代衣冠成古丘。
總爲浮雲能蔽日。

李青蓮、崔顥が黃鶴樓の作と勝負を爭はんと欲するの說は、已に上文に於て摘駁して遺なし。然れども、偶〻崔の調を取りて以てこの詩を題せしと云ふは、理に於て或は當に之あるべきなり。蕭士贇この詩を解して曰はく、此れ懷古に因つて君を懷ふの思を動かす、抑〻亦自ら讒廢を傷み、帝鄉を望んで見えず、乃ち景に觸れて悲を生ず、亦哀む可きなりと。是れ極めて簡にして能く之を盡したり。太白が此詩を以て崔が作に較べ、眞に敵手棋なりと云ふものは、劉後村なり、格律・氣勢未だ甲乙し易からずと云ふものは方回なり、機杼一軸、天錦燦然各〻疊字を用ひて章をなす、尤も高絕なりと云ふものは、田子藝なり、以て雁行して媿なかるべしと云ふものは趙宧光なり、而して劉辰翁は謂ふ、その開口雄偉にして雕飾を脫落せるは俱に論ぜず、若し後の兩句なくんば、亦必ずしも崔顥が上に駕出する能はず、特に之に勝れるは此あるを以てなりと。

是れ太白を以て優れりとし、而してその優處は尤も七八に在りとせるなり、徐柏山は云はく、黃鶴は第四句方に調を成し、鳳凰は第二句卽ち調を成す、後句あらずんば二詩の首唱はみな淺稚の語のみ、調は當に崔に讓るべく、格は則ち李に遜すと。此れ則ち二詩の優劣を以て之を格調の間に繫ぐ、尤も謬悠の談たり。要するに紛紛たる品隲、劉辰翁が見る所稍〻是なるに近し、然れども此を以て優劣の辨に置かんとするは大いに誤れり。何んとなれば崔が詩は只登臨して以て望鄉の客愁を抒寫するのみ、太白は則ち山河に寓目して別に懷抱を寄す。是れ作者が遭逢出處の異と、その時代の承平、亂離の別とに由つて、自らこの徑庭を生ぜざるを得ず、若し家國身世の感の文字に形はるゝもの多きを以て之が優劣を定むべしとせば、勢ひ崔の承平に遭遇せるもの却つて不幸にして、太白の亂離竄逐の禍を經たるもの便ち幸なりと云はざるを得ざるに至り、悖理顚倒焉れより甚だしきは莫からん。今人、杜を抱き韓を尊ぶもの、動もすれば白香山(易居)を譏りて鄙俗と爲し凡庸と爲す、余輒ち每にこの說を擧げて之を戒む。今太白がこの篇を釋するに於て、覺えず此に及ぶものは、亦深く世の詩篇を品藻するもの、一隅を擧げて以て三隅を廢し、深く作者の性情と出處とを融會して剖析を下すの識なく、徒らに嗜好の適否を以て漫に優劣を判じ、自ら以て古人の心儘を剔抉すと爲すもの、靡然として風を成せるに慨焉たるものあるを以てなり。然れども徒らに性情を求め出處を徵するに汲汲として、牽强附會の說を喜ぶものに至つては、此れ又過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し、初めより掛齒する所に非ざるなり。乾隆御批之を斷じて云はく、崔・李の二章みな心よりして發し、卽景して成る、意象は偶〻同じくして、勝境は各〻擅らにすと。詩を酸鹹の外に觀るものは、斷としてこの公正平允の見を具せんと要す。

金陵は吳の孫權都を此に建てゝ建康と云ひ、晉、永嘉南渡の後亦此に都したり。臺は金陵城の東南に在り、

劉宋の元嘉年中、三鳥あり來つて此に翔集す、文彩五色にして、狀孔雀の如く、音聲諧和して衆鳥群附す、時人終にこの地を名づけて鳳凰臺と稱す。江山を四顧し、井邑を下瞰す、尤も爽塏たりと云ふ、故に云ふ「鳳凰臺上鳳凰游」と。而して今は乃ち鳳去つて臺空し、唯、臺下の江水、舊に依つて自ら流るゝのみ、この句「鳳去」一頓、「臺空」一頓、「江自流」一頓、七字の中凡そ三頓して感慨に入る、層折の妙あり、徐柏山が第二句卽ち調を成すと云ふもの此れがためなり。吳宮の時に在つては是れ花草繁盛の地、而して今は幽邃に埋もれり、晉代に在つても、亦是れ衣冠輻輳の處、而して今は古邱と成れり、則ち隆替衰盛の感何の世かこれなからん、固より獨り一鳳凰臺に止まらざるなり。今臺に登つて騁望すれば、三山半は雲霧中に隱る、故に青天の外に落つと云ふ、一水岐して沙洲の間を環る、故に白鷺洲を中分すと云ふ、三山は山の名、積石森鬱として大江に濱す、三峯排列して南北相連なる、故にこの號あり、陸放翁が入蜀記に、三山は石頭及び鳳凰臺より之を望めば杳杳有無の中に在り、その下を過ぐるに及びては、則ち金陵を距つる纔かに五十餘里のみと。杳杳有無の一語以てこの篇「半落青天外」の好注脚に充つべし。又、史正志が二水亭の記に、秦淮は源を句容・溧水兩山より發し、合流して金陵に到り、城中を貫きて、西以て江に達す、洲ありその間を橫截す、李太白が所謂「二水中分白鷺洲」なるもの是れなりとあり。この二句は承句「臺空江流」の語尾にして、則ち臺上眺矚の景致を述べたるものなりと雖も、その裏面自ら眼前の山水も亦半落し、中分す、祿山の唐室を危うして玄宗西蜀に播遷したる、自己が讒構を蒙りて遂に夜郎に奔竄したる、亦みなこの興象の中に隱躍せらるゝものあり、是を以て七句之を一括して「總爲浮雲能蔽日」とは云へり。

「浮雲蔽日」は亦唯、是れ太白が臺上よりして三山半落二水中分を眺望したる眼中の一景象のみ、而して

陸賈が新語(愍懷)に邪臣の賢を蔽ふは猶ほ浮雲の日月を障するが如しと云ひ、文子に日月明かならんと欲すれば浮雲之を蔽ふと云ひ、又、古楊柳行に「讒邪害公正。浮雲蔽白日。」と云ふ、この四字の來歷此の如くして、太白偏に之を此に用ひたりとせばその託興の在る所、固より指明を待たずして喩ることを得べし。「長安不見使人愁。」この結尾亦三層の意あり、臺上極目、浮雲杳杳として長安を見ず、是れその一層、讒に逢うて放たれ南國に飄零し、再び帝都を見るの日なきを悲しむ、是れその兩層、胡馬北來して帝都淪沒し、唐氏の山河未だ收復する克はざるを傷む、是れ卽ち其の三層、この茫茫に對して百端交〻集る、則ち上文「半落」・「中分」、他人に在つては望中の景に過ぎず、太白に在つては正に自ら一副の眼淚を少き得ざるなり。

早朝大明宮呈兩省僚友

賈至

銀燭朝天紫陌長。禁城春色曉蒼蒼。
千條弱柳垂青瑣。百囀流鶯遶建章。
劍佩聲隨玉墀步。衣冠身惹御爐香。
共沐恩波鳳池上。朝朝染翰侍君王。

七律、沈・宋・李・張の諸家に於て、格式已に創すと雖も、猶ほ甚だ世に重んぜられず、故に李太白の集、七律僅かに三首、孟浩然の集、七律僅かに二首、是れ青蓮が飄逸なる、浩然が澹遠なる、共に規行矩歩中に束繫せらるゝを屑とせざるに出づと雖も、亦以て玄宗が開元天寶の盛時、七律甚だ行はれずして、寧ろ之を沈・宋の卑格として厭棄せらるゝの傾向ありしを知るべし。時勢の風潮此の如くなるときは、則ち專らこの格を刻琢し、一に此を以て長を見はさんと欲するの士あることなきは亦論を待たず。既にして祿山の亂興れり、開寶治世の風は俄然として一變したり。是に於て天下を擧げてみな噍殺悲哀の音となり、詩人が文字歌詠に形する所のもの、概ね憂憤幽鬱、煩亂離奇、即ち太白が遠別離・蜀道難、少陵が哀江頭・哀王孫の如きその一端にして、鋪藻・鴻麗・導揚・休美の一體の如きは、縱ひその才ありと雖も之を用ひるの處なし、況や盛時に在つてすら已に行はれざりしものをや。是に至つて七律は全く地に墜ちたり、肅宗、乾元の初めに及んで兩京已に收復し、上皇亦蜀より還り、唐家既倒の驚瀾、稍稍として挽回に就く、則ち忽然として賈舍人が早朝大明宮の一篇出でたり。時に於て王摩詰・杜少陵・岑嘉州等みな門下中書の間に官し、所謂兩省僚友の列に在り、乃ち競うて此に和酬し、金を敲き玉を戛し、力めて研練・精切を期す、中興の業方に新たに、雄麗の格再び興り、精益〻精を求め密益〻密を加ふ。人情の舊を厭ひ新を喜ぶ、この時代に在つては律體却つて大いに新奇の觀を呈したるより、群然として之に趨き、一旦廢絕の體を以て終に天下を聳動するに至る、則ち賈舍人は實に李唐の七律に於ける中興の祖なりと謂ふも甚だ謬らざるべきなり。

賈至は賈曾の子なり、曾は玄宗に仕へてその特知を蒙りし事、已に前春、日出苑囑目の條下に具したり。至は天寶の末に於て中書舍人と爲る、肅宗の即位するや、玄宗、至をしてその傳位の册文を起草せしめ、之

を覽て歎じて曰はく、先帝（肅宗を謂ふ）位を朕に遜られしときの册文は、即ち卿が先父の爲す所なりき。朕今、大寶を以て儲君に付するに、卿又草册の任に當る。累朝の盛典、卿父子が手に出づ、難しと謂ふ可しと。至、御前に伏し、嗚咽感涕せりと云ふ。父子玄・肅の二代に歷事し、齊しく詞翰を以てその大禮に與る、洵に異數なり。大明宮は太宗貞觀八年の建置に係り、初め永安宮と名づけ、明年今名に改む、高宗の龍朔元年には蓬萊宮と號し、咸亨元年に含元宮と改め、尋いで舊名に復し、その正殿を含元殿と稱せり。雍錄に據れば、唐の都城中大內と稱するもの三あり、大極宮、西に在るを以て西內と名づけ、大明宮、東に在るを以て東內と名づく、別に興慶宮あり、即ち南內と號するものなり、三內更迭して朝を受く、而して大明宮最も多しと。肅宗收京の後、玄宗は南內に居り、尋いで又、西內に移る、則ち肅宗が群臣の朝賀を受くるは、重に大明宮に於てせられしを推知すべきなり。

「銀燭朝天。」知んぬ是れ五鼓の早朝、家を出づるとき天猶ほ未だ全く明けざるなり、「紫陌長」を以て之に接す。則ちその途路の中、曉色漸く動けり、故に「禁城春色曉蒼蒼」と曰ふ、「千條弱柳」「百囀流鶯」みな是れ春色曉蒼中のもの、「垂青瑣」は宮門に到るなり、「適建章」は殿廷に入るなり、是に至つて始めて朝に到る、一路の光景、俱に紫陌の長きを況するに非ざるはなし、五六は是れ朝見の正文、一結鳳池染翰を以て自己が中書舍人たるの職分を明かにし、又「共沐恩波」を以て兩省の僚友に呈する意を致したり。鳳凰池は中書の別名、中書は即ち詔誥を掌るの官なり。

賈・王・岑・杜の諸作、明朝以來、之を拈して一公案とし、その間に紛紛の優劣軒輊を置くもの一にして足らず。要するにその典雅高大たるは則ち一のみ、何ぞ必ずしも多く辭を費さんや。唯〻于鱗がこの選、賈・

王・岑の三家を錄し、杜に於ては獨り之を遺す、蓋し杜の律體は開闔を以て長と爲し、此等はその擅技に非ざるを以ての故なるべきも、亦彼の謝茂秦榛輩が賈を揚げて杜を抑したるの說と同一の見解を持したるものの如し。沈德潛の如きに至つては單に王・岑に許すに正大明秀を以てし、賈に於ては之を平平と云ひ、杜に於ては朝の正位なし、存せずして可なりと云ふ、各〻その嗜好する所に由つて見る所を異にす、未だ公論と爲すべからざるに似たり。于鱗既に杜を棄てゝ錄せず、讀者或は互參することは能はざるを憾みん、因つて之を左に摘す。

五夜漏聲催曉箭。　九重春色醉仙桃。　旌旗日暖龍蛇動。
宮殿風微燕雀高。　朝罷香煙携滿袖。　詩成珠玉在揮毫。
欲知世掌絲綸美。　池上于今有鳳毛。

蘇東坡の如きも亦嘗てこの前聯を擧げて、此れ七言中の偉麗なる者なりと云ふ。杜が篇亦何ぞ輕看すべけんや。沈德潛が所謂朝の正位なしとは、この詩早朝を寫すに正面よりせず、その側寫法を用ひたるを病とせるなり、然れどもこの詩、杜に在つては是れ賈舍人に和するの詩、自己が早朝を賦したるものに在らず、卽ち賈舍人を主位に置きて早朝を側面に排し去りたるは極めて題目に稱したるものなり。焉んぞ此を垢病とすることを得んや。且つ王・岑の二家その結尾に於てみな賈舍人に言及すと雖も、杜が能くその世職たるを顯はして、併せて賈が才藻の美を稱道したるの周到なるに如かざるものあり、梅聖俞が金針詩格に、詩に內外の意あるを論じ、內意はその理を盡さんことを欲し、外意はその象を盡さんことを欲す、內外の意含蓄して方に詩格に入ると云ふ、その言亦何ぞ曾て是ならざる、而して聖俞その下に於て、杜がこの篇の「旌旗日暖

曖龍蛇動。宮殿風微燕雀高。」の一聯を引いて曰はく、旌旗は號令に喩ふ、龍蛇は臣君に喩ふ、號令は明時に當り君之を出して臣之を奉行するを言ふなり、宮殿は朝廷に喩ふ、風微は政敎に喩ふ、燕雀は小人に喩ふ、朝廷の政敎纔かに出でゝ、小人みな化に向ひ、各〻その所を得たるを言ふなりと。穿鑿附會此に至つて雅道殆ど地に落ちたり、因つて附錄して以てその陋固を暴白す。

和賈至舍人早朝大明宮之作

王維

絳幘雞人報曉籌。　尙衣方進翠雲裘。
九天閶闔開宮殿。　萬國衣冠拜冕旒。
日色纔臨仙掌動。　香烟欲傍袞龍浮。
朝罷須裁五色詔。　珮聲歸到鳳池頭。

早朝の唱和、宮・商迭に奏し、音韻鏗鏘、雄深なるもの嚴正なるもの偉麗なるもの莊雅なるもの、實に騏驥並に馳せ、驛騁俱に騤す、人をして甲乙次第すること能はざらしむ。而して廖詰がこの篇、則ち又博大昌明、彝魏乎として帝王の氣象あり、高棅、王維・李頎を以て七律の正宗と爲す、亦洵にその故なくんばあらざるなり。齊しく早朝を寫して、賈は早朝するものゝ一身に貼して之を破題し、王は早朝を受くるの天子の一邊

に貼して之を領起す、早朝するものゝ銀燭を秉りて朝衣を整頓するの時は、正に是れ天子の雞人報鄰を聞きて、翠裘を進御するの候なり、早朝するものより立言す、則ち見る所は是れ一跡の曉色、受朝の天子より命題す、則ち見る所は是れ九重の曙光、步步賈が作と相表裏して又、步步他と相回映す、豈に絕妙の和法に非ずや。周禮に雞人の官あり、漢唐の官制亦之を沿襲し、雞鳴の候、衞士朱雀門外に候し絳幘を著けて雞唱し、以て更鄰の曉に近づけるを報ず。又、杜祐の通典（卷二十六、職官八）に據れば、尙衣尙冠の職は戰國に始まり、隋の時尙衣局を設けて奉御二人を置く、唐の制は此れに因れり。翠雲裘は宋玉の風賦に本づく、今借りて朝服を稱す、雞人絳幘に對し聊か色部の字面を點綴して以て句の采とす、心細髮の如きものなり、然れども是れ隨手拈出に由つて自然の節奏を爲し、少しも格に傷せず、若し專ら此れに就いて小工を弄せば、則ち纖路に淪入す、學者の尤も分寸を辨ぜざるべからざる處なり。

九天の句は是れ天子正殿に出御す、萬國の句は卽ち百官朝見を寫す、時に吐蕃・回紇の諸外臣も亦朝班の末に在り、故に萬國衣冠と言うて之を包括す、その言外德澤四彊に光被せざる無きの意あるを見るなり。五六の二句は朝見の景、是れ景語と雖も亦天顏咫尺の意を含み、而して曰はく臨、是れ天子に由つて言ふ、曰はく傍、是れ百官に就いて言ふ、旭日曈曨、爐煙繚繞、冕旒雍容、袍笏離披、その熙熙皥皥の景象、曲盡せざる所なし、結末鳳池裁詔、卽ち舍人の身上に歸納して和章の意を見出す、是れ自ら唐賢和詩の定式、岑・杜の諸家と雖もみな然らざるはなきなり。但しこの篇は都べて色部の字面を以て一篇を組織す、絳幘・翠裘、既に前述の如し、則ち宮殿冕旒以て仙掌の日、袞龍の煙、往として色相を帶びざるはなし、故に結處も亦詔に於て五色の字を點し、鳳池の鳳を以て仍ほその光彩を煥燦ならしむ、是を活用と謂ふ。

明代七子の徒、膚廓を以て盛唐を模倣し、盛唐の中又尤も摩詰・東川を模倣す、模倣の極り、生吞と爲り、活剝と爲り、冕旒衣冠、仙掌袞龍等語殆ど篇毎にこれあらざる無きに至り、優孟・叔敖、笑齒今に至つて猶ほ冷やかなり。此れ自ら是れ膚附の過未だ此れを以て盛唐の諸作を廢する能はざるなり、淸の王阮亭、唐賢三昧集を選し、專ら淸秀俊逸の作を取り、以て盛唐の眞面目を剔出すと謂ふ、その緖論に曰はく、但、九天閶闔萬國衣冠の語を爲すを學んで、自ら命じて高華と爲し、自ら矜つて壯麗と爲すも、之をその中に按ずるに毫も生氣なし、然れども盛唐の詩は原と空殼子大帽子の話に非ず、その中蘊藉風流にして萬象を包含す云云と。この論洵に善し、而して記淸せよ、是れ九天閶闔萬國衣冠を學ぶものゝためにして言ふ、王維がこの作の唐律の冠冕たるに至つては、寸毫も傷損する所あらざることを、若し擧げて之を廢せば、則ち又是れ矯枉の弊なり。

和太常韋主簿五郎溫泉寓目

漢主離宮接露臺。　秦川一半夕陽開。
青山盡是朱旗繞。　碧澗翻從玉殿來。
新豐樹裏行人度。　小苑城邊獵騎回。
聞說甘泉能獻賦。　懸知獨有子雲才。

此れ想ふに當時玄宗華清宮に幸して韋主簿、その供奉の班に在り、寓目の詩を作る、因つてその韻に和して之に贈れるものなるべし、溫泉は驪山の麓に在り、唐時湯を治して池とし、山を環して盛んに宮室を營む、華清宮卽ち是れなり、敢へて當代の天子を斥言せずして漢を借りて之を形す、是れ又、當時詩人一般の通例に屬す、必ずしも微意をその間に寓するには非ず、露臺は祠の名、驪山の東南に在り、首句は是れ韋主簿が據つて以て寓目するの地、二句は卽ち寓目中の景を總提し二聯に於て之を分寫したり、秦川は長安一帶の總稱、「一半夕陽開」と云ふ、望中の曠遠なるを見るべし、俗解、驪山に夕陽樓あるを以てこの句を解して樓名と爲すものあり、牽强の說從ふべからず。

青山隱隱の間朱旗の圍繞せるを見る、明かに車駕の此に駐まればなり。驪山の溫泉は、之を華清の最高處に引き、然る後取次に各宮に分注す、故に第一湯・第二湯の目あり、「碧澗翻從玉殿來」と云ふもの、これを指す、二句先づ驪山の景を寫す、寓目する所の近處よりして遠處に及ぶは自らその順序たるを以てなり。新豐の樹裏幽かに行人の度るを望み、小苑の城邊遙かに獵騎の回るを認む、是れ遠處を寫して亦自ら晩景に切なり、小苑は芙蓉苑を云ふ、亦長安の東に在り、寓目する所のもの此に止まる、因つて七八、韋が原作に歸美し、子雲の才を以て之を推す、亦是れ和章の體なり、兼ねて甘泉を以て溫泉宮たるを見はす、映帶極めて好し。

按ずるに漢の文帝の時、露臺を作らんと欲し、百金を費さゞるを得ざるを以て止むと云ふこと史に見えたり、楊昇庵、乃ち之を本篇起句の露臺に附會し、又、甘泉の賦は諷諫の意を見るを以て此亦必ず託意あること、一に我が韋元旦の詩に於て解釋したる說の如き意味ありとす。その說に曰はく、唐は天寶に至りて宮室盛んなり、秦川は凡そ八百里にして而して夕陽一半開けば、則ち四百里の內みな離宮なり、奢麗此の若くして、猶ほ漢文の露臺を惜むを以て之を比せしとせば、則ち反して諷するものと謂ふべし。末句韋郎の子雲が獻賦に效はんとするを欲するに於て、愈、その託諷の在る所を知る云云と。知らず、漢文の露臺は作らんと欲して而して止む、實にその事なきなり。この詩「接露臺」は明かにその物あり、則ち詩中に指す所は、驪山の露臺祠にして漢文の露臺を用ひたるものにあらざること甚だ昭昭たるなり、末句は亦只、子雲を假りて以て韋が才藻に喩へ、甘泉を借りて以て溫泉を況す。その外別に深意あることなし、筆を用ひるは正に活變を妙とす、斷じて是の如く死黏泥拘して解することを許さゞるなり。又、朱東岩が說にこの詩遠近寓目の景を曲寫せるを評して之を善畫の者に喩へ、善畫の者は筆墨の或は濃或は淡なるに於て、以て、形勢の遠近たり近たるを分つ、而して善く畫を觀るものは亦卽ち濃淡遠近の間に於て、而して何者を起筆とし何者を落筆とするを知り、その界限を分ちその層次を看る、詩を作るの法も亦然りと云ふ、看て甚だ理あるに庶幾し。而してこの詩を解するに及んでは、秦川一半の句の二聯を總提したるものなることを知らず、終に遠近を顚倒して目の望む所必ず遠よりして近に及ぶと云ふに至る、噴飯を爲すべし、乃ち知る、若輩、本と眼識なく、漫りに筆墨を弄す、高談を侈すと雖も、事に於て毫も當なきことを。金聖歎の流正に是れなり。

大同殿生玉芝、　龍池上有慶雲、
百官共覩、　聖恩便賜燕樂、
敢書卽事
欲笑周文謌燕鎬。
還輕漢武樂橫汾。

豈知玉殿生三秀。　詎有銅池出五雲。
陌上堯尊傾北斗。　樓前舜樂動南薰。
共歡天意同人意。　萬歲千秋奉聖君。

この詩麗詰に在つては至れる者に非ず、誦し去つて只覺ゆ、痴肥板滯、亦幾分の俗氣あり。信なるかな歌娛の工なり難きや、初盛應制の格、固より以て式とすべし。然れどもこの種の如きは正にその病處なり、于鱗の特に此を選する所以のものは、單にその初唐の格ありとするを以て無上の典則とす、これ亦奚んぞ河豚を喰ふものゝ專らその味の脆美なるに心醉して、その毒正に此より甚しきを知らざるに異ならんや、但、その前半毎句上二字、みな虚字を用ひて斡旋す、故に用ふる所みな習見の事なりと雖も、仍ほ活動流走の致あり、是れ則ち取るべきなり。

周文の魚藻、漢武の秋風、一時の宴樂賡酬の盛を稱すと雖も、今日殿に玉芝を生じ池に慶雲を起す、此等の祥瑞あつて、而して燕樂を賜ふの慶事に如かざるなり。故に「欲笑」・「還輕」と云ひ、是れ古の燕樂を擧げて、今日の祥瑞あるを頌するなり。漢の宣帝の元年に金芝九莖あり函德殿の銅池の上に生ず、銅池は承露を曰ふなり、この事極めて今日の祥瑞と相似たり。然れども彼れは只、池上に芝を生ずるのみ、豈に今日の玉殿の上に生ずるの更に大祥瑞たるを知らんや、況や今日は獨り殿に靈芝を生ずるのみに非ず、龍池の上にも亦慶雲あり、而して漢代には曾てその事無きなり、是れ古の祥瑞を擧げ、今の祥瑞の遙かにその比に非ざ

るを頌するなり。三秀は楚辭の九歌に「采三秀於山間」（山鬼）注に三秀は芝草なりとあり、銅池は漢代の承露を用ふと雖も、寔に借りて龍池に一映す、「豈知」の知、一本「如」に作る、此の如くなるときは則ち意義更に瑩、從ふべきに似たり。

酒器に堯の衢尊、虞の泰尊あり、堯尊已に衢の名あり、因つて陌上の二字を冠し、之を唐時大酺の酒尊に用ひたり、北斗に柄あり、故に詩の大雅に「斗杓揭揭」の語あり（校訂者云ふ、かゝる語は詩經になし）、楚辭にも「援北斗兮酌桂漿」（東君）と云へり、「傾北斗」はこの義を用ひたるを知るべし。舜琴南薰の樂は已に習見す、二句は即ち賜醴の本文なり。

奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作應制

渭水自縈秦塞曲。　黃山舊繞漢宮斜。
鑾輿迥出千門柳。　閣道迴看上苑花。
雲裏帝城雙鳳闕。　雨中春樹萬人家。
爲乘陽氣行時令。　不是宸遊玩物華。

八句全對の格、是より先、孫狄が一首ありと雖も、彼れは仍ほ首句に韻を押す、未だ正體と爲さず、自ら

麼詰がこの篇を以て定式と爲すべきなり。通篇雄秀にして整麗、清雅にして流動、一懈の擊つべきなし、洵に萬世の法程と爲すに堪へたり。前六句みな寫景にして、後二句頸中規を忘れず、獨り章法の高絶たるのみならず、命意亦超絶たり。雲裏の二句を觀れば、所謂詩中に畫あるもの、豈に啻にその五言の一體のみにして言はんや。

蓬萊は大明宮なり、興慶は卽ち南內、この兩宮の間、連亙數里、閣道を架して往來を通ず、その中間に留春閣あり、卽ち是れ車駕留憩の處、時に玄宗游幸の次、此に憩うて雨中春望の作あり、麼詰乃ち制に應じて之を和す、是れ本篇の題義なり。後人留春は複道中の閣名なるを知らず、或は疑うて春游の稱ならんと爲せるは非なり。起二句は是れ閣道中より眺むる所の帝都鬱盤の景にして、その形勝の雄なる山河の壯なる、因つて以て傳出せざるは無く、彼の「秦川一半夕陽閣」の語に較べて氣象更に恢宏なるを覺ゆ。「自榮」の「自」は自然の義「舊繞」の「舊」は依舊の意と做して解すべし。長安は秦漢の故都、秦は四塞の國、山を被り渭を帶ぶ、故に秦塞の名あり。黃山は扶風槐里縣に在りて長安の西北に位す、漢の惠帝が時、宮を此に建てゝ黃山宮と稱す。又、武帝が廣く上林苑を開けるとき、東南は藍田宜春鼎湖御宿昆吾に至り終南山に傍ひ、西は長楊五柞に至り北は黃山を繞り渭に瀕して東す、周袤三百里、離宮三千所ありと云ふ、唐に至りては建置沿革ありと雖も、その漢宮の舊に依りて黃山を斜繞せしもの猶ほ多かりしを見るなり。上二句已に帝都の景勝を悉す、次聯は鑾輿の宮を出で、閣道に留憩せられし事實を敍す。卽ち題面の蓬萊より興慶に向ふ閣道中留春の事なり、閣道は山に傍うて高架す、故に迥に千門柳色の上に出でたり、是に於て留憩の餘覺えず上林苑の花を廻看す、廻看の二字、卽ち春望の根にして、後聯十四字此れより生出したり、後聯は春望の正位にして、又明かに雨中の二字を點して以て題面に應ず、雲裏の帝城、空濛の中、猶ほ雙峙の鳳閣を認む、是れ廻看の見る所なり、雨中の春樹、霏微の間遙かに萬戸の人家を望む、是れ廻看に由つて更に左右を下瞰するなり、而してその筆墨の妙、宛として親しく爾許の好景致を見るが如し、人をして神往き情移らしむる、古來此れを以て有數の作とす、良に媿なきなり。

天子四季の時序に應じて德を布き、令を和し、慶を行ひ、惠を施す、是れ古聖賢の教なり、今車駕の春日出游に因つて、卽ち之を陽春の氣節に乘じて時令を行はんが爲なりと設言し、斷じて宸游の徒らに物華を玩ぶものに非ざるを言ふ。蓋しその此の如くならんことを切望して戒を逸豫に致す、是を曲終奏雅と謂ふ、その婉にして章を成し、工みに忌諱を避けたるは是れ風人の旨なり。

勅賜百官櫻桃

芙蓉闕下會千官。紫禁朱櫻出上蘭。
纔是寢園春薦後。非關御苑鳥銜殘。
歸鞍競帶青絲籠。中使頻傾赤玉盤。
飽食不須愁內熱。大官還有蔗漿寒。

櫻桃は一に鶯桃に作り、又、含桃と稱す、その子實紅細にして、毎に鶯鳥の含食する所と爲るが故なり、禮の月令に、仲夏の月、天子羞むるに含桃を以てし、先づ寢廟に薦むと云ふ、是れ櫻桃薦廟は實に周代の典例にして、その百果に先だつて熟するを以て、嘗新の義に取るなり、漢の時、惠帝離宮に出游す、叔孫通曰はく、古は春に當つて果を嘗むるの事あり、今や櫻桃方に熟せり、願はくは陛下之を取つて以て宗廟に獻ぜよと、上乃ち之を許す。事は叔孫通の傳に見ゆ。然れば漢代にも亦櫻桃薦廟の制を沿襲せり、唐も亦之に由る。李綽が歳時記に、四月一日、內園より櫻桃を寢廟に薦む、薦め訖りて班賜各〻差ありと云ふ、是れ唐に在つては、獨り薦廟の典あるのみならず、同時に百官に班賜するを例としたるなり、この詩題して「勅賜百官櫻桃」と云ふ、意を用ひる卽ち勅賜の一邊に在り、專ら櫻桃を詠じたるものに非ず、而して三四以下、句句是れ櫻桃、又是れ句句勅賜を離れず、千古に艷唱して傑作と稱す、斷じて雕繢家の夢想する所に非ざるなり。

首「芙蓉闕下會千官。」、櫻桃より着筆せずして、百官より領起す、勅賜を重んずるの意なり。立言の高、筆法の妙、既に肩手の到る所に非ず、二句「紫禁朱櫻出上蘭。」、この句乃ち櫻桃を顯言して點題す、上蘭は上林苑中の小名、起承を合して言ふこゝろは、芙蓉闕下に千官正に相會するの時、紫禁の內廷より朱櫻の賜あり、この櫻桃自ら經常の物にあらず、乃ち內閣の上蘭より出でたるものなりと。而してこの意早く前聯の神理を攝出したり、又、紫禁朱櫻隨手に組織す、尤も風水上に行きて自ら文を成すの觀あり。

前聯は櫻桃の極めて鮮新なるを狀し、深く恩賜の榮に霑ふるを感荷するの意なり。蓋しこの櫻桃今新たに上蘭より摘下し、纔かに寢園に薦めたる後に於て直ちに、百官に賜ふ、斷じて御苑の鶯鳥が銜啄の殘餘を以て臣僚に頒たれしものに非ざるなり、夫れ鶯鳥が銜殘の物と雖も、賜を拜しては猶ほ以て榮とするに足れり。

況や、然らざるものをや、櫻桃を以て寫し得て許の如くに愼重ならしめ、以て勅賜の小に非ざるを明かにす、豈に神妙の筆にあらずや。

後聯は頒賜の夥多なるを言ふ、群臣已に賜を拜す、その前者の櫻桃を青絲籠に盛りて競うて歸鞍に帶び去るに拘らず、中使の內官は仍ほ頻りに赤玉盤を傾け、以て後れたるものに賚賜せり。この句青絲籠・赤玉盤、並に櫻桃を盛るの器を寫して、櫻桃自らその中に在り、旁筆襯染、又競帶・頻傾の四字に由つて、櫻桃の纍纍堆滿の狀を寫す、みな工細を極む、漢の明帝群臣を宴するとき、偶〻櫻桃を進む、因つて赤瑛の盤に盛りて之を賜ふ、群臣月下に之を視れば、盤は櫻桃と色を同じうせり、群臣みな笑つて曰く是れ空盤なりと、事は東觀漢紀に見ゆ、第六句は暗にこの事を影借したり。

七八は上文賜賚の夥多なるを承け、一轉して結とし、又、蔗漿を用ひて櫻桃に反映せしめたり。櫻桃の性は熱す、故に調中益氣の功ありと雖も、多食すれば往往虛熱を發す、蔗漿は甘蔗汁なり、甘蔗は性甘寒なり、故に之を服すれば中を和し脾を助け、熱を除き燥を潤す、兩つのものその性正に相反す、これ命意の在る所、大官は主膳の職名なり。聖恩既にこの許多の櫻桃を賜ふ、百官たるもの、宜しく人人之を飽食して、以て隆旨に奉答すべし、決してその內熱を生ずるを愁ふる勿れ、何となれば天厨には猶ほ蔗漿の甘寒なるあり、之を乞ひ得て以て服せば、內熱立ろに痊すべければなり。若し熱を怕れて食せずんば、未だ優渥の天恩に辜負するを免れず、故にこの勸諭の語を成し、益〻霑賜を榮幸とするの意を見はす、周到の至なり。

清の翁方綱、詠物七律偶記を著す、その論に云はく、七言律詩は詠物尤も難し、蓋し意を刻琢に用ふれば、格を傷つけ易く、專ら超脫を事とすれば又未だ恰も彀中に到ること能はず、この事自ら性情・學問に關すと。

又云はく性情・倫理を舍てゝ外、別に所謂詠物なしと、而して實に王右丞がこの篇を採りて以てその卷を壓したり。これ後人が詠物の專ら刻畫に流れ、纖工細僻を以て能事とせる者の爲に、頂門の一針を下し、必ず右丞がこの作の如く、性情の眞を具するものに非ざれば、以て風雅の正を得たりと爲すべからざるを痛言したるなり、この詩は元と自ら一時の感を紀す、櫻桃詠物の詩に非ず、然れども詠物の詩を作らんとするもの、これを以て法と爲し、その神理を解識せば、庶幾くは小家の窠臼に落ちず、吾れ是に於て乎、翁氏が言を多とせざる能はざるなり。

勅賜櫻桃は小事に似たるも當時に在つては頗る盛典と稱す、故に杜小陵が野人朱櫻を送るの詩に於て、又この事に言及せり、曰はく、

西蜀櫻桃也自紅。　野人相贈滿筠籠。
萬顆匀圓訝許同。　憶昨賜霑門下省。　數回細寫愁仍破。
金盤玉筯無消息。　此日嘗新任轉蓬。　退朝擎出大明宮。

これ少陵亂離を經て西蜀に走り、嚴武に寄食せる時の作、偶〻野人の櫻桃を贈れるを見て、遙かに宮庭拜賜の事を懷ひ、今日再びその盛を觀る能はざるを感みとす、亦以て如何にこの一事の人心に記憶を與へしめしやを見るべし。昔人謂ふ少陵がこの詩、前四句は禪家の所謂手に信せて拈來し頭頭是れ道なりと云ふが如く、直ちに目前の見る所を書して平易委曲、人心の同じく然りとする所を得たり。後の四句に至りては、その感興みな自然に出づ、故に終篇遒麗なりと。因つて念ふにこの詩前聯の櫻桃を狀するが如きは、亦何ぞ曾て刻琢して之を出さゞる、特にその格を傷つけざるものは、一篇の大段纏綿の至情を表し、自家の流落を傷むに在

るを以てなり、これに由つて益〻翁氏の說の允當なるを證すべきなり。又宋道南は王・杜を並べ擧げて曰はく、王右丞は賜の字に著眼し、止〻一月令の故實を用ひ、餘は虛處より傳神す、杜拾遺は送の字に著眼し、首句に櫻桃を實點し、全く典を用ひずして、而して別物に移置すべからず、洵に高唱なりと。

韓退之の集にも亦櫻桃を賜ふを謝するの一篇あり、卽ち知る、この典、中唐に至つて廢せざることを。その詩に云はく、

漢家舊種光明殿。　炎帝還書本草經。　豈似滿朝承雨露。
共看轉賜出青冥。　香隨翠籠擎偏重。　色照銀盤寫未停。
食罷自知無所報。　空然慙汗仰皇扃。

これ卽ち事迹を搜索して排比對偶す、その言みな勉强より出づ、命意・措詞太だ右丞に似たりと雖も、天籟・人籟の別、判然として鴻溝の如し、胡苕溪は、櫻桃に香なし、退之の香を以て言ふは一語病なりと云ふ、これは則ち未必の論たるに似たり。

淸の大學士張英、賜櫻桃の一律あり、右丞がこの篇を學んで未だ摹擬を免るゝ能はずと雖も、而かも亦初學の階梯と爲すに足れり、蓋し俄かに右丞を學ばんと欲すれば、未だ高枝を折らんと欲して手これが爲に寒きを免れず、張が此等の作に依つて之を求むれば、從つて亦右丞が篇の神味の在る所を悟るに易きの便あり。その詩に云はく、

講筵人退五雲端。　分得含桃出禁欄。　踐廟祇因先百果。
承恩舊許賜千官。　錦林初傍宮雲摘。　翠籠猶沾曉露溥。

飽食盈筐叨聖澤。　火珠光暎水晶盤。

この詩歩歩右丞がこの篇を揣摩す、互對參觀して、又歩歩その跡の尋ぬべきあり、但、錦林の一聯その內園の物なるを刻寫し、兼ねて曉露の二字を以て、恩賜の沾被せざるなきに比す、右丞が詩に視れば、殊に細緻を極めたり、これ詩の古今の到なり。張英、又、賜白櫻の作あり。

朱果頻經賜上方。　堆從玉盌初難識。
瀉向銀盤但有香。　氷堆相暎總珠光。
水晶簾下初擎出。　鳥未敢銜疑雪片。
風味宜含曉露嘗。

この詩は專ら意を白の字に用ひ、彼の漢の明帝が赤瑛盤の事を換用して尤も靈警異常なるを覺ゆ、律するに翁方綱が緒論を以てすれば、或は第二義に墮ちたるの感無しと云ふべからざるも、その才氣湧出して新穎の思あるは、亦斷として之を棄つべからざるに似たり、因つて此に具錄す。

酌酒與裴廸

酌酒與君君自寛。　人情翻覆似波瀾。
白首相知猶按劍。　朱門先達笑彈冠。
草色全經細雨濕。　花枝欲動春風寒。

世事浮雲何足問。　不如高臥且加餐。

傳に稱す廉詰、輞川の別墅に在りて、日に丘丹・裴廸・崔興宗等と游覽詩を賦し、琴樽自ら娛むと。乃ち知る、廸も亦是れ曠達開放、物外に脩然たるの士、宜なりその時俗に諧はざるや、詩意に由つて之を推すに、蓋し裴廸干請する所ありて遂げず、頗る亦悒怏す、故にこの詩を作つて以て之を慰藉するなり。人情翻覆、世事浮雲、是れ一篇の主、身を其間に處する、唯、酒を借りて憂を忘るゝあるのみ、此れ亦只是れ已むを得ざるの一着、曠語に屬すと雖も寔に悲語なり。

相知にして白首、則ちその情誼實に半世の知交のみならざるなり、而かも猶ほ范叔綈袍の戀を致すものあるなく、甚だしきは則ち劍を按じて相視る、夫れ明月の珠、夜光の璧も、暗夜に於て路人に投ぜば、疑怪して劍を按ぜざるはなし、是れ由なくして前に至ればなり、白首の相知にして却つて此の如きを致すとせば、人情の冷熱、豈に驚くべからずや、昔、王吉位に在るときは、貢禹その冠を彈ず、他なし、二人なるもの意氣相投ず、故に王進むときは、貢はその必ず己を薦めんことを知りたればなり、而して今日の朱門の先達を見よ、一人として裴が彈冠求薦の意あるを嗤笑せざるものなし、嗚呼白首の朋友にして轉瞬敵國と爲る、彼の如く朱門の貴顯にして一朝貧賤を忘るゝ此の如くなれば、翻覆の波瀾、實に慨すべきものあり、この一聯、人心の古ならざるを極寫して、その痛切を極む。故に次聯に於ては、酌酒の時の眼前の景物を寫し比をその中に寓して、益〻世事の恃むべからざるを興ぜり、草色の萋萋として正に綠なるは、全く細雨の潤澤を得て然るなり、而かも花枝の垂垂として動かんと欲する、忽ち春風の寒峭に遭うて勒せらる、單にこの景物に對

するも亦酒を借りて自ら遣らざるべからず、況や世間の情態、髣髴としてこれに類するものあるをや、夫れ草を以て花に對せば、自然に草は賤にして花は貴し、庸流を以て賢士に對せば、賢士の用ひらるべきは論なきのみ、而して草は乃ち細雨に濕さる、庸流は却つて寵渥を受けたり、花は乃ち春風に傷む、賢士は轉た仕途に厄せらる、是れ正に當に賤なるべきもの反つて貴にして、當に貴なるべきもの終に賤に居る、顚倒の甚だしき一に以て此に至れり、君の志を得ざる亦これが爲のみ、然れども世事の浮雲に似たる、之を問ふも將た何の益ぞ、苟も高臥加餐して寢食自ら安んじ、能くその適を適とするを得ば、區區たる功名祿位、又安んぞ羨むに足らんや、是れ我が酒を酌んで君に與へて君の自ら寬心ならんことを望む所以なり、一結反掉して首を擊つ、筆を用ひる循環の若し。

この詩、後聯下三字、三仄を以て三平に對す、是れ聲律を講ずるものゝ能く知る所、然れどもこの變調のために、全詩を拗して不黏聯格とし、又、第一句に於てその第五字を平聲としたるが如き、尤も聲律の神理に關す、而してよく之を識る者殆ど鮮し、若し尋常黏格の律調に於て忽ち三仄三平の對偶を用ひ、吾れ善く王維を學ぶと謂ふものあらば、この人則ち聲律の何たるを辨ずる能はざる者なり、故にこの種を學ぶは、尤も輕率に筆を下すことを忌む。

酬郭給事　桃李陰陰柳絮飛。

洞門高閣靄餘暉。
禁裏疎鐘官舍晚。
晨搖玉珮趨金殿。
强欲從君無那老。
省中啼鳥吏人稀。
夕奉天書拜瑣闈。
將因臥病解朝衣。

これ必ず郭給事が詩あり、相贈るに因つて、乃ち此を賦して以て之に酬答せしなり、給事中は門下省の官にして、日に天子の左右に侍奉し、省事を分判す、則ちその平日の居も、禁中に密接するを至便とす、是れ給事が官舍に居るの所以なるべし。前四句は官舍の暮景より落筆し、省中の諸官も亦みな放衙の後なるを帶敍し、以て後聯の給事が獨りその職に勤勉せざるべからざるを反起したり。洞門高閣、夕陽已に沒し餘暉靄然たり、桃李陰を成して柳絮も亦飛ぶ、獨り日の將に暮れんとするのみならず、春も亦漸く已に盡きんとす、この官舍の晚景に當りて、遙かに禁裏疎鐘の隱隱たるを聞く、正に省中の吏人はみな退散して、四面頓に淸寂、唯、啼鳥の階庭に鳴噪するのみなるの時候たるを知る、而して給事は仍ほ未だ官舍に歸息する能はざるなり。蓋し給事の職たる黃門侍從の列に在り、故に晨には則ち玉佩を搖がして金殿に趨る、百官に先だつて早朝せざるべからず、夕べには則ち詔書を奉じて瑣闈を拜す、百官に後れて退衙するを常とす、是を以て每に燕居安閒の時を得る能はざるなり、君、この職を奉じて黽勉怠らず、洵に能材と稱すべし。余が疎才の如きも、豈に君と事を同じうするを願はざらんや、但、晨趨夕拜、殊に人を困殺す、勉强從事せんと欲するも、老病の衰軀、寔に任ふる所に非ず、故に斷念して將に朝衣を解かんとすと云へり。

唐の太宗の時、郭承嘏、給事中と爲る、開成元年出でゝ華州の刺史と爲り、詔書給事中の府に下る、同僚盧載、之を封還して曰はく、嘏はこの官に居りしより、繼いで封駁することあり、能くその職を奉ず、宜しく長く瑣闥に在るべし、牧守の才は別にその人を推擇すべしと、亦以てこの職のその事に練達したるものに非ずんば能はざるを見るべきなり。一說に、前四句を以て王維が自況の語とし、官清要に居ると雖も一も事とする所なきを言ふとせるものあり、若し此の如くに解し去るときは、郭給事に酬する所以、僅かに後聯十四字に止まり、主客の輕重甚だ勻稱ならざるを致し、且つ清閑曠放を以て他の勞碌を鄙しむの意あるを嫌ふ、摩詰が本意決して此れ無きを信ず、故に從はず。

過乘如禪師・蕭居士嵩丘蘭若

無著天親弟與兄。　嵩丘蘭若一峰晴。
食隨鳴磬巢烏下。　行踏空林落葉聲。
迸水定侵香案溼。　雨花應共石牀平。
深洞長松何所有。　儼然天竺古先生。

無著・天親並に佛弟子の名、以て乘如禪師と蕭居士に比す。嵩丘蘭若はこの法弟師兄の居る所、一峰晴は

卽ち摩詰が此を過ぎて見る所の景なり。清磬一聲齋時を報ずれば、樹上の巢烏下り來つて施食を爭ふ、空林人なく、行いて落葉を踏めば、その窸窣の聲殊に高きを覺ゆ、深邃閒寂の狀寫し得て幽絕なり。梁の高僧寶誌、鐸を地に卓すれば泉湧くこと數尺、禪師居士が道力、自ら誇公に讓らず、定めて泉水の迸流して香案を侵濕するものあるべきなり。又、世尊の說法する、天必ず花を雨らす、二師が經を講ずる時想ふに亦雨花の多く地に敷きて、その高さ石牀と平らかなるものあらん、我れ今之を過ぎ、門に入りて見れば、深洞長松にして外一も有る所なく、只天竺の古先生の儼然としてその上に端拱せるあるのみ、二師なるもの卽ちそが前に在りて日夕靜修す、その道業の高言はずして知るべし、天竺の古先生は佛如來を謂ふなり。

初唐律詩の格、摩詰之を變じて淸澹と爲し、少陵之を變じて沈鬱と爲す、各、その性情の近き處より、終にこの二大宗を開き出し、並に後世の準的なり。試に前詩の「禁裏疎鐘官舍晚。省中啼鳥吏人稀。」及び本篇の「食隨鳴磬巢烏下。行踏空林落葉聲。」の諸聯を以て初唐沈・宋諸家の妙句と對誦すれば、その興趣の深き、判然として別途の若し、又、之を中晩の名篇と較看すれば、風味約略として相近きもの尠からず、詩風遞降の漸、此に於て乎之を觀るべし。要するに初・盛間一種詩調の稚氣は、摩詰に由つて淘汰されて妍秀となり、少陵に因つて鎔鑄せられて雄拔と爲る、是れ格調を研究するものゝ尤も留心すべき所なり。

後聯は寫景にして、中に二人の道業を況す、唯、水の香案を侵し花の石牀に滿つるを言ふのみにして、迸水雨花、乃ち佛家の典故に逗入す、然れども若し又眞に此の如くなりと云はゞ、則ち虛誕に涉るの嫌あり、因つて「定」・「應」の二虛字を用ひ、未了の語を做して敢へて斷ぜず、之を作者が想像に止む、此の如くに筆を下せば、已に過譽の弊なくして、又倍〻二人の身分を高からしむ、酬贈の一體、本と應付供給の語を忌

む、學者此種を三復せば、それ譏なきに庶幾からん乎。

奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作應制

李 憕

別館春還淑氣催。　雲飛北闕輕陰散。
御柳遙隨天仗發。　已知聖澤深無限。

三宮路轉鳳凰臺。　雨歇南山積翠來。
林花不待曉風開。　更喜年芳入睿才。

玄宗の天寶十四載、安祿山反し、その十二月進んで洛陽を陷る、留守李憕・御史中丞盧奕、之に死す。見るべし憕は是れ殉節忠義の士、この篇詩を以て論ずれば固より王右丞が詩中に畫あるに及ばず、然れども王は玄宗の西蜀に幸するに當つて、扈從に及ばず、終に祿山の得る所と爲り、迫るに僞署を以てす、凝碧の管絃、心を野煙に傷ましむと雖も、豈に李が一死以て轟烈の忠を效すに如かんや。則ち人物を以て論ずれば李、豈かに王の上に在り。況やこの篇至れる者に非ずと雖も、初唐の格たるに於ては未だ之を中調以下に置くこと能はざるをや、題義は王が詩の條下に具す、今贅せず。

蓬萊・興慶・望春を唐の三宮とす、則ち首句の別館は當に是れ閣道中の留春閣を指して言ふなるべし。時天子此に留憩す、故に「春還淑氣催」と云ひ、陽春の和氣の車駕に隨つて至れるの意と做したり。「路轉」の二字は正にその閣道中たるを寫す、閣道は高處に架す、故に鳳凰臺と云ふ、これ泛稱のみ、必ずその所を死泥せず。前聯は春望の景、時正に雨中に屬す、而して雲散じ雨歇むと云ふものは、陽和の氣已に車駕に隨ふ、則ち天も亦必ず之が爲に陰雨を霽らして以て天子の春望を暢するものあるべきを言ふ、これその當に然るべきを想像して以て美を天子に歸す、設象頗る佳絶なり。後聯二句も亦この意を演繹したるに外ならず。

御柳青青の色遙かに天仗に隨つて發す、則ち林花の開くも亦晩風を待たず、輦輿の經る處從つて葩を披き芳を呈せざるは無きなり、是れ以て首句の「春還淑氣催」を解釋すべく、亦以て前聯の「雲飛雨歇」を證するに足る。而して柳發し花開くは亦寔に雨露の潤澤を得たるに由る、故に七句に「聖澤深無限」と云うて、以て之を天子に歸還したり、結句は春望の御製を舉げ奉和應制の意を見はす、これは是れ一定の法式、その年芳の字仍ほ首句の「春還」云云に回顧したるは頗る完密と稱すべし。

送魏萬之京

李 頎

朝聞遊子唱離歌。　昨夜微霜初度河。
鴻雁不堪愁裏聽。　雲山況是客中過。

關城曙色催寒近。　御苑砧聲向晚多。
莫是長安行樂處。　空令歲月易蹉跎。

倒挿の句法逆起し得て妙に入る、故に誦し去つて別意廻環し、一倍悽惋の情を深うす、この種の格此より前き多く見ず、東川に至つて始めて成り、終に詩家をして七律も亦用筆の如何に由つて、委婉曲折、自在に意思を運するに足るの理を發明せしむ。少陵の開闔動盪なる、是れ他が神識超邁にして獨り畦町を闢きしに出づと雖も、亦東川が創格に依つて得たるもの尠少にあらず、王右丞と並べ稱して正宗と爲すは、眞に愧ぢずと謂ふべきなり。

昨夜微霜の時候、初めて黃河を度つて來るの游子、席猶ほ未だ暖なるに及ばずして、その翌直ちに長安に向つて去る、行李匆匆、寧ろ黯然たらざらんや。起卽ち朝に雞歌を唱ふるを以て落筆す、この倉遽の神を寫し得て盡せり、鴻雁の哀嗷せる、愁裏にして之を聽く早く已に堪へず、況や千疊の雲山、この客程倥偬の中に過ぎ去るをや、二句は一は是れ來時、一は是れ去時、三は二を頂し、四は首に繳へる、本と是れ卽景、情を生じて筆に忽起忽落の妙あり。「關城曙色催寒近」、仍ほ是れ去時の光景。「御苑砧聲向晚多」、便ち到日の風物たり、曙色の二字首句の「朝聞」に照映して妙に晨別凄寒の狀を寫す、一本に「樹色」に作れるものあり、今從はず、七八は是れ贈別珍重の言、羈旅の幽愁、雲山を空過するを恨むと雖も、都門の行樂は亦歲月を徒費せんことを恐る、故にその長安に到るの日、須らく時に及んで勤勵すべきを言ひて、勸勵の意を申したるなり。

寄盧司勳員外

流澌臘月下河陽。　草色新年發建章。
秦地立春傳太史。　漢宮題柱憶仙郎。
歸鴻欲度千門雪。　侍女新添五夜香。
早晚薦雄文似者。　故人今已賦長楊。

盧司勳は蓋し時に歲杪臘末を以て洛陽を發し、翌年新春を以て長安に着す、故にこの詩、盧に寄す、意を新年に致したり、流澌は解氷を謂ふ、河陽は河南府にして古の洛陽なり、君の初め河陽を下り、長安に向つて發せしは、正に是れ臘月の末梢にして、河水の流氷澌澌たるの候なりき、然ればその長安の帝都に入るは、當に新年の草色漸く舒びて、建章宮畔に萌發するの時なるべし、秦地は長安を指す。禮の月令に、立春に先だつ三日にして、太史入つて天子に謁し、某日の立春なるを奏すとあり、この例唐に至つて未だ廢せざるなり、而してこの日を以て盧司勳偶〻陞官の事あり、入つて尙書郎を拜す、故に「漢官題柱憶仙郎」と云ふ。題柱は漢の尙書郎田鳳が故事、靈帝常にその名を柱上に題す、詳かに排律、沈佺期が蘇員外味玄に酬ゆる詩の

條下に具したり、參照すべし。千門萬戸白雪皚皚たるの時、鴻雁北に歸りて將に宮闕を度らんとす、是れ長安立春の景を寫すなり、五夜の昧爽、侍女夙に興きて香を添へ、以て早朝の衣を薰ず、是れ盧が陞官得意の狀を寫すなり、結末は卽ち寄詩の本意、楊雄を以て自ら比し、盧の己を薦めんことを望むなり、漢書に成帝の時、客に楊雄が文の相如に似たりと薦むる者あり、帝乃ち雄を召し、詔を承明の庭に待たしむ、七句「早晩薦雄文似者」とは正にその成語を用ひ、相如二字を略し去りたり、長楊は卽ち雄が賦する所の篇名、故人は李自ら指す、盧を謂ふに非ざるなり。

題璿公山池

遠公遁跡廬山岑。
片石孤雲窺色相。
指揮如意天花落。
此外俗塵都不染。

開士幽居祇樹林。
清池皓月照禪心。
坐臥閒房春草深。
唯餘玄度得相尋。

傳に稱す李東川は性、疎簡にして世務を厭薄し、最も玄理に長じて、奸を塵喧の外に結ぶ、故にその詩、道緇を言ふに於て往往衆作より高しと。この篇以てその言の虛ならざるを見るなり。遠公は晉の慧遠、廬山の清淨なるを愛し精舍を中に結ぶ。開士は猶ほ大士・祖師と謂ふがごとし。祇樹林は祇陀太子の園、佛世尊の嘗て說法する所の地、言ふこゝろは璿公殆ど遠公の跡を廬山に遁れしが如く、山に據つて以て幽居を作す、祇樹林中に在るが如きの想ありとなり。

前聯は山池を寫して以て璿公を況す。片石・孤雲は是れ山、清池・皓月は是れ池、雲石は定なく、色相は着なし、若し窺はしむべくんば、只是れ片石・孤雲の色相のみ、池月は本と虛に、禪心も亦空し、若し照らさしむべくんば只是れ清池・皓月の禪心のみ、雲石を以て相とす、豈に悠然自在の妙詣に非ずや、池月を以て心とす、眞に光明無垢の境界たり、此の如くに璿公を寫して、璿公その人之を呼べば出でんと欲す、何ぞ必ずしも頰上に三毫を加ふるを用ひん。

後聯は璿公が動靜の機趣を寫す、如意を指揮して天花亂落す、是れその動機。閒房に坐臥して春草自ら深し、是れその靜趣。結末は言ふ、この指揮坐臥の下、絲毫も俗塵に染むることを容れず、惟、一人の許元度の如きもの、以て相訪うて淸談することを許すのみと、元度は晉の高士にして風情簡素、辟して司徒掾と爲すも就かず、同時の名僧支遁と往來して、日に禪悅を談ず、所謂淸風明月に、輙ち玄度を思ふと云ふもの是れなり。東川乃ち以て自況す、その自ら視る所以、亦等閑に非ざるを知るべし。

寄綦毋三

新加大邑綬仍黃。
近與單車向洛陽。

顧眄一過丞相府。　風流三接令公香。
南川粳稻花侵縣。　西嶺雲霞色滿堂。
共道進賢蒙上賞。　看君幾歲作臺郎。

蓋母三は蓋母潛なり、殷璠曾てその詩の擧體清秀にして蕭蕭として俗に跨る、若し氣質を加へ彫飾を減ぜば、則ち三百年外に高視すべきを稱せり、又、傳にその善く方外の情を寫すを言ふ、則ちその風味髣髴として東川に近し、而してこの時東川は新鄭縣尉に官す、蓋母潛も亦宜壽縣尉より移りて洛陽縣尉と爲る、同じく清才を抱きて、共に卑官に屈す、その氣誼の相得たる想ひ見るべきなり。

今蓋母は宜壽縣より洛陽縣に遷る、尉官たるは同じと雖も、地方大小の差、頗る榮轉と稱すべし、因つて「新加大邑綬仍黃」と云ふ、漢制丞尉の官は三百石にして銅印黃綬を用ふとあり、卽ち黃綬は尉官の服制なり、一「仍」字を用ふ、榮遷を賀すと雖も、實に亦無限の悲意を中に寓したり、單車は漢の襲遂が乘じて以て行郡せしもの、地方官に切なり、洛陽は所謂大邑にして原と是れ都會の地、丞相中書の第宅多し、則ち蓋母がこの行、その丞相一朝の顧盼を得て、令公三日の香坐に接し、深く此等大官の知遇を受けんこと必せり、況や一縣の粳稻、滿堂の雲霞、農務大いに登り、治績備に擧がりて、善聲鄉里に嘖嘖たるをや、抑、賢を進むるは是れ大官の任、朝廷又之れに上賞を加へて以て人材の登庸を奬勵す、今、蓋母が治績此の如くして諸大官の知遇彼の如くなれば、安んぞ喜んで薦引せざるものあらん、故に幾歲を出でずして必ず君が尙書臺省の

郎官と爲るを看るべしと云へり、詞意は此の如くなるもその內亦暗に陞進の實は難事に屬せるを含吐す、宜しく深く幾歲の未定詞たるに玩味すべきなり。

魏の荀彧中書令に官す、性、薰香を好み、その坐する處常に三日香し、時人之を令公香と稱す、是れ第四句用ふる所の故事、但し、前句丞相府は別に出典なし、借用に出づるを以て妨げ無しと云ふと雖も、未だ跛足の病を免れざるに似たり、潘安河陽の宰と爲りて花を一縣に栽ゑ、宓子單父を治めて琴を堂上に彈ず、五六必ずその典に死黏せずと雖も亦影借する所あるに庶幾し、漢の蕭何の傳に賢を進むるものは上賞を受くとあり、七句その成語を用ふ。

送李回

知君官屬大司農。　詔幸驪山職事雄。
歲發金錢供御府。　晝看仙液注離宮。
千巖曙雪旗門上。　十月寒花輦路中。
不覩聲名與文物。　自傷留滯去關東。

詩意に由つて之を揣るに、李回はは司農の丞に官し、當時驪山行幸の事あるを以て、召して供奉に加へら

る、司農は穀貨調度の事を掌れるが故に、行幸の時は必ず扈從せしめざるべからざるを以てなり。前四句は隔句申意の法を用ふ、官、大司農に屬す、故に御府の錢糧を供するなり、驪山の幸に陪す、故に離宮の仙液を看るなり、千巖の雪、十月の花、送別の時の景に卽きて扈從の日の狀を想像す、結は自己がこの盛典に陪するを得ざるを憾みとす、久しく新鄕縣尉として下僚に沈滯し、曾て目に聲名文物の鴻儀を覩ることを得ず、寧ろ悒怏なからんや、上の盧司勳員及び蕭母三の兩詩を併せて、三たびその意を致す、東川たるもの亦悲しむべきなり、その遂に玄理に耽りしは想ふに亦是れ已むを得ざるの一着ならんのみ。

此等の詩要するにその一を擧げて以てその餘を概して可なるのみ、于鱗は乃ちその東川たるの故を以て連篇・累牘、頻に登選を加へ、轉た盛唐以後の諸家に於て之を闕焉に付す、門戸依傍の陋習眞に別に肺腸あり、千歲の下、猶ほ人をしてその故を喩るに苦しましむ、笑ふべきなり。

宿瑩公禪房聞梵

花宮仙梵遠微微。　月隱高城鐘漏稀。
夜動霜林驚落葉。　曉聞天籟發淸機。
蕭條已入寒空靜。　颯沓仍隨秋雨飛。
始覺浮生無住著。　頓令心地欲歸依。

梵は梵唄、誦經諷呪の聲なり、月隱れ漏稀れなり、是れ淸夜岑寂の候、花宮の仙梵、遠處より起りて初めは甚だ微微たり、「遠微微」の三字、乍ち聞く時の神理を寫す、尤も幽妙に入る、已にしてその聲忽ち疾、霜林の落葉の如く、已にしてその聲忽ち澄、天籟の淸機かと疑ふ、蕭條たる寒空、その聲忽ち遠くして辨ずべからず、颯沓たる秋雨、その聲忽ち近くして飛ばんと欲す、二聯梵聲の緩急疾徐を分寫す、神に入り化に入り、水を繪がき聲を繪がく、律調にして此に至る、洵にこの體ありてより未だ曾て有らざるの好文字なり、詠物の祖と稱すべし。

七八梵聲の斷續して定まらざるより、忽ち深省を發して、以て浮生の住著なきを感ず、因つて心地を淸淨にして以て三寶に歸依せんと欲す、出語自然にして、牽强補綴の跡なく、仍ほ頭より一氣して下れり、後人之に倣ふ、必ず纖仄に落つ、是れ徒らにその句を追琢するの工を知つて、天然の神韻、湊泊すべからざるものあるを知らざるの過なり。

贈盧五舊居

物在人亡無見期。　閒庭繫馬不勝悲。
窗前綠竹生空地。　門外靑山似舊時。
悵望秋天鳴墜葉。　巑岏枯柳宿寒鴟。

憶君淚落東流水。歲歲花開知爲誰。

盧五は想ふに是れ盧司勳員外ならん、その人已に逝き、その舊居を經て而して作る、題の「贈」字は當に是れ「題」の字の誤なるべし、「物在人亡無見期」作詩一篇の本意先づ之を首句に提す、以下は則ちこの意を搖曳して哀傷の意愈〻深し、是れ亦一格なり。

舊居依然たり、是れ物在るなり、盧五已に逝く、是れ人亡きなり。我れ來つて馬を閉庭に繫ぐ、實にその悲慘に堪へざるものあり。次聯はみな「不勝悲」より生出す。綠竹青山は初めより舊居中の物、所謂物在るなり、而して竹は空地に生ず、荒涼たる知るべく、山は舊時に似たり、慘澹たる想ふべし、悵望すれば秋天、隙葉空しく鳴り、纍紜たる枯柳惟〻寒鴉を宿す、所謂人亡きなり、而して天には秋と曰ひ、葉には墜と曰ひ、柳には枯と曰ひ、鴉には寒と曰ふ、みな是れ渙泗汎瀾の情緒を觸動せざるなし、江水東流逝者は斯の如し、安んぞ君を憶うて落淚せざるを得ん、試に問ふ花開くこと歲歲、それ復た誰がためにして爛漫たる耶。無端に發問して愈〻痛意を見はす、歸着する所は則ち止〻是れ「物在人亡」の感。

望薊門　祖詠

燕臺一去客心驚。笙鼓喧喧漢將營。
萬里寒光生積雪。三邊曙色動危旌。
沙場烽火侵胡月。海畔雲山擁薊城。
少小雖非投筆吏。論功還欲請長纓。

薊門は燕の地、燕臺は即ち昭王の黃金臺なり、「客心驚」の三字全篇を籠罩す、乃ち積雪の寒光、危旌の曙色、沙場烽火の侵、將營笙鼓の喧、往くとして一「驚」字の神理ならざるは無し、蓋し大旨は言ふ、客中征戰の相逼るに驚き、眼にその狀を覩て、覺えず慷慨す、故に落魄の書生と雖も、亦奮うて功を建てんことを思ふとなり。

漢將の營、笙鼓正に喧し、是れ敵を迎ふるに急なるなり。笙鼓は須らく笳鼓と做して解すべし。歌舞を謂ふに非ざるなり。敵は朔北より來る、萬里の積雪、寒光凜として逼れり、而して三面より我が薊門を圍む、曙色嚴肅にして、危旌爲に動けり、一「危」の字刺眼の至なり、烽火の月を侵すは、敵の近うして愈〻急なるを狀し、海山の城を擁するは、我が營の孤にして危きを見る、兩軍の接仗頃刻を出でずして、勝敗の決、未だ測るべからず、客心如何ぞ驚かざるを得んや、既に之に驚く、即ち更に敵愾の念の勃然として相生ずるに禁ずべからず、是れ一轉して投筆請纓の意に入る所以なり。

投筆請纓は並に開卷魏徵が五古に見ゆ、後漢の班超嘗て傭書の吏となりて母を養ひ、久しく勞苦す、忽ち筆を投じて歎じて曰はく、大丈夫他の志略なきも、猶ほ當に傅介子張騫と爲りて功を異域に立て、以て封侯を取るべし、安んぞ能く久しく筆硯を事とせん乎と、又、終軍自ら請ふらく、願はくは長纓を受け、必ず南

越王を綱して之を闕下に致さん云云、徽が詩を釋するとき未だ細かに注明を爲すに暇あらず、爰に補注を加ふ、初學が互參に於て未だ益なしと云ふべからざるを以てなり、而して詠がこの詩、徽が古風と用典相同じきは、時の危殆に際し、幾分か又その開國の功臣に向つて懷を致し、撥亂反正の功を思ふものと做して看んことを要す。

九日登仙臺呈劉明府

崔署

漢文皇帝有高臺。　此日登臨曙色開。
三晉雲山皆北向。　二陵風雨自東來。
關門令尹誰能識。　河上仙翁去不回。
且欲近尋彭澤宰。　陶然共醉菊花杯。

九日登高は歳節の恒例、仙臺は所謂望仙臺にして、漢の文帝が築いて以て河上公を望むの處、明府は縣令の稱なり、河上公は文帝の時菴を河上に結ぶ、故にこの名あり。文帝曾て老子を讀んで解せざる處あり、使を遣はして之を公に問へば、曰はく、道は尊く德は貴し、遙かに聞すべきに非ずと。因つて帝親らその庵に幸して之を問ひ、且つ曰はく、普天の下は王臣に非ざるは莫し、朕故に自屈する能はず、乃ち高なる無からん乎と、河上公卽ち身を一躍し、冉冉として空に登り、地を去ること數丈、謂つて曰はく、予は上、天に至らず、中、人に至らず、下、地に至らず、何の臣か之れ有らんやと、帝因つて車を下りて稽首す、公遂に素書及び老子章句二卷を授けてその所在を失すと云ふ。事は晉の葛洪が神仙傳(卷三、河上公)に見えたり。この篇因つて老子の事を經とし、九日並に明府の事を緯として一章を組成す、具さに綰合の工妙自然を見る。

首句は是れ望仙臺、次句は是れ九日登高、「曙色開」を以て前聯を提起し一貫して下る、文脈尤も自然なり。三晉の雲山、二陵の風雨、みな是れ登高曙望中の景、而して渾成雄豁、名狀すべからず、關令尹喜は周の大夫、東來の紫氣を望んで、老子の關を過ぐるを知り、終に拜して弟子と爲り、俱に流沙に游び終る所を知らず、是れ老子に關するの故事にして、その令尹たるは恰も亦明府に切なり、更に妙は上聯「東來」の二字是れ寫景と雖も亦暗に彼の紫氣東來に一影し、以て關令尹が事を逼出するに在り、針線の細、此に至つて殆ど喩ふる辭を知らず、只善讀の者の神解に待つある耳、「河上仙翁」の句は是れこの臺の本事、首章「漢文皇帝有高臺」と相對峙して一篇の關鎖を爲せり、七八は陶淵明が彭澤の令たりしとき、九日に菊を把りて坐す、忽ち王弘の酒を送り來るに逢ひ、卽ち便ち就いて酌みしの故事を用ふ、蓋し彭澤宰を以て劉明府に比す、而して又、重陽に切なり、文脈を剖して之を云へば、旣に「關門令尹」を以て明府を影寫し、河上翁の回らざるがために、近く彭澤の宰を尋ねんと云ふ、語勢の順にして層次轉接の妙なる、最も玩味せざるべからざるなり。

五日觀妓

萬楚

西施謾道浣春紗。　碧玉今時鬬麗華。
眉黛奪將萱草色。　紅裙妬殺石榴花。
新歌一曲令人豔。　醉舞雙眸斂髻斜。
誰道五絲能續命。　却令今日死君家。

萬楚は開元間の進士にしてその傳甚だ詳かならず、この詩、その意は冶蕩に似たりと雖も、猶ほ六朝古豔の調たるを失せず、後世纖仄綺靡の音とは固よりその選を異にしたり、然れども前後雄麗蒼鬱の諸作に較べては、殆ど鐘磬・竽籥、鏘鏘たるの間、忽ち箏琶の音を聞くの想あり。吾れは格調を以て詩を取るの李滄溟にして、能くこの種の詩を遺棄せざりしを題とすると同時に、彼れは唯、盛唐たるの故を以て復た選法の不倫なるを顧みる能はず、漫に採擇を加へしを陋とせざる能はず。山陽賴氏の謂つて瀾漫となせしは豈に此等が爲に非ずや。（校訂者云ふ、「山陽遺稿卷二、論詩絶句廿七首」に「潰南選法本瀾漫」とあり。）

西施は原と是れ吳國苧羅溪上の浣紗女なり、西施の浣紗、美名を千歲に傳ふ、然れども若しこの妓に比せば、安んぞその空名に非ざるを知らん、故に「漫道」と云ふ。碧玉は劉宋の時汝南王が嬖妓の名にして、六朝の小樂府に「碧玉小家女。來嫁汝南王。」又「碧玉破瓜時。郎爲情顚倒。」（樂府歌玉）など見ゆるもの是れなり。碧玉をして今時に生れこの妓とその麗采・華容を鬪はしめば、正に恐らく

は遽かにその優劣を判ずる能はず、この妓の容華或は碧玉の上に在るも亦測るべからざるなり。漢の皇后、陳の貴妃、並に麗華を名とするものあり、又、庾信の詩に「直將劉碧玉。來過陰麗華。」（樂府和趙王美人春日）若しくは「定迎劉碧玉。將遇陰麗華。」（詠畫屏風詩二十五首）等の語あるを以て、擧げて以て本篇を解し、麗華を以て人名としたるの舊解あり、然れども細かに詩意を審すれば、只是れ麗采華容と云ふのみ、斷じて人名を堆砌したるものに非ず、故に從はず。

前聯の萱草・榴花は並に端午の日の節物に屬す、乃ち萱草の綠色を以て妓の眉黛に貼し、榴花の紅豔を以て妓の裙裾を襯す、着色渲染、頗る鮮麗、好看を極め、觀妓の恰も五日たるに適切ならしむ、後聯は妓の妖冶人を動かすの態を寫し、以て結句の意を逼出す、「醉舞雙眸斂髻斜」僅かに七字と雖も、その送睞流盼・忍俊傳情の神を活寫し、何人か之を觀て心思恍惚ならざるものあらん、故に七八その臂上に繫げる五絲の續命縷と稱するに拘らず、今日を以て君が家に死せんことを願はんと云ふ、所謂眞箇に銷魂せんと欲するの意なり。風俗通に五月五日には五綵絲を以て臂に繫ぐ、之を續命縷と名づくとあり、則ち又是れ端午の事、俱に五日觀妓を曲寫する所以、その句の甚だ眞率にして一往情深きは、是れ後來韋縠が才調集の一派の宗とする所なり、流れて韓偓が香奩と爲りて、則ち全く古意を失し、一に細巧を以て能事と爲し、蕩焉として返るを忘れ、竟に塡詞の濫觴を開けり、但、微辭を美人香草に託する、李玉溪（商隱）が如きは、自ら當に別に論すべきのみ。

杜侍御送貢物戲贈

張謂

銅柱朱崖道路難。　伏波横海舊登壇。
越人自貢珊瑚樹。　漢使何勞獬豸冠。
疲馬山中愁日晚。　孤舟江上畏春寒。
由來此貨稱難得。　多恐君王不忍看。

この詩は杜侍御が貢物を送り至るに由つて、慨を遠路に致す、戲贈と云ふと雖も、實は諷諫の意なり、故に落筆先づ道路の艱難を領起す、この題にしてこの發端あり、則ち首一句を誦してその意早く顯然たるなり。

銅柱は交阯の境、馬援南征の時に建てゝ以て界とせし處、珠崖は唐の崖州府、その地南海に瀕して珠を產す、伏波・横海並に將軍の號、一は馬援を云ひ一は韓說を云ふ。抑〻此の如き荒服の絕徼、道路の難き、固より言を須たず、幸に伏波・横海の諸將の、その遠を憚らずして之を征服したりしを以て、今に至るまで遙かに王化を仰ぎ職貢を通ぜり、夫れ然り、故に越人は自ら珊瑚樹を貢して、諸を闕廷に致す、「自」の一字味ふべし、蓋し彼れ威武に震慴し誅求を待たずして至るなり、然らば則ち奚ぞ又遠く漢使を勞して、更に珍異の物を徵索するを須ひんや、況やその使者たるの人は、獬豸を冠して、邪を闢き正を持するの侍御たるに於てをや。この句は杜を指す、想ふに杜は當時聖旨を奉じて貢物を催徵したるの事實ありしならん、獬豸は侍御諫官の冠する所、詳かに排律の部に注したり。

疲馬孤舟の一聯は、貢獻の者の途中の艱難を寫し、以て第一句に應じ、その意を申明す、崎嶇險危、慘悽悲苦、この愁ふべく畏るべき無數の境を經て來る、その全然、京に達するを得る者は、寔に十の二三に過ぎず、故に「由來此貨稱難得。」と云ふ。人君たるもの、臣子の勞苦する此の如きを察せば、寧ろ復た之を看るに忍びんや、君若し之を愛せば、自ら當に宮庭中に賞玩さるべし、何ぞ杜侍御がその餘を分つて我が家に送り至るの理あらんや、杜侍御にして之を我れに送る、天子の之を看るに忍びざるや明かなり、此の如くに立言するときは、德を天子に歸して、而して却つて咎を杜侍御に致す、蓋し作者の意、寧ろ罪をその友に獲るも、その君の過失を顯言するに忍びざるに在り。若し此を以て杜侍御を刺るの詩なりと謂はゞ、此れ則ち蛤蜊を食うてその味の在る所を知らざるものなり。當時玄宗、楊貴妃のために遠く荔支を萬里の外より貢せしむ、驛傳馳騁、人馬の途に斃るゝ者、その數を計ることなし、作者貢物の何物たるを明示せずと雖も、その命意の痛切此に至るより推すときは、侍御が分送、卽ちこの海南の珍味たること明らけし。

送李少府貶峽中王少府貶長沙　高適

嗟君此別意何如。　駐馬銜杯問謫居。
巫峽啼猿數行淚。　衡陽歸雁幾封書。
青楓江上秋天遠。　白帝城邊古木疎。

聖代卽今多雨露。
暫時分手莫躊躇。

峽中は所謂巴蜀巫峽の地、長沙は卽ち楚の黔中、南岳衡山の近接せるの所、王・李の二少府謫を蒙りてこの兩地に分謫せらる、起聯二句は二人を合して之を提起し、二聯に於ては兩地を分寫し、又綜錯して之を出す、七八仍ほ二人を合寫し、以て起筆に應ず、深く史家合傳の體を得たり。この作或は謂ふ、是れ中唐盧綸の詩なりと。然れども高達夫が詩は正に所謂氣質を以て相高うし胸臆間の語多しと云ふを以て適評とす、何ぞ亦その語の沈痛悲切にして多く盛唐の風氣に合はざるを疑はんや、余は寧ろ適が作たるを信ぜんと欲す。

首一句神傷を不言の中に寓す、蓋しその謫居の何等の地たるを詳かにせば、則ちこの別の神情何如は、問はずして知るべきを以てなり、李少府が向ふ所は峽中なり、巫峽の猿は三聲にして肝腸斷絶す、故に古樂府に「巴東三峽猿鳴悲。夜鳴三聲淚沾衣。」(女兒子)の語あり、君今往いて此を聞く、その淚下る果して是れ數行ぞ、王少府が赴く所は長沙なり、衡陽の雁はこの峯に到つて回り復た南せず、而して雁足に書を繫ぐべきは漢代蘇武の曾て爲せし所、君今往いて之に逢ふ、その書を繫ぐ知んぬ亦幾封ぞ、

青楓江上には、秋天の遼遠なるを望む、江は楚中にあり、是れ王少府が謫處、白帝城邊には、古木の蕭疎たるに値ふ、城は蜀地に在り、卽ち李少府が遷居。二君なるものゝ前程大約此の如くなりとせば、則ちその馬を駐め杯を銜む時の心緒、嗟嗟何ぞ復た多言を要せん、然れども今や聖天子上に在り、澤は雨露の如し、賜還は日あり難赦は待つべし、行け行け、少しも躊躇すること勿れ、この別れ只是れ暫時の分手のみ、二君なるもの決して臨行の際に猶豫することを須ひざるなり。都べて「意何如」の神理を以て全篇を行ふ、深婉凄

切の至なり。

清初の朱氏(彝尊)は意を逆へて之を解す。曰はく、人臣の一身は、惟、君の命ずる所、今や二公は貶せらる、卽ち口に怨辭なきも、或は中に一點怨むの意を萌せば、便ち是れ不忠なり、起に「嗟君此別意何如。」と曰ふ、妙妙、蓋し意何如の三字推して至微至隱の地に至り、便ち一段の起愛起敬、敢へて疾怨せざるの至誼ありて言外に勉む、而して之に接するに謫居を問ふを以てする者は、東西南北、總べて君恩に屬し、地を擇ばずして之を安んず、方に是れ臣を以て君に事ふるの義なるを言へり、三四は之を承く、猿を聞いて淚を下すは、危險も辭せざるなり、歸雁に書を寄するは、遠道も慮ることなきなり、若し二公能くこの大義を明かにせば、則ち青楓・白帝も都べて止まるべく安んずべきの地たり、若し二公この大義を明かにせずんば、則ち秋天古木、みな悲しむべく泣くべきの時たり、末は聖明雨露、暫時分手を以て結とす、貶謫の人を送る常套なりと雖も、而かも始終君臣の大義を以て相勉む、最も體を得たりとすと(靜志居詩話卷二)。これ句句之を反說す、固より詩の本意に非ず、然れどもその閎辨頗る愛すべし、雖肋と雖も亦棄つべからざるに似たり。

夜別韋司士

高館張燈酒復清。
只言啼鳥堪求侶。
夜鐘殘月雁歸聲。
無那春風欲送行。

黄河曲裏沙為岸。　白馬津邊柳向城。
莫怨他鄉暫離別。　知君到處有逢迎。

燈明かに酒清し、正に是れ夜別の時、鐘微に月殘す、即ちこの夜別の景、而して歸雁の聲を聞き、忽然として夜別の情緒に根觸す、故に前聯、雁聲を承けて以てその情緒の堪へざるを述ぶ。

伐木の鳥は吾れその嚶鳴して以て友を求むるものなるを知る、雁も亦鳥なり、而して歸聲あり、是れその啼くや、實に侶を求むるに非ずして、友に別るゝなり、春風行槳の時、又、この良夜に逢ふ、寧ぞ知らん酒を高館に置くの、賞心樂事のためにあらずして、反つて遠客送行のためならんとは、黄河の曲、岸沙際なし、白馬の津、城柳相連なる、明日君去る、此の如く遙遠なり、何ぞ黯然消魂せざるを得んや。

結末は一轉慰諭の語を成す、而して悽意は倍を加ふ、他鄉の二字は即ち上聯、黄河・白馬を承けて來る、語脈自ら亂れず、君に在つては到處に逢迎の人あり、自ら當に別離を怨まざるべし、我れの如きは悽惶として依なし、一旦相別る、何を以てか情を爲さん、他の逢迎あるを寫す、正に自己が聊賴なきを寫すなり、一頓して住み、敢へて明言せず、その限りなきの隱衷は、略〻上段の別緒に於て一吐す、須らく味を文字の外に尋ぬべきなり。

和賈至舍人早朝大明宮之作　岑參

雞鳴紫陌曙光寒。　鶯囀皇州春色闌。
金闕曉鐘開萬戸。　玉階仙仗擁千宮。
花迎劍佩星初落。　柳拂旌旗露未乾。
獨有鳳凰地上客。　陽春一曲和皆難。

舍人・右丞の諸作、起一句みな先づ「早」の字を破題し、而して一は自己が未だ朝せず、一は天子の未だ朝を視ざるより落筆す、嘉州その後を承けて、已に出奇すべきなし、故に鷄鳴・紫陌を以て起る、純ら是れ早景を寫して、既に之を自己の一身に貼せず、又、之を天子の一邊に繫がず、自ら然かく全題を籠罩す、この三なる者、境たるは相同じと雖も、象を取るは各〻異なり、その異を毫釐の末に鑒別して始めて前賢苦心の處を知るべし。

曙光春色、雙雙に提起す、故に前聯曙光に由つて早朝を寫すと雖も、金闕萬戸・玉階千宮、亦暗に春色を帶び、後聯春色に由つて早朝を寫すと雖も、星の初落、露の未乾、仍ほ明かに曙光を點せり、二聯俱に明麗にして「花迎」・「柳拂」尤も神に入ると稱す、星初めて落ちて而して未だ沈まず、露尚ほ凝りて而して滴らんと欲す、その彩粲鮮耀なる、實に他の諸家の無き所なり、胡元瑞、特に王・岑二家を比較して擊賞して置かざる亦理あるに庶幾し。

轉結は和章の意、鳳凰池上客は舍人を指し、陽春一曲は賈が原唱を美す、然れども遙かに少陵が典切に及ばず、已に賈至が條下に詳具す、因つて贅せず。

和祠部王員外雪後早朝卽事

長安雪後似春歸。　積素凝華連曙輝。
色借玉珂迷曉騎。　光添銀燭晃朝衣。
西山落月臨天仗。　北闕晴雲捧禁闈。
聞道仙郎歌白雪。　由來此曲和人稀。

これも亦早朝に和す、然れども既に雪後を冠するときは、その象を取る自ら限局する所あり、從つて詩體の大方を保持すること能はず、これ題の洪纖の別なり。試みに想へ「色借玉珂迷曉騎。光添銀燭晃朝衣。」その借と云ひ、迷と云ひ、添と云ひ、晃と云ふ、雖雖雪意を洗發するに非ざるは無くして、而して語語大いに倣作の態あり、嘉州が超拔孤秀の筆を以てして仍ほこの累犹を免れず、況やそれより下なる者をや。人はその工妙を稱すと雖も、余は甚だ之を喜ばず。

「長安雪後似春歸。」造句頗る奇、蓋し凝華曙輝の相映じて晶晶たる、臘天朔風栗烈の詩と雖も、自ら春

暉の鮮麗なるに似たるものあるなり、況や玉珂・曉騎、雪色の相借すに依つて、轉たその眞假に迷はしめ、銀燭・朝衣、雪光の相添ふがために、偏へにその皓潔を晃す、既にして月は天仗に臨み、雲は禁闈に捧ぐ、物物これ早春の氣象、誰れか之を多抄と謂ふ耶、是に至つて所謂「似春歸」の意、解を費さずして自ら明かなり、結末白雪の曲、和者の寡きを以て王員外が原唱を美む、これ則ち前詩と同じく印板の文字にして、只彼れは陽春を用ひて春色を收め、此れは白雪を用ひて雪後を收む、題目に依つて文字の異を致すに過ぎず、その意に至つては未だ重複を免れざるものなり、嘉州の七律雄壯なるもの、采るべき尠からず、偏にこの種を並べ擧げて、作者のためにその拙を藏するを思はず、これ則ち于鱗嗜痂の癖、渠が笑を千古に貽せるも、職としてこの種を喜べるに坐す、下の西掖省の一首、亦之に倣ふ。

西掖省卽事

西掖重雲開曙暉。　北山疎雨點朝衣。
千門柳色連青瑣。　三殿花香入紫微。
平明端笏陪鵷列。　薄暮垂鞭信馬歸。
宦拙自悲頭白盡。　不如巖下偃荆扉。

西掖省は中書省を謂ふ、時に岑參、右補闕と爲り、中書省に出仕す、事は五律の部に具したり、この詩前半四句はその登朝の時の所見、所謂卽事なり、平明の句は仍ほ前半に貼して登朝の事を述べ、薄暮の句、突轉して退朝の狀に及ぶ、而してその官に在る碌碌、一も事とする所なく終日昏昏として唯、その員に備ふるのみなること、自ら言外に形出す、故に結末折れて感慨に入り、擬扉に退休するの勝れるに如かずと言ふなり。

「薄暮垂鞭信馬歸。」一句何等の愁悶、上無數偉麗の光景、この一句のために打滅せられて殆ど冷灰の如し、功名に熱中する者をして此れを讀ましめば、恐らく啻に一服の清涼散たるのみならざるべし、この一句あり、則ち宦拙頭白の悲、凄然として人を動かす、一篇の精神良に此に在るを以てなり。

九日使君席奉餞衛中丞赴長水

節使横行西出師。　鳴弓擐甲羽林兒。
臺上霜威凌草木。　軍中殺氣傍旌旗。
預知漢將宣威日。　正是胡塵欲滅時。
爲報使君多泛菊。　更將絃管醉東籬。

この詩、前六句は衛中丞を奉餞す、後二句は則ち九日使君の席なり、衛は御史中丞を以て節鉞を持し出て胡敵に臨む、使君は何人かを詳かにせず、蓋しこの日送別の東道たるものなり、節使は衛を指す、橫行は史記酈食其傳の語を用ひ、その威風の天下に橫行するを謂ふ、節使乃ち羽林の精銳を率ゐ、弓を鳴らし甲を擐して、今や西の方師を長水に出さんとす、衛は本と御史たり、故に平生霜臺嚴肅の威凜として草木を凌ぐ、況や戰時をや、その軍中の殺氣の旌旗に傍うて騰騰たるは固より當に然るべきなり、この聯「臺上霜威」その御史たるを明點するのみならず、亦併せて九日の時序を見はす、細心の至なり、「軍中殺氣」は上文を承け、その凜凜の威風を形容して、以て下聯の意を逗す、此の如きの勢威あるを以て胡兵みな風を望んで潰ゆべし、故にその往いて威を宣するの日は、已に是れ敵の將に滅せんとするの時なるを豫知するに足るなり、筆を用ふる捷直にして節勁、但、七八、顯面上已むを得ざるの補筆に屬すと雖も、强弩の末力魯縞を穿たず、ために全篇振拔の氣を減殺するもの少からず、是れ稍、議すべきに似たるのみ、泛菊は陶淵明が事、泛は酒に泛ぶるなり、泛にして多と云ひ、醉にして更と云ふ、乃ち慇懃に餞行するの辭なり。

岑參の七律、予尤もその杜相公が益州を發するに和するの一篇を愛す、その詩に云はく、

相國臨戎別帝京。　擁旄持節遠橫行。　朝登劍閣雲隨馬。
夜度巴江雨洗兵。　山花萬朶迎征蓋。　川柳千條拂去旌。
暫到蜀城應計日。　須知明主待持衡。

節使の出師、相國の臨戎、その事甚だ相類す、而かもその高華雄秀、通體完整、迥に前作の上に出づ、予鱗此れを取らずして彼れを取る、此れ亦解すべからざるものゝ一なり。

首春渭西郊行呈藍田張二主簿

回風度雨渭城西。　細草新花踏作泥。
秦女峰頭雪未盡。　胡公陂上日初低。
愁窺白髮羞微祿。　悔別青山憶舊溪。
聞道輞川多勝事。　玉壺春酒正堪携。

渭西は卽ち藍田縣の地、長安の近郊なり、新春微雨稍〻晴るゝの候、渭城の西郊を歩すれば村情野趣、殊に京塵中の客の心目を嘯す、故に細草新花の踏んで泥と爲るを顧みず、足に任せて而して行く、瞻望すれば秦女峰頭、殘雪未だ盡きず、回顧すれば胡公陂上、落日初めて低る。以上郊行を寫して留連晩るるを忘れたるの意あり、回風度雨は陰晴定めなきの狀、下の「日初低」はその餘意なり、細草新花は力めて首春たるを寫す、次の「雪未盡」はその語尾なり、度雨は猶ほ過雨と云ふが如し。

游賞して暮に到り、意に於て猶ほ未だ飽かず、是に於て平生風塵中に鬱鬱たるを懶むの意自ら禁ずべからざるものあり、故に「愁窺白髮羞微祿。」と云ふ、西掖省卽事の作の「宦拙自悲頭白盡」と同意なり。「悔別青山憶舊溪。」は亦猶ほ「不如歸下偃荊扉。」の意、彼の詩適〻以て本篇の注脚と爲すに足るなり。但、白髮

青山の自ら上聯秦女峰頭の殘雪、胡公陂上の落日と無意中に相映帶するに至つては、その妙遂に口說すべからず、結二句は卽ち藍田の張主簿に呈す。輞川は藍田縣に在り、水木明瑟、地勝概に富む、故に往いて一游せんと欲す、「玉壺春酒正堪携。」とは蓋し張が鄉導を爲さんことを望むなり。

暮春虢州東亭送李司馬歸扶風別廬

柳彈花股雙鶯嬌　紅亭綠酒送君還。
到來函谷愁中月。　歸去磻溪夢裏山。
簾前春色應須惜。　世上浮名好是閒。
西望鄉關腸欲斷。　對君衫袖淚痕斑。

柳彈れ花股にして鶯聲嬌囀す、正に是れ暮春の風物、時に於て綠酒を紅亭に置いて以て歸客を餞賦す、所謂虢州東亭に李司馬が歸るを送るなり。紅亭と云ふものは上句柳彈花股を承けて點染す、頗る詞采あり。前聯上句は司馬が歸らんことを憶ふの初に溯り、下句はその終に扶風の別廬に歸休するを言ふ。蓋し司馬從來函谷に客居して、月に對し愁を生ず、歸心已に動けり、その夢寐の間未だ曾て磻溪の好青山を忘るゝ能はず、是を以て今に及び終に歸去の事あるなり、磻溪は太公望垂釣の處、漢の右扶風に屬す、この聯、造句殊に新

闕、此より前多く見ざるの格なり。

後聯は起二句を承けて轉下し、東亭眼前の景物を一喫して司馬が歸心の動かざるを得ざる理由を見はし、兼ねて自己が留寓不歸の感を含み以て轉結を開出す。餘前の春色は將に盡きんとす、故に宜しく惜むべし、世上の浮名は益なし、故に當に棄つべきなり。閉は等閑の義なり、柳莖鶯嬌みな是れ惜むべきもの、司馬が歸廬は即ち浮名を等閑に付し去りたるなり、今や司馬既に歸つて而して己れ獨り客と爲る、是を以て鄉關を望んで覺えず流涕す、亦猶ほ上首春渭西郊行の詩の「悔別青山憶舊溪。」の意、互參して轉た相發明するに足る、必らず嗷嗷の絮解を待たざるなり。

「到來函谷愁中月。」是れ多く李を指して言ふと雖も、結句より推解して、その中亦自己の在るあるを見んと要す、同じく羈宦に困じて、而して一は歸り、一は留る、因つて他が春色の惜むべきを見て歸り去るを羨むと同時に、亦我が浮名の益なきを知つて猶ほ留滯するの悲を形す、その惜別春戀の情、自ら篇中に在るなり。

萬歲樓

王昌齡

江上巍巍萬歲樓。　不知經歷幾千秋。
年年喜見山長在。　日日悲看水獨流。

猿狖何曾離暮嶺。　鷁鵝空自泛寒洲。
誰堪登望雲烟裏。　向晚茫茫發旅愁。

萬歲樓は晉の刺史王恭が建つる所にして鎭江府城の西南隅に在り、太平廣記に潤州城南に樓あり萬歲と名づくと云ふもの、即ち是れなり。この詩登覽に依つて羈旅の思を動かす、その萬歲の樓名より落想したるは、頗る崔顥が黃鶴樓とその意況を同じくす、亦以て如何に彼の詩が當時に喧傳し、才雋の士をして之を心慕手追せんことを欲せしめしやを知るべし。巍然として江上に聳立するもの、即ちこの萬歲樓、幾千秋を經歷してその觀を改めず、洵に萬歲の名に負かず。この樓に登つて目を極むれば、見る所は惟、山水のみ、山は年年長へに在り、萬歲を經て此の如きなり、水は日日獨り流る、亦萬歲を經て此の如きなり、而して之を見るもの即ち一喜一悲の別あるは何ぞや、山は止まつて移らず、人生安居の福に類す、水は流れて定まることなし、羈旅流寓の感に同じ。誰か安居の山の如きを喜ばざらん、而かも流寓して水の如きは寧ろ悲しむべからずや、この聯已に慨を山水に發す、因つて後聯には更に山水に就き、各、その一物を捕捉し來つて、この意を申明す、彼の猿狖を見よ、山に依つて永く栖み、萬歲を經て曾て暮嶺を離るゝことなし、又、彼の鷁鵝を見よ、水に隨うて飄泊し、萬歲を經るも空しく自ら寒洲に汎汎たるのみ、人も亦此の如く、その遭遇する所の何如に依つて幸あり不幸あり、不幸にして我が身世は流水の如く、我が生涯の浮沈は鷁鵝に同じ、已に安居、山に似たるの福なく、又、猿狖山に依るの幸を望む能はず、況や晚に向うて登臨し、雲煙茫茫として四塞す、

此に對して那んぞ旅愁を發せざるを得ん、一結亦是れ「煙波江上使人愁。」の意、昌齢がこの作の、意あつて黄鶴樓を規撫せしものなること、我が創見に屬すと雖も、斷としてその差はざるを信ず、前聯喜悲相對す、故に後聯兩虚字を用ひて之が神理を剔發したり。「何曾」は「喜」を頂し、「空自」は「悲」を頂す。又「年年」「日日」自ら萬歳の意あり、卽ちこの虚字を解する、亦「萬歳何曾」「萬歳空自」の義たるを見るべし。而してその登臨悵望の悲緒、寔に是れ萬歳千秋鬱結して解し難きもの、歩歩萬歳を離れずして讀む、方にこの詩結構の妙を悟るべきなり、狖も亦猿の類、楚辭に「深林杳以冥冥兮乃猿狖之所居。」(離騷)とあり、獨りその字面を用ひたるのみならず、意も亦此に根す。

題張氏隱居　杜甫

春山無伴獨相求。　伐木丁丁山更幽。
澗道餘寒歷氷雪。　石門斜日到林丘。
不貪夜識金銀氣。　遠害朝看麋鹿遊。
乘興杳然迷出處。　對君疑是泛虚舟。

趙雲菘、七言律體を論じて謂ふ、沈・宋より以て盛唐の初に及ぶ、七律の格式已に定まる、更に一朝の令

甲の如く、當時風雅の士、爭つてその範圍に就かざるはなし、然れども猶ほ多く寫景にして、未だ指事言情、引用典故の體に及ばず、少陵は窮愁寂寞の身を以て、詩を藉りて日を度す、是に於て益〻その變を盡し、惟〻に景を寫すのみならずして、兼ねて復た情を言ひ、惟〻情を言ふのみならずして兼ねて復た典を使ふ、七律の蹊徑是に至つて益〻大いに開け、その後劉長卿・李義山・溫飛卿の諸人、愈〻雕琢に工みにして、その才を五十六字中に盡す、而して七律は遂に高下通行の具と爲り、日用飲食の離るるべからざるが如しと(甌北詩話卷二)。顧ふに少陵の七律は神力超邁、氣魄包籠、蒼莽歷落、開闔奔赴、細かに剖析して之を論ぜんと欲せば、實に千言萬語を縷陳すとも、未だ盡す能はず、今特に雲菘がこの論を拈出する所以のものは、その詩體遷降の變に於て簡にして要を得たるが故なり。于鱗七子の徒、心高く氣驕り、自ら觀ること龍行虎步も啻ならずして、寔はその眼孔の小なる豆の如く、少陵が指事言情の痛切淋漓を極めたるは、變化入神の妙なるを看破すること能はず、却つて若輩が奉じて無上の正法とせる初唐の格に合はざるを以て斥けて頹焉自放とし、その稍〻初唐の格律に類似せる者のみを取つて選中に入る、故に本選を評釋するに於ても、亦大いに少陵の本色に就き一一之を指陳してその毫芒の微妙を發揮するに由なし、是れ予が深く遺憾とする所なり。

張氏の隱居、その人を明示せず、黄鶴の杜註、雜述を引いて云はく、魯の張叔卿・孔巢父、二才士なる者、面目黧黑にして常に飯喫に飽くことを得ず、張氏の隱居は豈にその人に非ずやと、之を不貪の句に徵するに、極めて張叔卿その人たるに近し、又、李白が傳に據れば、白少うして魯中の諸生張叔明・孔巢父等の六人と、徂徠山に隱れ竹溪六逸と稱す、遠害の句を以て考ふれば、亦大いに張叔明その人たるが如し、錢謙益が箋、叔卿・叔明を以て同一人なりと云ふ、或は是ならん。或は又以て當時の山人張彪を謂ふとなせるあり。要するに

必ずしもその人を求めて之を實せず、但、注家紛紜の說を滋うせるを以て先づ此に一言す。

この詩善く幽居の致を寫して旨趣俱に遠し、不貧・遠害等の句の幾分道學の臭味を帶べるものあるを以て、曲に解辭を費し、終に此れを以て理路に涉り言筌に落つるものとして之を議するものさへあり、沈德潛は謂ふ、不貧はその識の淸を言ひ、遠害はその識の曠を言ふ、必ずしも穿鑿せずと、この言自ら確として易ふべからず、故に一切枝葉の論今省き去つて錄せず。

この詩を解釋するもの大約二端あり、その一は、是れ張氏の隱居を訪ひその幽趣を賞して作るものとす、その一は、卽ち是れ題壁の詩にして訪隱の詩に非ず、故に詩中敍述する處は杜が初到の時の景を言ふものにあらずと謂ふ是れなり、前者は通行の說、その言極めて順、後者は異創の見、その言殊に逆、順說の廢すべからざるは論なしと雖も、逆見も亦味なきに非ず、爰に兩者を並べ擧げて一字を易へず、讀者請ふ平心に較量して以てその一を擇べ。

春山に獨行して來つて張氏を訪ふ、伐木の聲を聞いて、而して山はその喧を覺えず、適〻友を求むるの興を添ふるのみ、是に於て澗道に入り氷雪を歷、林邱に至るに及んで石門に斜日を見る、その居の幽僻なるを狀するなり。因つて言ふ張君、能く貧らず、故に夜、金銀の氣を識る、害に遠ざからんと欲す、故に日に麋鹿と同じく游ぶ、吾れ本と興に乘じて來る、この幽居を見て杳然としてその出處を褒ひ、張君に對するに及んで、百念盡く空しく、虛舟の浮んで物に着かざるが如し、蓋しその趣を得て之と俱に化するなり、是れ唐仲言が詩解の說。

第一句は張氏その人を寫し、第二句はその隱居を寫す、「獨相求」とは猶ほ我我周旋と云ふが如し、友を

求むるの謂に非ざるなり、屋を遶るの澗道、氷雪を歷て猶ほ寒く、隙に透るの斜日、林邱に到つて遠く射る、人踪闃然たり、晩晴相對の景畫の如し、此れ正にその居の幽を形容す、杜が途中に見る所の景に非ざるなり。五六は本と張を贊するなり、妙に少陵自己がこの幽居に託宿するの餘に就きて、山中浮湧の氣の、時に寶光を現じ、犬吠麋鹿の游の、時に還た決驥するを見、印して張君が身上に到り、その心地の大段乾淨にして大段洒脫なるを顯はし、「不貧」・「遠害」の四字を以て比類品題す、張君の之れを識り張君の之れを看ると謂ふには非ず、句は彀中に在るも、言は象外に超するなり、七八は自身に拍合し、「不貧」・「遠害」を緊躡して來る、公は固より志を用世に存する者、今張君が恬退此の如きを見て、覺えず心之れが爲に移さる、出でんと欲せば斯人に愧づるあり、處らんと欲せば宿願に乖くことあり、是を以て飄搖として着なき、虛舟を泛ぶるが如く、誰邊に繫泊して可なるやを知らざるのみ。是れ浦二田が心解の說。

按ずるに詩の伐木の篇に云はく「伐木丁丁。鳥鳴嚶嚶。」と、而してその下卽ち云ふ、「嚶其鳴矣。求其友聲。」と、この篇已にその成語を用ひて之に接するに「山更幽」を以てす、此れ則ち六朝の時の名句、王籍が「鳥鳴山更幽」（入若耶溪）の語に本づく、然れば句中自ら鳥鳴の二字を藏したるものと看るも妨げず、此を以て上句の「求」を解して「求友」と爲すは大いに着落あるに似たり、然れども此の如くに看去るときは稍〻廋詞謎語に類するの嫌あり、少陵の大手も歇後の鄭五とその科を同じうせりと謂はざるを得ず、是れ我我周旋の一說ある所以。

澗道餘寒、石門斜日、隱居の幽致を寫すとせるは二說相同じ。但、前說は詩の前半を以て杜に貼して說く、故に歷と云ひ到と云ふはみな杜が途に在るの義と做して解し、後說は前半を以て張に屬して看る、故に只、

景致を寫すに過ぎすと爲したり、後半の解も亦此の如し、前說は之を張に貼し後說は之を杜に屬す、翻轉して各〻見る所を述ぶ、故に主客の異を生ずるなり。

張を主とするものに從はば後聯は自ら文に順つて直截に解すべく、杜を主とするものに從はば後聯は頗る迂餘曲折の致あり、然れども後說に據れば、夜識の「識」の字正に何の解を成すやを知らず。張の不貪なるが故に能く夜中に於て金銀の寶氣を識別すと爲すもの、最も核切なるに似たり。史記の天官書に云はく、敗軍の場、破國の墟には下に積錢あり、金寶の上にはみな氣あり、察せずんばあるべからずと、是れ「不貪」句の本づく所、遠害は孔子晏平仲を評するの語に依據せるなり。

前說は出處の處を讀んで去聲とし、出づべきの處に迷ふものとす、後說は讀んで上聲とし出と處との二義となして解す、細かに迷字・疑字の神理を考ふれば、出處の二義と爲すものその殊に深し、然るときは虛舟の一喩、張に對して百念盡く空しの義とせんよりは、杜自ら出處の際に迷うて彷徨無着の狀を言ふとせるもの理あるに似たり、然れども、この句は自ら莊子の語を用ふ。莊子の原文に云はく、舟に方して河を濟るに、虛船あり、來つて舟に觸る、禍心あるの人と雖も怒ることなし、人能く己を虛うして以て世に游べばそれ孰れか能くこれを害せんと、若しこの意を以て本篇に應用し、解して張が虛心人に接するを美したるものとせば、右二說以外に於て更に妙緒あるが如し、但し斷章取義は詩人の常例に屬す、正に必ずしも原意に膠柱すること能はざるのみ。

宣政殿退朝晚出左掖

天門日射黃金榜。
宮草菲菲承委佩。
雲近蓬萊常五色。
侍臣緩步歸青瑣。

春殿晴嘿赤羽旗。
爐烟細細駐遊絲。
雪殘鵠鵲亦多時。
退食從容出每遲。

これ彼の賈舍人が早朝の唱和、並に五律中春宿左掖等の篇と、殆ど是れ同時の作、杜の遭遇中に在つては稍〻得意境に居るの時たり。故にその出語自ら偉麗を主とし、憂危沈鬱の篇と同じからず、此れ亦曾て屢〻之を論じたるが如し、故に此れを擧げて杜の詩包含廣大にして諸家の長を奄有せざる莫きを證するは則ち可なり、多くこの種を選んで、杜の長は此に在りと言ふが如きに至つては妄誕の甚だしきものなり、左掖は注前に見ゆ、門下省を謂ふなり。

題中本と二事あり、宣政殿退朝は是れ一事、晚出左掖は是れ一事なり、詩は宣政殿退朝を主とす、故に晚出左掖は只結句に於て略ぼ之を一點す、然れども其中自ら公事に黽勉して、敢へて怠慢すること無きの誠意を見る、則ち作詩の本意を究言すれば、寔は晚出左掖を主としたるものと謂ふべきなり。

「天門日射黃金榜。」是れ身左掖より宣政殿に朝見し正にその門に入るなり、「春殿晴嘿赤羽旗。」是れ正にその殿に到るなり、「宮草菲菲承委佩。」陛前に俯伏するなり、「爐烟細細駐遊絲。」殿上を瞻仰するなり。委佩

は禮記（曲禮下）の「主佩垂則臣佩委」の語に依る、委は地に委下するなり、草は地面に在り故に之を承くと謂ふ、從つて俯伏の狀を見るべし。後聯は上文瞻仰の狀を承け、左右の景物に及び、色を設けて點染す。蓬萊は仙居を以て帝居に喩ふ必ずしも殿名と解せず、鵷鶵も亦宮上の瓦のみ、强ひて觀名として之を實するを用ひざるなり。侍臣の句は是れ退朝して左掖に歸るなり、結句は晚出の正文、自ら國風羔羊の篇の「退食自公。委蛇委蛇。」の義に協ふ。

肅宗鳳翔より歸つて再び朝綱を整へ、安史の亂漸く將に平に就かんとす、朝廷稍〻暇にして春色暄和、自ら太平の象あり、故に「雲近」の一聯その玉節金和の觀を極む、或は「雪殘」を解して安史の餘孽猶ほ未だ全く消滅せざるを影寫すと爲すものあり、此れ則ち附會の說、采るに足らざるものなり。

紫宸殿退朝口號

戶外昭容紫袖垂。　雙瞻御座引朝儀。
香飄合殿春風轉。　花覆千宮淑景移。
晝漏稀聞高閣報。　天顏有喜近臣知。
宮中每出歸東省。　會送夔龍集鳳池。

宣政・紫宸の兩殿、並に大明宮中の殿名、按ずるに唐の大明宮の建置は南よりして北す、その第一殿を含元殿とす、含元の北を宣政殿とし、又北を紫宸殿とす。宣政は卽ち天子の日に御して以て朝を視るの處、故に又名づけて衙と曰ふ、天子の之に御するは必ず儀仗・兵旛を具す。群臣の此に見朝する則ち常參と稱す。紫宸は便殿にして是れ天子燕居の所、之を閤と稱す、只〻朔望の兩日に於て、食を諸陵寢に薦むるの次、天子此に於て群臣を朝す、是を入閤と云ふ。この殿は元と君臣相見るの地に非ず、只〻開元の後、玄宗稍く政事に倦み、正殿に御することを欲せず、遂に紫宸に於て群臣の朝を受く、便殿入閤の制此に昉まれりと云ふ、紫宸既に便殿に係る、故に詠ずる所はみな宮中の景、自ら大明・宣政等の作と同じからず。讀者彼此對參して細かにその異處を咀味すべきなり。

首二句は天子出御の時を詠ずるなり、昭容は正二品の宮嬪にして九嬪の一に係る。唐の制は天子坐朝の時宮上引いて殿上に至るを例とす、段成式が酉陽雜俎に今の閤門に宮人あり帛を垂れて百僚を引く、或は則天より始まると云ひ、或は後魏の制に因ると云ふとあり。又開元禮疏に據れば、晉の康獻諸后、朝に臨んで坐せず、則ち宮人をして百官に傳へて拜せしむ、周・隋の世を經て改めず、國家之に因るとあり、その緣起を云ふ一ならずと雖も、唐の宮庭坐朝の際、宮女の引導の事に從ひしは事實たるを見るべし。程大昌が演繁露に唐會要を引く、その言に云はく、晚唐景宗の天祐二年十二月の詔に、宮嬪は女職にして本と內任に備ふ、今後は延英坐朝の日に遇ふ毎に、只〻小黃門をして祇候引從せしめよ、宮人は擅に內を出づることを得ずとあり（武英殿聚珍版唐會要卷三、出宮人の項にも此文あり）。則ちこの制晚唐に及びて始めて廢せられしなり、杜がこの句に據つて考ふれば、宮人已に天子を引導してこの殿に出御し、戶外に留まりて左右の兩列に排し、御坐の定まるを瞻定して、而

して後方に朝儀を引き百官を傳呼して入るなり。故に「雙瞻御座」と云ふ。

時に於て壇香春風に隨うて合殿に飄滿す。合殿は全殿と云ふが如し、この句は殿上に就いて云ふなり。宮花淑景に映じて朝班を掩覆す、淑景は日光なり、この句は階下に就いて云ふなり。而して時の正に亭午に近き、自ら景中に見ゆ、故に第五句直ちに晝漏云云を以て之を接下せり。

抑〻紫宸は宮中最深の處、故に晝漏は聞くこと稀れにして、必ず外廷高閣よりの報を待つ、この句はその深邃なるを見はすなり、正殿の朝見は專ら端殿を主とし、外廷の臣僚敢へて正視することなし、故に天顏に喜あるは、只近侍の臣の便殿朝拜の時に於て始めて之を知ることを得たるのみ、この句はその近君を見はし、深く自己が拾遺の官を以てこの近臣の列に在るを幸とするなり。

「宮中每出歸東省。」東省は左拔にして門下省を指す、この句は所謂退朝なり。「會送夔龍集鳳池。」龍夔は借りて宰相を稱す、鳳池は中書省なり、この句は退後の餘波にして、拾遺等卑近の官、已に朝より歸りて、又大臣宰相が中書の政事堂に集議するを送らざるべからずと云ふなり、蓋し大臣宰相が國政を議するの地は中書省に在り、卽ちその間に入る、拾遺門下の諸僚、みな之に隨つて朝見す、故に朝散じて後は、又之を送りて中書に歸らしむるなり、「會」の一字を着す、此れ亦當時の恆例に屬するを見るべし。按ずるに唐の制、大臣議政の堂は、本來門下省に在りて中書省に在らず、而して杜詩の云ふ所此の如し、因つて文昌雜錄、疑を此に闕きたり、然れども裴炎の傳に考ふるに、初め宰相門下省に於て事を議す、之を政事堂と謂ふ、故に長孫無忌、司空と爲り、房玄齡、僕射と爲り、魏徵、太子太師と爲る、みな門下省事に知たり。中宗の時に至りて裴炎、中書令を以て、政事を關白す、故に終に政事堂を中書省に徙すとあり、然るときは爾來、睿・玄の

二宗を經て肅宗が朝に及ぶまで、裴炎が移轉の舊に沿りて悛めず、故に拾遺門下の官を以て、宰相が中書の鳳池に集まるを送るは、毫も疑ふべき所なきなり。凡そ杜の詩史と稱する所以は、獨り軍國離亂の故に關係せるのみならず、此等の處、みな以て徵實すべく、一代制度文物の掌故、細大俱に遺す所なし、宜なりその百世に寶重せらるゝや。文昌雜錄又「香飄合殿」・「花覆千官」の一聯を引き、杜が晚出左拔の詩の「退朝花底散。歸院柳邊迷。」の句と並べ擧げて曰はく、乃ち知る唐の朝殿、多く花柳を種うることを、今の殿庭は惟〻槐楸を植う、鬱鬱然として嚴毅の氣ありと、此れ亦以て歷代宮掖の變遷を見るべきなり。

或者は「天顏有喜近臣知。」の一句を解釋するに逆意を以てす、云はく、拾遺は末僚にして密侍することを得ず、故に天顏に喜あるも、惟〻近臣之を知る耳、公拾遺と爲る、本と宜しく君に親しむべくして、而して位卑く分疎なるを以て近づくことを得ず、故に建明する所なく、班に隨うて碌碌たり、良に歎ずべきなり、豈に帝寵浸衰の時乎と、然れども拾遺は固より是れ近臣なり、位の崇卑と分の親疎は自ら相涉らず、近臣なるが故に便殿に朝見す、便殿に朝見するが故に天顏の喜あるを知る、その間毫も怨嗟の意あるを容れざるものとす、劉會孟は云はくこの篇從容富麗にして、六句に意外の意ありと、若し之を意外の意なりとして、興觀群怨の旨に參するは大いに好し、句意卽ち此の如しと云はば、吾れは未だ遽かに從ふ能はざるなり。

曲江對酒

苑外江頭坐不歸。
水晶宮殿轉霏微。

桃花細逐楊花落。　黄鳥時兼白鳥飛。
縱飲久判人共棄。　懶朝眞與世相違。
吏情更覺滄洲遠。　老大徒傷未拂衣。

肅宗の至德二載十月、房琯の兵大いに陳濤斜に敗れ、此れを以て相を罷む。子美乃ち上疏して之を救ひ、深く帝の意を拂ふ。帝此れより甚だ子美を省錄せず、翌年乾元元年の六月に至つて終に出されて華州の司功參軍と爲る、是れ寔に子美飄零の始なり。曲江の七律前後凡そ五首、大抵放浪自棄の語多し、蓋しこの年春夏の交の作にして猶ほ未だ斥逐せられずと雖も、已に罷官に意あるなり。その曲江に鄭八丈に陪する詩に云はく、「雀啄江頭黄柳花。鵠鶴漸飛高百尺。蜜蜂遶花鬚蕊碎。細推物理須行樂。何用浮榮絆此身。」と云ふ、亦芳尊戀物華。」夫れ白髮春事のために非ずんば、則ち是れ憂國のため、而して乃ち芳樽に醉うて自ら遣らんと欲す、明かに事の爲すべからざるを知るなり、その「一片花飛減却春。風飄萬點正愁人。」と云ひ、「細推物理須行樂。何用浮榮絆此身。」と云ふ、亦是れこの意を申說す、曰はく「朝回日日典春衣。每日江頭盡醉歸。」曰はく「傳語風光共流轉。暫時相賞莫相違。」是に至つて日として曲江に來らざるは莫く、又日として酒に沈湎せざるは莫し、復た自己が拾遺の職の何たるを辨ぜざるものゝ如し。以上の數詩を參觀して、始めてこの詩命意の在る所を發揮すべし、蓋し彼れは猶ほ朝回の後なり、醉を盡すに及んでは又必ずその家

に歸る、誕漫に屬すと雖も、猶ほ自ら檢する所あり、この詩に至つては然らず、「苑外江頭坐不歸。」乃ち遂に留宿するに至つて顧みず、絕望の至と謂はざる可けんや、先づこの意を領して以て之を讀む、全篇乃ち破竹の如く、その神理、解を待たずして自ら解すべきなり、曲江は芙蓉苑外に在り、故に苑外江頭と云ふ、水晶宮殿は哀江頭の篇の「江頭宮殿鎖千門。」といふもの是れなり、水晶と謂ふはその明麗を借稱するのみ。霏微は暮色、則ち桃花・楊花の亂落し、黄鳥・白鳥の交飛するみなこの霏微中の物なり。久拌の拌は拚に同じ、その人の共に棄つる所なるを以て、終に一生を縱飲中に拚し、復たその他を顧みざるなり。已に世と相違ふ、明かに自己の用ひられざるを知つて、而して猶ほ碌碌朝班の後に隨ふは、實に心に於て忍びざる所、故に再び朝見するに懶しと云ふ。「縱飲」・「懶朝」、是れ卽ち留坐して歸らざる所以なり。此の如くなるときは則ち日に吏情に遠ざかる、自ら宜しく歸つて滄洲に就くべし、然れども、この身實に未だ拂衣して去ること能はず、則ち吏情遠しと雖も、而かも滄洲の更に遠きを覺ゆるなり、嗟乎曷爲れぞ老大徒悲して未だ去らざる耶。七八用意曲折、自ら咎むるの詞を爲してその悲愈〻堪へず、人この境に至る、則ち只縱酒放懷して以て斥逐を待つのみ、讀者その心を諒してその跡を略し、深くその遇を悲しんで可なり。

黄鳥は鶯なり、白鳥は鷺なり、宋の朱翌が猗覺寮雜記に詩の振鷺の注を引いて之を辨じ、而して又云はく、蚊も亦白鳥と名づく、月令仲秋の月、群鳥養羞の注に、白鳥は蚊蚋を謂ふとあり、又、金樓子に齊の桓公髮を開きて之を進むとあり、この白鳥は蚊を指すなり、東坡の詩に云はく、「不怕飛蚊如立豹。又隨白鳥過長虹。」注家前證を引き白鳥を以て蚊と爲すは、その鷺たるを知らざるの過なり。上

句已に「飛蚊如立豹」と云ふ、下句何ぞ更に蚊を說くを用ひんや云云。此れ東坡の詩の祖とする所、本篇に在るを謂ふなり、詩義に關なしと雖も、聊か錄して異聞を廣す。

苕溪漁隱（八卷）、漫叟詩話を引いて曰はく、李商老云ふ、嘗て徐師川が說くを聞くに、一士大夫の家に老杜の墨跡あり、この詩初めは「桃花欲共楊花語」に作り、自ら淡墨を以て三字を改書すと、乃ち知る古人、字は改むることを厭はざるなり、然らずんば何を以てか日鍛月錬の語あらんやと、その言果して然るや否やを知らずと雖も、亦錬字の苟且すべからざるを見るなり。

唐仲言等亦この詩を解するに穿鑿附會の說を以てす、曰はく、久坐して歸らず、意緒煩亂し、江頭の宮殿、之を望んで迷ふが若し、是に於て時物を賦して比と爲す、「桃花細逐楊花落」とは房琯相を罷めて而して己れも亦黜けらるゝなり、「黃鳥時兼白鳥飛」とは忠邪朝廷に混亂せるを謂ふなりと。此等の說、一見太だ理あるに似たり、故に俗耳に入り易し、然れども詩の興象の遠なる趣味の深なる、斷として此の如く淺顯實露のものにあらず、詩を解する者は只〻その興趣と作者の性情及び遭際を不言の中に融會して之を領すべきのみ、若し一たび言筌に落つれば則ち是れ一箇の村學究。

九日藍田崔氏莊

老去悲秋强自寬。興來今日盡君歡。
差將短髮還吹帽。笑倩旁人爲正冠。
藍水遠從千澗落。玉山高並兩峰寒。
明年此會知誰健。醉把茱萸子細看。

通篇本と是れ老去悲秋の意。而して句は則ち逸態橫出し、豪情馳騁す、適〻以てその悲を反形するに過ぎず、所謂强ひて自ら寬解を爲すものなり。藍し崔氏の莊に宴す、主人に對して未だ甚だ敗興の語を爲すに宜しからず、故に興來盡歡を以て致謝慇懃の意を言ふ、用意尤も周匝にして、その實滿肚の牢愁、此を以て相掩ふ能はざるなり。領聯は流水對を以て孟嘉が九日落帽の事を活用す、而して又步步去の悲と興來の歡を緊抱す、文筆化境に臻れり、參軍の落帽は、本と是れ風流の逸事、我れ翻つて之を羞づるは短髮の容易に露はれんことを怕るればなり、短髮の何が故なるを極言すれば、之を怕るゝ所以從つて解すべし、是れ老去の悲。已に之を怕る、勢ひ冠を正してその落つるを防がざるを得ず、而かも自ら之を爲さずして笑うて傍人を倩ふ、笑倩の何が故なるを極言すれば、自寬の意亦從つて解すべし、是れ興來の歡。

五六は藍田莊の壯觀を寫す、音節劉曉にして、格振ひ氣張る、屹然撐拄して、衆流を截斷するの勢あり、而かもその裏面には亦自ら山水は恙なきも人事は知り難きの興象ありて、筆先の神、飛んで第七句の上に注ぐ。故に眼に壯景を觀て興來り禁ぜざるもこの中に在り、心に遲暮を傷んで低回限りなきも亦この中に在り、「明年此會知誰健。」此れ後面の一層を透說し、仍ほ首句に應ず、此に至つて老去の悲、覺えず語に形はる、故に醉うて茱萸を把るは興來の歡に屬すと雖も、子細に看て以て默然として神傷す、到底强ひて自ら寬解する

に過ぎざるのみ。茱萸は九日の佩ぶ所、亦以て之を酒に蘸して飲む、故に沈歸愚は之を解して、酒を把つて藍水・玉山を看て遠かに去るに忍びざるを言ふ、若し茱萸を看ると云はゞ何の意味かあらんと云へり、此れ又一説に屬す、然れども此の詩は必ず我が前説の如くに解し去りて始めて「强自寬」の妙を見る、若し只醉うて山水を看ると云はゞ、是れ果して何の意味あらんや、故に從はず。

劉禹錫以爲らく、詩中茱萸の字を用ふるもの凡そ三人、杜子美は云ふ「醉把茱萸子細看」、王右丞は云ふ「遍插茱萸少一人。」(九月九日憶山東兄弟)、朱倣は云ふ「學他年少插茱萸」(九日興福寺澄期亭江上山會有故不到作)、三君の用ふる所、子美を優と爲すと。余按ずるに右丞以下の詩皆茱萸を挿むと云ふ、曾て酒名と爲して用ふるものなし、此れ亦以て沈歸愚が非を證すべきなり。

陳后山(師道)は云ふ、孟嘉が落帽は、前世以て勝絶と爲す、子美が九日の詩に云はく「羞將短髮還吹帽。笑倩旁人爲正冠。」と、その文雅曠達なる昔人に減ぜず、故に謂ふ、詩は力學の致すべきに非ず、正に胸中の度世を須つのみと(後山居士詩話)この一聯固より陳が奬稱に愧ぢず、然れども帽・冠、本と同一物にして、一事を以て拆して一聯と爲す、勢ひ此の如くならざるを得ずと雖も、稍〻重犯に涉るの嫌なからず、頗唐の庸手若し口を此に藉かば、正に解駁すべき無きに苦しむ、語病に非ずとは云ふべからざるに似たり、按ずるに東坡が南柯子の詞に「破帽多情却戀頭」の句あり、此れ亦反用を以て奇特を見る、その語意寔に子美がこの一聯に本づくなり。楊誠齋曾てその友林謙之と共に唐律を論ず、曰はく、杜の九日の詩、「老去悲秋强自寬。興來今日盡君歡。」は特に句に入つて便ち字字屬對せるのみならず、又第一句は頃刻にして變化し、纔かに悲秋を說いて忽ち又自寬せり、自を以て君に對す、自なる者は我れ也、「羞將短髮還吹帽。笑倩旁人爲正冠。」は一事を將

て翻騰して一聯と爲す、又、孟嘉は落帽を以て風流なりとし、少陵は落さざるを以て風流なりとす、古人の公案を翻盡して最も妙法たり、「藍水遠從千澗落。玉山高並兩峰寒。」詩人は此に至つて筆力多く衰ふ、今少陵は方に且つ雄傑挺拔にして一篇の精神を喚起す、筆力の山を拔くに非ざるよりは、此に至らず、「明年此會知誰健。醉把茱萸子細看。」末聯の意味尤も深長、乃ち善なる者なり、と。又范景文はその對床夜語に於て謂ふ、高適が九日の詩、「縱使登高祇斷腸。不如獨坐空搔首。」老杜の「羞將短髮還吹帽。笑倩旁人爲正冠。」みなその事を反するなり。杜が結句「明年此會知皆健。醉把茱萸子細看。」は劉希夷が「今年花落顏色改。明年花開復誰在。」の意と同じ、氣長く句雅なるは俱に杜に及ばず、戴叔倫が對月に云ふ、「明年此夕游何處。縱有清光知對誰。」その胎を脫せんと欲して能はざるは蓋し才力逮ばざるなり、東坡その意を用ひて中秋の詩を作る、云はく、「此生此夜不長好。明月明年何處看。」遂に絶句を成したりと。凡そ此等の諸論、互對參核せば、大いに斯道に益あり、故に之を詳載す。

野望

西山白雪三城戍。
南浦清江萬里橋。
海內風塵諸弟隔。
天涯涕淚一身遙。

惟將遲暮供多病。
跨馬出郊時極目。
未有涓涘答聖朝。
不堪人事日蕭條。

杜の詩中、野望を以て題とするもの一にして足らず、みな側身天地、觸目驚心の語、その原題の意は、樂府隴頭水歌の「隴頭流水。流離四下。念吾行役。飄然曠野。」の語に根するものゝ如し。諸集選本、亦みな野望に作る、坊刻本獨り望野と爲せるは非なり、子美已に肅宗の斥逐を蒙り、出でて華州の司功參軍たり、幾もなくして關輔の饑饉に逢ひ、官賤にして自給する能はず、輙ち官を棄てゝ西し、秦州に客たり、薪を負うて錢を得、橡を拾うて食とす、その流落貧困想ふべし。次いで蜀に入り成都に至り、浣花溪上に廬を結び、嚴武に依りて稍く安んず、以下の諸作はみな蜀中の詩なり、是より先き玄宗の京に還るや、劍南の地を分つて兩節度と爲し、戍を西山の三城に列す。蓋し地は吐蕃に界し、蜀邊の要害たるを以てなり、是に至つて百姓調度に罷れ頗る困頓す、西川の節度使高適上疏して之を論ずるも納れられず、事は唐書に見ゆ。故に朱鶴齡は謂ふ、この詩當に此れが爲に作るべし、故に人事蕭條の歎ありと。今按ずるにこの詩は野望の時の見る所のものを敍して、而して國患家難、兩兩に繫心す、固より獨り高適が爲に作るものに非ず、然れども適は子美が密友にして、代宗が廣德元年に至り、吐蕃の兵屢〻蜀邊を侵擾す、適、兵を練りて之に臨むも終に功なく、松・維・保の三城皆敵中に陷るや、子美警急の詩を作つて云はく、「才名舊楚將。妙略擁兵機。玉壘雖傳檄。松州會解圍。」と。是れ適に期するに恢復の功を

以てす、而して又西山の詩に云ふ、「辛苦三城戍。長防萬里秋。煙塵侵火井。雨雪閉松州。風動將軍幕。天寒使者裘。漫山賊營壘。廻首得無憂」と、慨をその失陷に致すもの特に一再のみならず、然らば則ちこの篇は專ら適が爲にするに非ざるも、亦適が事は正にその感懷中の一主因たるを見るべきなり。

「西山白雪三城戍」、是れ憂國の端なり、西山は蜀の成都府西に在りて、一に雪嶺と名づく、松・維・保の三城之が要害たり、正に吐蕃の窺ふ所と爲る、時艱の嵩目すべきもの首として此に在り、故に野望中先づ懷に耿耿たるものを擧げて首句に置く、「南浦清江萬里橋」、是れ思家の引なり、萬里橋は蜀郡大城の南門に在り、橋名の萬里たるに因つて、覺えず自己が萬里天涯飄零の孤客たるに觸動し、悲しみ中より來るものあるなり、三四は次句を頂して一身上に就き家を思ふの切なるを極言す、然れども骨肉の分離は、全く海內風塵のためなりと言へば、家を思ふの中又國を憂ふるの念を離れず、五六は首句を頂して、大勢上に於て、國を憂ふるの忱を表出す、然れども涓埃を國に報ずる能はざるは遲暮多病のためなりと云へば、仍ほ一身上を離れずしてその家を思ふの心亦箇中に在るなり、七句は野望の本題を點清す、この句ありて始めて起の西山南浦は、出郊の時の極目中の物なるを解釋し得べきなり、八句は全篇を總收す、國步の艱難、家屬の分離、みな是れ所謂人事蕭條たるもの、是を大開大闔の筆とす、乾隆乃ち覆瓿高聳、太虛を鑿して萬竅を噭するが若しと云ふを以て之を評し、光景に流連するもの、何ぞ此を語るに足らんと云ふは精當なり、唐仲言は云はく、子美功業に灰心せるも、但、この人事の蕭條たるを覩て、情堪へ難きものあり、蒼生に意なき能はざるなりと、此れ又善く所謂意外の意を得たるに庶幾し。沈德潛は上半四句を以て思家とし、下半四句を以て憂國とす、

然れどもこの詩は實に思家・憂國を錯綜して之を出し、正に往復低回の意緒を見る、斷として此の如く分截して看るに宜しからざるなり。

王伯厚が困學紀聞（八卷十）にこの詩首句、三城戍を以て三奇戍に作り、而して云はく、唐の地理志を按ずるに彭州導江縣に三奇戍あり、又、韋皐傳に大將陳泊等をして三奇を出でしむ、西南備邊錄に所謂三奇戍なり、一本に三年に作り、趙氏の本に三城に作る、當に舊本の三奇に從ふを是とすべしと。然れどもこの種の疑議を拆するには、杜詩を以て杜詩を證するより正確なるは莫し、上文錄する所の西山の五律に據れば、その三城戍たるは復た疑を容るべき所なし、故に何義門・錢牧齋みな伯厚を以て穿鑿の說となし、此等は新奇の創見を好むべからざる旨を言へり。伯厚がこの書考ふる所率ね切實にして據るべし、故に學者の枕祕と稱す、然れども、猶ほ此等の謬あり、信なるかな、書を讀むには燃犀の眼識を有せざるべからざるなり。

登樓

花近高樓傷客心。　萬方多難此登臨。
錦江春色來天地。　玉壘浮雲變古今。
北極朝廷終不改。　西山寇盜莫相侵。
可憐後主還祠廟。　日暮聊爲梁甫吟。

古來この詩を評するもの、曰はく氣象雄偉にして、宇宙を籠蓋す、是れ杜詩の最上なるもの、曰はく雄渾天成にして、一切を籠罩す、曰はく聲宏勢潤、自然の傑作なり、曰はく律法甚だ細にして體裁極めて厚し、獨り雄渾高潤の象を以て千古を陵轢するのみに非ずと、その見る所、同あり、不同ありと雖も、群言を參酌してこの詩乃ち如何の鉅篇たるを知るべきなり。杜のこれを作るは、寔に代宗の廣德二年春初に在り、その前年十月吐蕃の兵長安に逼り終に京師を陷る、代宗難を避けて陝西に幸す、郭子儀が恢復の師、功を奏したるを以て、幾もなくして乘輿の反正を得たりといへども、この時吐蕃の勢頗る猖獗を極め、一方には又、蜀邊を侵擾して彼の松・維・保三城の戍を陷る、杜已に蜀地の僻陬に在り、翌年の春に至つて始めてこの信を聞くことを得たり、會〻嚴武、高適に代つて復た西川の節度を領す、故に杜、成都に歸つて之に依り樓に登つてこの作あり、亂離の正に棘なるに當つて、世に諸葛その人を出さんことを望む、身は蜀地に在りと雖も、心は未だ嘗て朝廷を忘れず、此等の抱負、豈に復た風雲月露の才の夢想する所ならん耶。

花は高樓に近し、是れ春は眼前に滿つ、當に怡心悅目を爲すべきの時、而して反つて我が心を傷ましむるものは何ぞや。蓋し萬方多難の日に於て、久しく此に客居し、獨り登臨せるを以てのみ、起七字全篇を函蓋し、次句に於て之を申說す、下句の上四字（萬方多難）を以て上句の下三字（傷客心）を醒亮し、上句の上四字（花近高樓）を以て下句の下三字（臨此登）を提挈す、是れ倒裝句法の神に入るもの、故に沈德潛は若し一倒轉せば近人の詩と何ぞ異ならんと云へり。「錦江春色來天地。」是れ「花近高樓」を緊貼して出で、「玉壘浮雲變古今。」是れ「傷客心」を遙接して來る、みな是れ「萬方多難」に當つて「登臨」せる眼中の景なり、而して春色は天地に來る、風景は曾て殊ならざるも、浮雲は古今に變ず、成敗は實に定まりなし、那ぞ、感傷せざるを得ん。この種

の感慮、亦是れ常情の有る所、因つて後聯に於て更に一副の大議論を着し、從つて滿腔の熱誠を傾注す、故に眼内を論ずれば、三四は寔にして五六は虛、心事を論ずれば三四は影にして五六は形なり、此れ所謂律法甚だ細なるもの、善讀のものはその大體の立意を領味すると共に亦斷じてその布置針線の在る所を尋究せざるべからざるなり、玉壘は山の名、成都府灌縣の西北二十九里に在り、只登臨の時目に觸るゝ所のものに就いて起興し、而して眺望愈〻遠くして心愈〻悲なるの意あり、以て後聯の京師を逼出す、此れ又自然の線索なり。

吐蕃は一たび京師を陷れ、廣武郡王承宏を立てゝ帝位に登さんとしたりしも、轉瞬ならずして郭公の敗る所と爲り、長安收復して再び天日を見る、蓋し華夏の帝統は元と常尊あり、則ち蠻夷の豈に輕しく之を犯すことを得るものならんや、故に「北極朝廷終不改」と云ふ。若輩の頑嚚無知なる、正僞久暫の間に於て根源を勘透する能はず、猶ほ懲りずして頻に我が西山に寇す、此れ亦多くその徒爲なるを見るのみ。故に「西山寇盜莫相侵」と云ふ。此れ正言以て之を諭とす、申涵光が所謂一篇の王命論に抵つべきものにして、その中亦實に憂心耿耿として自ら已む能はざるものあり。何となれば朝廷は固より變動すべきの理なしと雖も、仍ほこの萬方多難を致せる所以の由を推究すれば、勢ひ之を君德の不明と輔佐のその人を得ざるとに歸着せしめざるべからざればなり、是を以て後主祠廟の句を接寫し、正統の犯すべからざるを實例に徵して速かに匡復の人を得んことを望む、所謂隱衷極めて厚きものなり、命意の委婉曲折せる大約此の如し、而して又細かに字句の脈絡を疏すれば、朝廷の改まらざるは春色の異なきに映帶し、寇盜の相侵するは、浮雲の變じ易きに慰貼す、故にこの前後聯は互に虛實形影を相爲すと謂ふなり。

蜀の後主は亡國可憐の君なり、然れども猶ほ祠廟ありて百世その祀を絶たず、他なし、渠は是れ漢室の正統なるを以てなり、夫れ亡國の君すら猶ほ正統なるが故に、廟食を廢せずとせば、我が堂堂たる唐家天子の尊を以て又帝統の正に居る、その幺麽の小醜か妄に干すことを得るものにあらざるや明けし。この時に當つて若し社稷の臣の諸葛孔明その人の如きものを得て、君臣一體以てこの多難を濟せば、寇盜立ろに泯滅して唐室中興の盛を觀んこと又昭昭たり、故に日暮に梁甫吟を爲して以て速かに草廬を出づるの人あらんことを切望す、蓋し梁甫吟は諸葛孔明が隴畝に在る時常に愛誦したる所のものなればなり。

結二句此の如くに解し去れば原と甚だ釋し難き處あるを見ず、然るに古來の注家、頻りに異同の辨を費し、甲論乙駁紛紛として定說なし、寔にその何が故なるを喻るに苦しむなり。邵國賢は曰はく、後主の廟に祠せらるゝは蓋し孔明が匡復の心あるの故に由る、因つて當時更に孔明の才なきを惜しみ、公日暮に于て梁父吟を爲して以て孔明を哀しむのみと。然れども詩意は正に孔明なきがためにその之あらんことを望む、豈に孔明を哀しむものならんや。唐仲言は曰はく、公、後主の祠あるを見て、而して云ふ、此れ亡國の君なり、宜しく廟に在るべからずと。是に於て梁甫吟を作して以て世道を傷むなりと。知らずその廟に在るは、正統の君なるを以ての故に之を言ふ、亡國の君を祀るを譏るの意果して何くにか在るや、憎も亦甚だしと謂ふべし。錢受之は曰はく、「可憐後主還祠廟。」とは、それ代宗が姦臣程元振・魚朝恩等を任用して蒙塵の禍を致せるを以て、諷を蜀の後主が黃皓を用ひて亡びたるに致せる乎、その興寄の微婉なる此の如しと、此れ唯〻後主の二字に就いて强ひて當時の事實に附會す、若し此の如くに顯斥したるものとせば詩人忠厚の旨は全く淪亡したるものと云はざるべからず、且つ後主を以て代宗に擬せば、その「還祠廟」は知らず將に何の解を爲さん

とするや。浦起龍の如きは已に錢箋の悖理を駁す、而して梁甫の句に於ては則ち云はく、客心傷むと雖も、而かもその浩落を改めざるなりと。又云はく兼ねて嚴武に對して言ふ、諸葛の勳名を以て之に望むなりと。安んぞ知らん梁甫の吟を爲すものは正に客心傷悲の甚だしきを以て止むことを得ずして自ら排遣するものなるを。又安んぞ知らん、この句は是れ杜自ら世に用ひられんことを欲し、その三顧の人あらんことを反言せるものなるを。詩意は原來指斥する所なし、然れども稷契を以て自ら期し、君を堯舜に致さんことを明言するの少陵にして、その裏面に諸葛の濟時を以て暗に自家の抱負を託するは、亦有り得べからざるの事に非ず、又、或は當時郭子儀が收京の功あるを以て、暗に望を郭に屬するものと謂はゞ、此れ亦通ずべし、乃ち然らずして緣なく故なく突然一嚴武に向つて偉大の功名を相許さんとす、豈にこの理あらんや。僧大典が解頤に云はく、先主にして後主を子とす、二世にして亡ぶ、後主にして先主を父とす、百世にして祀らる。先主と雖も孔明微つせば未だ必ずしも興らず、後主と雖も、孔明あらば未だ必ずしも亡びず、孔明に懷歸する所以にしてみな當時に感激することあるなりと、此れ專ら重きを孔明に歸す、故に後主祠廟の本義に於て未だ甚だ瑩醒ならずと雖も、聵聵者流に視れば別に會心を具す、故に特に之を表出す。

錢處山は又謂ふ、「西山寇盜」は吐蕃を指して之を言ふ、劍南の西山を謂ふにあらずと、然れどもこの時吐蕃正に蜀邊に寇す、故に吐蕃を謂つて「西山寇盜」と爲すのみ、是れ劍南の西山に非ずして抑〻又何處の西山ぞや。浦二田も亦以爲らく、蜀邊に黏定する勿れ、恐らくは「北極朝廷」と拍合し上らずと。此等みな上句に拘泥して以てその詞意を害し、終にこの作は是れ杜が蜀中の作たることを忘却す、眞に噴飯するに足れり。

秋興四首

玉露凋傷楓樹林。巫山巫峽氣蕭森。
江間波浪兼天湧。塞上風雲接地陰。
叢菊兩開他日淚。孤舟一繫故園心。
寒衣處處催刀尺。白帝城高急暮砧。

善いかな乾隆の秋興八首を批するや、近體は七律を以て難と爲す、唐代の名家、人ごとに數首ならず、その量固より止まる所あるなり、獨り杜甫に至つては天授神詣、窮微に造絶し、卓然として千古の冠たり、この八首の如きは源を二雅に根し、迹を騷辨に繼ぐ、思極めて深うして晦からず、情極めて哀にして傷らず、九曲の回腸、三疊の怨調、之を諷して以て心靈を感盪するに足り、直ちに九天の雲をして下垂し、四海の水を逆ましてみな立たしむ、その自ら云ふ所、以て喩ふるに足る、況や、拳拳の忠愛至情に發し、語言・文字の表に溢るゝ者あるをやと。故に黄生は以爲らく、杜公の七律は當に秋興を以て裘領と爲すべし、乃ち公が一生心神の結聚して作る所なり、八首の中決して軒輊を加ふべからずと。沈歸愚も亦謂ふ、鄉を懷ひ闕を戀ひ、古を弔し今を傷む、杜老の生平、此に具見す、その才氣の大、筆力の高は天風海濤、金鐘大鏞も能くその到る

所を擬すること莫しと。夫れ然り、故にその篇意次第鈎鎖開闔、分つて八首と爲すと雖も、寔は是れ一篇の大文字たり、一首を增減すべからず、半句を移易すべからず、何ぞやこの選纔かにその四を錄し、肆に劃裂を爲し、全體の脈理を擧げて支離晦昧に歸し、七穿八透、靈動自在の活文章をして化して死句と爲り了らしむ、天下古今の妄男子、洵に未だ于鱗より甚だしきものはあらざるなり。玆に予が見る所の諸箋に就き、精覈允當なるものを擇んで、斷ずるに吾が臆を以てし、每首の下、于鱗が遺棄する所のものを附錄として、略ぼその命意引脈、布局謀篇の大凡を知らしむ、その魄力氣骨の如何に高妙なるに至つては、是れ自ら讀者が神識を要す、謝陋の筆舌、實に以てその萬一を庶幾する能はざるを知ればなり。

潘安仁が秋興賦の序に云はく、時に於て秋なり、遂に以て篇に名づくと、命題の意亦實に此に外ならず。少陵時に蜀の夔州に流寓し、舟を艤して以て峽を出でんとす、秋物の蕭條を覩て、身世の寥落を感じ、因つて以て家國の蒼茫を思ふ、之を總ぶるに京華を望むを以て八詩の大主眼とす、故にその巫峽と曰ひ、夔府と曰ひ、瞿唐と曰ひ、江樓・滄江・關塞と曰ふはみな身の處るところなり、故國・故園と曰ひ、京華・長安・蓬萊・曲江・昆明・紫閣と曰ふはみな心の思ふ所なり、身の處る所の正に秋なるを以て借りて心の思ふ所を興す、故に秋興とは題したり。先づこの意を領して之を求めば、八首の線索、思ひ既に半に過ぎん。浦二田謂はく秋は夔に寓するの値ふ所たり、興は京を望むより發嘅すと。その言甚だ八股時文を解釋するに類せりと雖も大旨に於ては亦碍する所なきなり、故に各章の下、時に又之を參酌す。

玉露凋傷の一章は秋興の發端なり、楚辭に曰はく「湛湛江水兮上有楓。目極千里兮傷春心。」(招魂)彼れは楓樹の茂盛なるを以て心を傷ましめ、これは楓樹の凋傷せるを以て興を起す、

蓋しその秋たるを拈出するなり。玉露既に零ち、楓林凋落す、山峽の間肅氣蕭森として人に逼る、「氣蕭森」の三字直ちに前聯、浪湧き雲陰る無數愁慘の狀を遞下す、巫山巫峽は夔州の地、この句はその夔州たるを實點するなり、「江間」・「塞上」の二句はその悲壯を狀す、而して江、而して塞、是れ夔州を緊頂するなり、而して浪湧き、而して雲陰る、是れ秋物を緊頂するなり、以上の四句を合して更に之を再釋すれば、則ち是れ夔府を實拈して秋景を明寫するなり、江間の洶湧たるもの則ち上は風雲に接し、塞上の陰森たるもの、則ち下は波浪に連なる、豈に所謂悲壯に非ずや。

「叢菊」・「孤舟」の二句はその凄緊を狀す、而して自己が一身に貼して興を發し、「他日」・「故園」の四字に於て八首を包擧して遺す所なし。他日は猶ほ往日と云ふが如し。杜は代宗の永泰元年の秋に於て、成都を去つて夔州に來り、その翌年の秋に到るまで猶ほ此に留滯す、故に菊花の兩たび開くを見るなり、今や孤舟を艤して發せんと欲し、猶ほ事を以て夔に淹留す、舟はこの地に繫ぐと雖も心は寸時も未だ曾て故園に繫がずんばあらず、邵國賢此れを解して云ふ、始終心は故鄉に在つて、而して身は舟中に繫がる、身を繫ぐは則ち心を繫ぐ所以なりと、極めて詩意を得たり。他日を以て言へば、則ち後面の香爐・抗疏・奕棋・世事・青瑣・珠簾・旌旗・彩筆、みな綱を此に提せざるはなく、故國を以て言へば則ち後面の北斗・五陵・長安・第宅・蓬萊・曲江・昆明・渼陂、亦みな端を此に發せざるはなし、而して「故園心」の三字は隱隱として第四章の「故國平居有所思。」の句に注射し、自ら章法を爲す、更に之を詳言すれば、この二句は則ち興意を虛含して京華を暗提するなり、叢菊兩たび開いて歷歷たる前塵、別淚を他日に儲へ、孤舟一たび繫ぎて悠悠たる去國、歸心を故園に僦す、此れ卽ち所謂悽緊なるものなり。當時杜が秋夜客舍の詩に云ふ、「南菊再逢人

臥病」と。又、その九日の詩に云ふ、「繫舟身萬里」と。並に以てこの兩句の注脚に充つべし。即ち「兩開」・「一繫」を以て牽强を免れずとするものあり、此れ眞に分量を知らざるものゝみ。

第七句は仍ほ秋物を收め、第八句は仍ほ夔州を收む。秋氣既に深うして到處に寒衣の備あり、我れは則ち客子衣なく、蕭然たる羈旅、この白帝城邊日暮の砧聲を聞く、情更に何如ぞや、上の「故園心」の三字を承けて說下す、旅泊經寒の狀、自ら句中に呑吐せらる。白帝城は公孫述の據つて以て帝を稱せしの地、夔州府治の東五里に在り、錢受之は云はく、節を以てすれば則ち抄秋、地を以てすれば則ち高城、時を以てすれば則ち薄暮、刀尺は寒に苦しみ、急砧は別を促す、この二句興會を標擧することほぼ五層あり、所謂嵯峨蕭瑟、眞に言ふべからざるものなりと。此れ眞に詩の神髓を得たり、而してこの句既に巫山巫峽に應じ、白帝城を以て夔州に歸到す、故に單にこの一章に就きて之を言へば則ち是れ上を結ぶ、八詩の大段に就きて之を言へば、是れ下を起すなり。是を以て第二章即ち「夔府孤城」を以て之に次ぐ。

其二

夔府孤城落日斜。　每依南斗望京華。　聽猿實下三聲淚。
奉使虛隨八月槎。　畫省香爐違伏枕。　山樓粉堞隱悲笳。
請看石上藤蘿月。　已映洲前蘆荻花。

夔府の孤城は上の白帝城を承けて來り、南斗京華は上の「故園心」を承けて來る、その京華を望むの本旨此に於て拈出す。身は夔府に羈して、心に京華を戀ふ、望んで見えず、誰か之が爲に黯然たらざるものぞ、孤城碪斷えて、日は盧湄に薄る、萬里の孤臣、首を京國に翹つ、復た八表は黃昏し、絕塞は慘澹たりと雖も、

惟、この望闕の寸心南斗とその芒色を共にする耳、而して「每依」と云ふ、蓋し夕として然らざるは莫し、この句實に八章の綱骨にして以下章を重ね文を疊む、都べてこの外に出でざるなり。猿鳴くこと三聲、聞くもの斷腸す、況や叢菊兩たび開いて猶ほ羈客と爲る、如何でか實に涕洟を下さゞらん、嚴武節度使と爲りて、我れ往いて之に依りしも、事、期に合せずして徒らに虛度を爲す、唯、孤舟一繫の心の徒らに八月の乘槎に似たるのみ、眞に張騫の奉使に隨伴せしにはあらざるなり。奉使の句本と的解なし、仇兆鰲以て嚴武を謂ふとす、即ち張騫の槎を以て嚴武の使節に比するなり、今暫く之に從ふ。

畫省の句は京華を承け、山樓の句は夔府を頂す、伏枕は舟中なり、悲笳は城上なり、畫省の香爐、即ち大明・早朝・紫宸・退朝等の時を指す、その京華に在りて朝に官する、爐煙薰染、何等の得意ぞ、而して今は乃ち此れに違背して、徒らに舟中に伏枕し、惟、城堞悲笳の隱隱たるを聞く、且つ纔かに日斜を覩て、忽ち又月出を見る、又正に是れ斗に依つて、京を望むの候、空しく一日を過却したるも、何日か眞に京華を見ることを得べきを知らざるなり。「蘆蘿」の句は「落日」に應じ、「荻花」の句は「秋」の字に合す、而して石上蘆蘿の月は已に洲前蘆荻の花に映ず、則ちこの洲前の月、安んぞ又西山に沒するの時なきを知らん、晚に由つて夜、夜に由つて曉、是れ自然循環の理、故に第三章は朝景を以て始まる、自己が羈旅に在りと雖も、終に京華に歸るの日あるべきを曲言して自ら慰むる意、亦その中に隱伏せり。

千家山郭靜朝暉。　日日江樓坐翠微。
信宿漁人還泛泛。　清秋燕子故飛飛。
匡衡抗疏功名薄。　劉向傳經心事違。
同學少年多不賤。　五陵衣馬自輕肥。

これその第三章なり、題して二と曰ふは、于鱗前詩を刪却したるを以てなり、以下の諸作之に倣ふ。その筋脈は實に首章よりして一貫して下る、之を括して言へば左の如し。

絶塞の高城、抄秋の薄暮、俄にして落日を看、俄にして南斗を看る、爐煙は燈えて哀猿號し、急杵は斷えて悲笳發す、蘿月蘆花は凄清眼に滿ち、蕭辰遙夜は一時に攢簇す、「請看」の二字「每依南斗」に緊映し、即ち第一首の城高暮砧と呼應す。夜夜此の如く、朝朝も亦然り「日日此の如く、信宿も亦然り。心に南斗・京華の思を抱きて、身は漁人、燕子と侶を爲す、遠は則ち匡衡・劉向にだも如かず、近くは即ち同學・輕肥の爲に相笑はる。前二章、故園・京華を提出すと雖も、尙ほ未だその所以を明言せず、是に至りて始めて事の顚と違へる一段の衷曲を露出し來る、是れ古人の所謂文の心にして、正に秋興を以て篇に名づくるの大主意たるなり。

石上の月、已にして藤蘿を照らし、已にして蘆荻に映じ、而して沒し、而して日出づ、是に於て千家の山郭朝暉自ら冷靜なり、「千家山郭」は是れ夔府の孤城、「靜朝暉」はその中仍ほ秋意を含めり、曉光は清朗にして我れ獨り江樓山翠の中に坐す、日日にして此の如し、則ち我れ竟に歸る期無き歟。漁人・燕子は即ちその日日の見る所、借りて以て自ら傷み、亦以て自ら況す、而かも漁人の荻葦に延緣し、家を携へて嘯歌するは、羈栖の客の殆ど如かざる所、冠するに「信宿」の二字を以てすれば、亦この漁人の昨夜州前の蘆花明月中に徜徉自適したりしものなるを見る、獨り自ら況するのみならず、亦之を羨むなり、楚辭の九辨に云はく、「燕翩翩其辭歸兮。」と。蓋し燕の秋寒に遇ひ、回翔して畏懼し、終に以て辭歸するに至るを言ふ。故に目するに清秋を以てし、便を趁うて「秋」の字を實點す。又、「燕燕于飛」は詩人取つて送別に喩ふ。已は則ち舟を繫ぎ枕に伏して、燕乃ち下上し、辭歸して促別し、數〻余が心を攪す、獨り自ら傷むのみならず、亦之を惱するなり。故に「還泛泛」・「故飛飛」と云ふ、その虛字中に於て神味を領略すべし。

前聯已に己の飄泊を歎ず、是を以て後聯更に進んで己の不遇を慨す。八章の大主意と云ふ是れなり。漢、匡衡は元帝即位の初め天變の異に依りて上疏して政治の得失を陳す、帝大いに悅び光祿太夫に擢んで太子少傅に遷し、累進して丞相に擧げらる。少陵、房琯の事に由つて抗疏すること固より匡衡に減ぜず、而して拾遺の卑官、一斥して復せず、終に此れが爲に京華を去る、故に「功名薄」と曰ふ。劉向の如きは數〻封事を奏じて用ひられざるも、仍ほ講經を以て顯榮に居り、五經を石渠閣に典校す。子美は則ち白頭、幕府、嚴武に寄食し、猶ほ意の如くならずして天南に淹滯す、寧ろ深く平生に愧ぢざらんや、故に「心事違」と曰ふなり。特に古人に如かざるのみならず、即ち同學の少年今はみな要路に居り、輕衣肥馬、五陵の間に驅逐す。我れ獨り易爲れぞ江城に偃蹇として、日日この寂寞を守れる乎。錢受之は曰はく、同谷の七歌に「長安卿

相多少年」の語見ゆ、所謂同學なるものは蓋し長安の卿相なり、曰はく少年、曰はく輕肥、公の當時の卿相を目するもの此の如しと。又曰はく、抗疏の功名既に薄くして、傳經の心事又違ふ、旋つて同學の少年、五陵の衣馬を視れば、亦漁人・燕子の儔侶のみ。故に「自輕肥」を以て之を薄し、一「自」字を下して「還泛泛」・「故飛飛」と翻倒して相應ず。「杜陵有布衣。老大心轉拙。」(自京赴奉先詠懷)長安の卿相に於て何か有らんやと。是れ側面よりその底裏一層の意を剔抉して出す。浦二田の、功名はそれ遂に已み、心事はそれ副ひ難し、五陵の同學、長へに此に謝絶せんかと云ふもの、亦寔にこの義を用ひたり。

前三章は夔州に詳かにして長安に略し、以下の五章は長安に詳かにして夔州に略す、筆に詳略あるは是れ文章自然の秩序のみ、注家の多く前三は夔州を言ひ、後五は長安を言ふと說くに到つては、大いに作者の旨を失す。八章通身の結構の法に於て全く未だ窺見せざるものと云ふべし。又、夔府の暮景・朝景を以て第二・第三を分截して說くものあり、此れ又、是れ隔壁の話、俱に論列するの限に在らず、要するに「每依北斗望京華」一句是れ吃緊の關節、この章末既に自己が不遇上より想うて五陵の同學に至る、是に於て次章手を接して長安を寫したり、沈歸愚の譏つて纖と爲すは大いに非なり。

其四

聞道長安似奕棋。百年世事不勝悲。王侯第宅皆新主。
文武衣冠異昔時。直北關山金鼓振。征西車馬羽書遲。
魚龍寂寞秋江冷。故國平居有所思。

此れ上の「望京華」を承けて之を正寫し、又、後の四首のために總領を爲す、寔に前後の大關鍵たり。「聞道」の二字、第六句までを提冒し、みな朝廷變遷・邊境侵逼の事を言ふ、「魚龍」の一句、その地の夔とその時の秋たるを帶定し、仍ほ秋興の題面を脫せず、「故國」の句は起首の長安に繳到して、前詩の「望京華」に應じ、併せて後面諸首の分寫を起す、此れ則ち通身の鎖鑰たる所以なり。

肅宗京師を收復して後、中人に委任して中外多故、子美僻遠の鄉に在りと雖も、敢へて君國の憂を憩置せず、故に朝政の昏亂を擧げ、兼ねて又北は回紇を憂ひ西は吐蕃を患ふ、故國平居の往事を追惟すれば、洵に今昔の感に勝へざるものあり。「長安若奕棋」とは謀國の者、譬へば奕棋の定算なきが如し、故に禍を百年の後に貽して、その悲に勝へず、王侯の邸宅みなその主を易ふ、則ち寵下の厮養も倖進して新貴の位に居るなり、文武その人に匪ずして冠裳全く倒置す、正に「洗兵馬」に所謂「攀龍附鳳勢莫當。天下盡化爲侯王。」と同感にして、百年の世事なるもの寔に此の如し、前首の衣馬輕肥者流は亦知るべきのみ。群小並び進んで新貴愈〻繁、朝廷虛にして敵國驕る、故に北には回紇の寇あり、西には吐蕃の敵あり、金鼓聲震うて捷書未だ至らず、遂に伊の戚を貽す、抑〻誰の咎ぞや、吾れ正に秋江に飄泊して魚龍と俱に蟄し、朝局の日に非なるを傷み、軍旅の益〻急なるに驚く、顧みて故國平居の時、長安全盛の日を思へば、豈に爽然として自失せざらんや、陳子端曰はく、末句は猶ほ歷歷たる開元の事、分明に目前に在りと云ふが如しと。この解尤も窾要に中る、所謂「有所思」とは卽ち後面四首に分寫する所のもの是れなり、唐仲言は以爲らく、故國平居の時より嘗て竊かに思ふ所あり、蓋し匡時に志あつて、時に用ひられざるを歎ずるなりと、此れ唯〻この一句に就き、文を深うして之を解するのみ。錢虞山に至つては、白帝城高し、目するに故國を以てす、兼天の波浪、彼の魚龍を歎ず、平居して思ふ所ありとは、殆ど滄江の遺老を以て袖を奮ひ指を屈し

て、百年奕棋の局を覆定せんと欲す、徒らに晩晩を悲傷して、昔人が帝城に入らんことを得んと願ふ而已に非ずと謂ふ。その意を原ぬれば「故國平居」を以て少陵が夔に在りて自ら言ふものとなせるが如し、顧ふに錢の箋注を作る、その晩年に在り、彼れ明の遺老を以て、大いに清初に爲すあらんと欲せしも、蹉跎して終に故山に歸臥せざるを得ざるに至る、悒怏の餘、故らにこの奇異の語を爲し、以て自らその憤懣を泄すのみ、固より詩の本義に非ざるなり。

この詩已に是れ後首長安の總領、而してその寫す所は肅宗以後の長安なり、「故國」の句を以て一筋斗を翻す、故に第五章は開寶の長安に溯る、宜しくその線索を牢記すべきなり。

三

蓬萊宮闕對南山。　承露金莖霄漢間。
西望瑤池降王母。　東來紫氣滿函關。
雲移雉尾開宮扇。　日繞龍鱗識聖顏。
一臥滄江驚歲晚。　幾回青瑣點朝班。

これその第五章、全盛の日の長安を思ふなり、その宮闕の崇麗、朝省の尊嚴を寫すは、主とする所帝居に

在り、然れどもこれに專なるときは、則ち何を以てか秋興の詩と爲さん、故に一臥滄江の句、題位を點定し因つて以て自己が拾遺遷官の事に及び感傷の意を見はしたり、その章法を以てすれば、ほぼ「聞道長安」の篇と同じ。

蓬萊は卽ち大明宮、已に前に歷見す、唐會要(卷三十、大明宮)に云はく、この宮北は高原に據り、南は終南山を望む、諸を掌に指すが如しと、殿基平地より高きこと四丈にして、而して又、承露の金掌、その側に聳起し、高く霄漢の間に冲づ、帝居の壯麗、顯顯然として心目の間に在るが如きなり。宮闕の形勝此の如し、是に於て三四は開元天寶間の盛事に就き、特にその壯觀を極めたるものを擧げて以てその豹斑を見はす、「西望瑤池降王母。」は貴妃册立の典を記するなり。按ずるに開元二十八年十月、玄宗溫泉宮に幸し、高力士をして楊氏の女を壽邸に取り、度して女道士と爲らしめ、太眞と號し、內太眞宮に住せしむ。天寶四載七月に至りて、之を册して貴妃と爲し、進見の日雲裳羽衣の曲を奏ず。瑤池を以て溫泉宮に喩へ、王母を以て楊妃に喩ふるは、是れ唐賢が詩中の恒例にして、少陵の詩「惜哉瑤池飲」(同諸公登慈恩寺塔)「落日留王母」(曲江)亦みな楊妃を謂ふに非ざるは無し。「東來紫氣滿函關」は、玄元配祀の典を記するなり、開元の末天寶の初、田同秀なるもの、老子の永昌街に降るを見る、云はく靈寶の符あり函谷關の尹喜が故宅の傍に有りと。玄宗因つて使を發して之を求めしめ、玄元皇帝を新廟に享り、昇仙宮を作り、更に大聖祖の尊號を加ふ、唐室の老子を重んずる此の如し、仍ほ詳かに、排律、「冬日玄元廟」の詩下に具したり、俗注多く解釋して譏刺の意なりと爲す。然れどもこの詩は只極めて宮闕氣象の壯と開寶承平の盛とを追敍す、而してその中自ら當時の荒淫失政卽ち今日禍亂の源たるを隱見するが如きは、是れ詩の靈妙にして鬼神に通ずるの處、斷じて此れを以て譏刺

に意ありと云ふことを得ざるなり、故に唐仲言等が明皇色に溺れ仙に惑うて以て亂を階するを追刺せりとの說は、固より取るに足らず、乃ちその追刺の意なきを顯はさんがために、「瑤池」・「紫氣」等の句を併せて楊妃・玄元の事を指すものにあらずと爲し、群仙の上帝に環拱するを以て帝居のために色彩を設けたるに過ぎずと爲す、沈歸愚・浦二田等が一說あり、此れ亦甚だ謂なきに屬す。言ふ者罪なく聞く者戒むるに足るとは是れ詩人の旨、然れども世この語を誤るもの甚だ多し、予を以て之を觀れば言ふ者未だ必ず之を知らず、故に罪なしと云ふ、聞く者はその言ふところに由つて自ら鑒む、故に戒むるに足ると云ふなり、若し言ふ者始めよりその意あらば、明かに譏刺を事とするなり、何ぞ罪なきを得ん乎、聞く者をして戒むる所あらしめんがために、却つて言者をして罪あるを致さしむ、是れ仲言等が陋、言者の罪なきを表せんがために、轉た聞く者をして因つて以て戒むる所なからしむ、是れ歸愚等が謬、兩つの者、俱に之を失せり、故に今はその中を折して偏倚の解を下さず、少陵を九原に起すも、必ず此れを以て知言とせんは、余の確信して疑はざる所なり。

傳に據れば、少陵、天寶の末に於て三大禮の賦を獻ず、玄宗之を奇とし、召して文章を試む、故にその詩に「憶獻三賦蓬萊宮。」(絕句)、又「往時文彩動人主。」(眞相疑行)の語あり、「雲移」の二句はこの時の事を指すなり、雉尾雲移つて宮扇忽ち開く、その朝儀の盛想ふべし、身は布衣を以てその前に召試し、遙かに龍鱗の聖顏を瑞日繚繞の間に認識す、當時、身は恍として凌雲の想ありき、今は則ち滄江に一臥して歲晚に驚く、肅宗の朝、曾て一たび身を青瑣の班に點せしと雖も、時日たる幾もなくして、終に流轉飄泊の人と爲る、それ能く今昔に感嘆する毋らん乎、この意之を一「驚」字に含蓄して敢へて吐露せ

ず、蓋し聖子神孫、鐘鼎悉なし、北極の朝廷、竟に曾て改めず、詩已に宮闕より思を發す、自ら今昔盛衰等の語を參入するを得ざればなり、滄江は夔府を指す、歲晚は本と暮年衰老の意たりと雖も、併せて秋意を映帶するなり。

劇談錄に云はく、含元殿(卽ち蓬萊宮)は國初に建つ、龍首岡を造鑿して以て基址と爲す、彤墀銀砌、高さ五十餘丈、左右には棲鳳・翔鸞の二闕を立て、龍尾道は闕前に出づ、殿は五門を去ること二里、元朔の朝會每に禁軍御仗殿庭に宿し、金甲葆戈、雜ふるに綺繡を以てす、文武の纓佩、其れが下に序立し、仰いで玉座を觀れば霄漢に在るが如し、識者以て姬漢より隋に迄るまで未だ此の如きの盛を見ずと、少陵が往事を追懷して、先づその第一指を此に屈する所以なるべし。古今注に據れば、雉尾扇は蓋し殷の高宗の時雉雊の祥ありしに始まり、服章を飾るに多く翟羽を以てす、雉羽を緋めて扇となすは、以て風塵を障翳するなりとあり、儀衞志に、唐の制は人君の擧動に、必ず扇を以てす、故に大駕鹵簿の儀物に、則ち曲直華蓋・六寶齊・蹬大繖・雉尾障扇・雉尾扇・方雉尾扇・花蓋小雉尾扇・朱畫團扇・俾倪の屬ありと云ふ、又玄宗の開元中、蕭嵩の奏に、每月の朔望、皇帝朝を宣政殿に受く、先づ侍衞及び文武四品以下を庭に列せしめ、然る後、帝序西門より步して出でゝ御座に昇り、朝畢つて又、步して東序門に入る、然れども宸儀は肅・穆を主とす、至尊の昇降俯仰は宜しく衆人をして之を見ることを得しむべからず、因つて請ふ羽扇を殿の兩廂上に備へ、出入每に之を以て遮障すべしと、此れより常例となること唐會要に見ゆ。此れ小事と雖も、詩の寔錄たるを徵すべし。その「雲移雉尾」は是れ宮扇の狀、「日繞龍鱗」は是れ聖顏の容、一句中各〻下三字を以て上三字を解釋するが如きは是れ又句法の妙なり。

この詩二聯を以て開寶間の長安に屬し、杜が肅宗の朝に拾遺たりしは惟〻末句に於て之に及ぶとせるは、錢箋の說なり。上聯を以て開寶に屬し、下聯を以て肅宗の朝に屬するものは、浦解の說なり。大明早朝・紫宸宣政退朝等の詩を合參すれば、「雉尾」・「龍鱗」を以て之を肅宗に屬する亦理なきに非ず、然れども細かに詩意の在る所を剖析するときは、既に開元の宮闕より一氣にして連下す、之を三賦を獻ずる時に屬する時に屬すれば、尤も拍合するを覺ゆ、故に純ら錢箋に從ふ。若し唐汝詢が說、我れこの時に於て屢〻試して第せず、滄江に臥して歲已に暮る、帝の末年に及んで始めて一賦を獻ずるを得たるも、我が靑瑣に居つて朝班に點するもの幾もなきなりと云ふが如き、此れ少陵が開寶の朝に於ては曾て靑瑣に居るの事なきを考へず、亦その肅宗の時に於て一たび朝班に點したるを忘る、詩に就いて詩を說く、眼紙背に透るの明なきものなり。

「一臥滄江」の二語、遙に第二首「霜省香爐」に應じ、運意はほぼ上章に同じくして、而してその對語を用ひたるは亦第七章の結「關塞極天惟鳥道。江湖滿地一漁翁。」と相似たり、記淸せよ、滄江は是れ夔、靑瑣は是れ長安。

其六

疊塘峽口曲江頭。　萬里風煙接素秋。　花蕚夾城通御氣。
芙蓉小苑入邊愁。　朱簾繡柱圍黃鵠。　錦纜牙檣起白鷗。
回首可憐歌舞地。　秦中自古帝王州。

疊塘峽口は是れ夔、曲江頭は是れ長安、この兩地一は是れ身の處る所、一は是れ心の思ふ所、その相懸る何ぞ啻〻萬里のみならん、而して之を一句に擧げて以て前章の語尾を緊束し、次句を以て兩地を鉤鎖す、筆力

千鈞、又便を趁うて秋の字を嵌入す、是れ何等絕妙の筋節ぞや。

疊塘峽口の一章は陷沒後の長安を思ふなり、而して又細かに失陷の由を追敍す。疊塘鳥道の區に由つて、曲江禁近の地を指す、兵塵秋氣、萬里連延す、此れ亦首章に所謂「塞上風雲接地陰。」ものにあらずや、唐時の游幸は曲江より盛なるはなし、故にその陷沒を悲しむ、則ち先づ曲江を擧げたり。一說に云ふ、玄宗秦より蜀に幸す、故に疊塘曲江萬里風煙の感ありと、若し單にこの一章のみを以て論ずれば此れも亦通ずべからざるに非ず、然れども八章の脈絡を尋ねてその大體より看るときは、仍ほ杜が夔に在つて京を望むの意として、疊塘曲江、相去る萬里、この秋時に當つて風煙相接す、則ち同一に蕭索たりしと解し去るもの、是なるに近し。

玄宗、友愛に敦く、その隆慶の舊邸を以て興慶宮と爲し、諸王に第を賜うて宮側に環列し、宮西に於て樓を置き、署して花蕚相輝之樓と云ふ、帝時時之に登り、諸王の樂を作すを聞き、必ず召して樓に登り、榻を共にして坐臥す、開元二十年に至り、花蕚樓を廣めて夾城複道を築き、南內より徑ちに曲江の芙蓉苑に達す、天子複道の中を往來す、外人窺ひ知ること能はず、故に「花蕚夾城通御氣」と云ふ。御氣を通ずと云ふは、車駕の經る處、人之を見る能はざるも、仍ほ氣を望んで知るべきものありとの義、この句は玄宗の猶ほ敦倫勤政の時を指すなり、祿山一たび反して漁陽の鼙鼓忽然として地を動かす、玄宗將に蜀に遷幸せんとす、興慶宮の花蕚樓に登り、酒を置きて四顧悽愴す、故に「芙蓉小苑入邊愁」と云ふ、この句は則ち玄宗の樂に耽り憂を召くを指す、卽ち長安失陷の由、之を綜して一聯と爲す、一人の身にして理亂頓に殊なるを謂ふなり。この聯、錢箋に稍〻異說あり、以爲らく、亂後御道崩壞して、宸游跡を絕す、故に「通御氣」と云ふと。此れ上

句を以て亂後に粘定す、全篇の意、失陷後を思ふものたるが故にこの拘泥の見を爲せしに似たり。若し荒涼を寫さば、何ぞ御氣を通ずと謂はん、故に今は王嗣爽が說に從ふ、沈歸愚も亦云ふ、上は治を言ひ、下は亂を言ふなりと、平心に斷じ來れば、多く錢箋の牽强を見るなり。

珠簾繡柱は陸地帝幕の妍華なるを指し、錦纜牙檣は水嬉權禮の炫耀なるを指す、是れ蓋し曲江游幸の時を追敍して、以て盛衰の常なきを見る、所謂痛定つて追思するものなり、故に「可憐歌舞地」を以て之を結び嗟嘆を以て之を束ね、古より然りと敍す、言外に無窮の猛省あるなり。秦中は卽ち長安、長安は天府にして周秦漢隋、歷代の都する所、唐に至つて胡馬長驅し、天子殿を下る、亦傷しからずや。苑中の簾柱、みな織珠刺綉して黃鵠の文を成し、江上の纜檣、錦を編し牙を雕して、白鷗をして驚起せしむ、正に是れ歌舞の地、凡そこの綺麗奢靡、正にその邊愁に入る所以、逸豫を戒めずして都邑風煙九廟灰燼に歸するを馴至し、而して古へより帝王の都會、遂に百年戎と爲るの歎あり、是れ失陷後の長安を思ふ所以なり。第四章・第五章みな七句に於て夔秋を帶寫す、これは則ち、開口卽ち夔州を帶ぶ、章法活變せり、この餘「入邊愁」を以て吐蕃犯京と爲すの異說、その他盛を說き衰を說く紛紛たる俗論、今俱に枚擧に暇あらず。

四

昆明池水漢時功。　武帝旌旗在眼中。
織女機絲虛夜月。　石鯨鱗甲動秋風。

波漂菰米沈雲黑。　露冷蓮房墜粉紅。
關塞極天惟鳥道。　江湖滿地一漁翁。

此れその第七章、自古帝王の長安を思ふなり、語脈は卽ち上章の末句を緊頂して來る、前は曲江、後は昆明池、一章の主とする所も、亦互に表裏を相爲す、蓋し漢朝の形勝は、昆明より壯なるは莫し、故に隆古を追ふ、則ち特に昆明を擧ぐ、漢時と曰ひ武帝と曰ふは、正に自古の帝王を剋指するなり。抑〻上章は曲江を主とす、曲江は唐時游幸の地、その陷沒を悲しむと雖も、唐の臣子として何ぞその頹廢荒涼の狀を顯斥するに忍びん、是を以て却つてその禍を致すの由に溯り、その盛麗を鋪陳して、僅かに「入邊愁」の三字を以て意を見はしたり、この章は昆明を主とす、昆明は漢時の鑿する所、その經亂慘悽の景を直寫するも、本と是れ自古帝王の事、毫も顧忌すべき所なし、是を以て力を極めて蒼涼の景象を寫す、必ずしも漢を借つて唐を形すと做して解すべからざるも、昆明にして此の如くなれば、曲江たる知るべく、曲江にして此の如くなれば、長安たるもの亦知るべし、一に由つて而して二、二に由つて而して三、詩の味を尋ねて、この蘊奧に到る、始めて古人の神髓を洞見するに足る、則ち詩の孔翠目を奪ふが如く、色色變幻して、得て捉摸すべからざるもの、亦迎刃して解すべきのみ。

詩既に漢時武帝に就いて發す、則ち二聯用ふる所、みな漢代の事實にして、尤も多く西京賦及び西京雜記中の語意を用ひたり、按ずるに西京雜記(六卷)に云はく、昆明池中に戈船樓船各〻數百艘あり、樓船上には樓櫓を

建て、戈船上には戈矛を建つ、四角には悉く蟠旄を垂る、旆葆麾蓋、涯涘に照灼す、余少時猶ほ之を見るを憶ふと。是れ所謂「昆明池水漢時功。武帝旌旗在眼中。」なり、池は本と習戰のために鑿す、故に爾か云へり。班孟堅(國)が西都賦に豫章の館に集り、昆明の池に臨む、左は牽牛にして右は織女、雲漢の涯なきが如し。又、張平子(衡)が西京の賦に豫章の珍館、桐焉として中峙す、牽牛その左に立ち、織女その右に處る、日月是に於てか出入し、扶桑と濛汜とに象ると云ふ。蓋し池の左右に二石人を作りて之を牽牛・織女に象どり、東西相望ましむ、第三句は此れを指す。又、西京雜記に昆明池に玉石を刻して鯨魚の狀と爲す、雷雨至る毎に魚常に鳴吼し鱗尾みな動く、漢世之を祭りて以て雨を祈るに往往驗ありと、第四句は此れを指すなり。宋之問が昆明池應制の篇に「舟凌石鯨度。槎拂斗牛廻。」と。亦この事を用ふ。故に彼の詩の條下にもほぼ之を注明し置きたり、參觀すべし。西京雜記(一)又云ふ、太液池邊みな是れ雕胡紫蘀、綠節の屬、菰の米あるもの長安の人謂つて雕胡と爲し、菰の首あるもの之を綠節と謂ふと。西京賦又云ふ、昆明の靈沼、黑水の玄阯と、李善の注に曰はく水色黑し故に云ふと、所謂「波漂菰米沈雲黑。」なり、黑は已に水色を帶び又、菰米の色を言ふ、菰米の多き黯黯として雲の如く黑し、その中又暗に武帝がこの池を鑿するとき劫燒の黑灰を得たりと云ふの義を影寫す、一「沈」字に於て之を見るべし。三輔黃圖に宮人太液池中に舟を泛べて蓮を採り、巴人の櫂歌を爲すこと見えて、而して韓昌黎が曲江荷花行に「問言何處芙蓉多。撑舟昆明渡雲錦。」の句あり、その注に昆明池周回四十里、芙蓉の盛なる雲錦の如しと云ふ、豈に所謂「露冷蓮房墜粉紅」に非ずや、蓮房は蓮初めて實を結ぶ、實結んで花蒂褪落す、故に云へり。

中二聯の景象に就いて意義を解するもの、亦大約兩說の互異せるあり。楊昇庵の曰はく、この詩の妙は變化

を極めたるに在り、隋の任希古が昆明池應制の詩に「回眺牽牛渚。激賞鏤鯨川。」とあるは、便ち太平宴樂の氣象を見る、今一變して「織女機絲虛夜月。石鯨鱗甲動秋風。」と云ふときは、則ち荒草野煙の悲、言外に見はる。又西京雜記・三輔皇圖等の記する所は便ち人物の游嬉・宮沼の富貴を見る、今一變して「波漂菰米沈雲黑。露冷蓮房墜粉紅。」と云へば、則ち菰米は收せずしてその沈むに任せ、蓮房は採らずしてその墜つるに任す、兵戈亂離の狀具さに見ゆと。此れ中二聯を以て專ら喪亂卽ち祿山の禍を蒙りし長安を寫すと謂ふものにして、邵國賢・唐仲言等みな此れを祖としたり。

錢受之は曰はく、昆明の一章は、上章「秦中自古帝王州」を緊承して之を申言す、時は則ち漢時、帝は則ち武帝、織女・蓮房・石鯨・菰米、金隄靈沼の遺蹟、戈船樓櫓と並に眼中に在り、古蹟猶ほ今に存す、而して自らその僻遠にして見ることを得ざるを傷む、故に關塞極天云云を以て之に接したりと。此れ中二聯は全く唐代の喪亂を形容したるに非ず、只武帝の陣跡を述べたるものなりとす、故にその昇庵を駁するや、小兒の强ひて解事を作すものなりと爲し、又曰はく、班孟堅・張平子等が賦は、漢人を以て漢事を敍し、名勝を鋪陳す、故に雲漢日月の言あり、公は唐人を以て漢事を敍し、陳跡を摩壘す、故に機絲夜月の詞あり、此れ立言の體なり、何ぞ彼れは繁華を頌して此れは喪亂を傷むと謂はんや、菰米・蓮房は班・張の未だ見ざる所を補敍す、沈雲・墜粉は素秋の景物を描畫す、居然たる金碧の粉本なり云云と。余は大體に於て錢箋を可とするものなり、その所謂漢時の遺蹟を感じ、その妍麗を企想して自ら遠に在りて見ることを得ざるを傷むとするを是とするものなり。然れども若しその景象中全く亂後の悲を注入して見るを許さざるに至つては斷じて首肯すること能はず、何となれば若し單に素秋の景物を繪がかば、何ぞ必ずしも沈雲、何ぞ必ずしも墜粉、又何ぞ必ずしも

波漂と曰ひ、露冷と曰はん、夜月の虚、秋風の動、亦この意を帶びて見て、始めて神妙に臻るを以てなり。

設は首節に於て之を悉す、その是非の判は知音の君子、自ら應に胸に了然たるべし。

末二句又、對偶の語を作す、曾て眼中に在る所のもの、今は遼遠にして見ることを得ず、身は鳥道に阻し、跡は漁翁に比す、還京の永く期なきを慨するなり。極天鳥道は夔に高山多きを以てなり、江湖滿地は、猶ほ漂流處處と云ふが如きなり、この二句は第五章以下長安を分寫せるものゝために一總束を爲し、夔府に歸到して仍ほ之を一身上に繳還す。前數章、夔を寫す所、必ず秋意を帶敍す、譬へば「魚龍寂寞秋江冷」、「一臥滄江驚歲晚」と云へるが如し、而して此れ獨り秋に及ばざるものは、二聯昆明の景物中、秋色を點逗して復た遺憾なきを以てなり。錢受之亦謂ふ、末二句は正に思ふ所の況を寫す、關塞極天は豈に風煙萬里に非ずや、滿地の漁翁は卽ち信宿泛泛の一漁人のみ、上下俛仰、亦眼中に在り、公自ら漁翁を指すと謂はゞ則ち陋なりと。その辨頗る工妙なるも、詩意に至つては猶ほ一層を隔つ、未だ的解と爲す能はざるのみ。

この詩は、已に上章末句の來脈を承く、而して七八乃ち前三章の長安のために一總結束を爲すものは、步步收場に近づき來るが故なり、その間の攝疊・環鎖は、以上無數の反覆申明に依つて了然として分明なり、その一身に歸到したるを以て、第八章乃ち自己が昔游の長安を寫す、亦筆路の順勢に屬す。

其八

昆吾御宿自逶迤。紫閣峰陰入渼陂。
碧梧棲老鳳凰枝。紅豆啄餘鸚鵡粒。
綵筆昔曾干氣象。仙侶同舟晚更移。

此れ昔游の長安を思ふなり、則ち長安を望むの餘波にして、明かに收めて自己が游賞の諸處に入る、所謂向日の欣ぶ所みな陳跡と爲るの意、情は事に隨つて遷る、感慨之に係す、秋興の作る所以、亦此れに外ならず、故に八詩の大結局たるなり。

昆吾御宿・紫閣・渼陂、みな是れ長安の名勝にして自身が曾て游ぶ所のものたり。而かも昆吾御宿は漢武が開く所の上林苑の故地、則ち語脈は自ら上章の昆明池水より連蹤して出づ、自然の章法亦昆吾御宿の陂陀の逶迤として起伏するが如きなり。終南山に紫閣・白閣・黃閣の三勝あり、俱にその圭峰の中に在り、紫閣の陰は卽ち是れ渼陂、少陵の三大禮賦を獻ずるや、曾て岑參兄弟と共に、舟を渼陂に泛べ、詩を賦して相樂しむ、故にその渼陂西南臺に云はく、「錯磨終南翠。顚倒白閣影。嶒崢增光輝。乘陵惜俄頃。」と、又渼陂行に云はく、「宛在中流渤澥清。下歸無極終南黑。半陂以南純浸山。動影裊窕沖融間。」と、當時の逸興、實に是れ懷に耿耿として忘るゝ能はざるもの、首として此に及ぶは良に以ありと謂ふべきなり。碧梧・紅豆、秋色依然たり、拾翠・同舟、春游昨の如し、綵筆を壯盛に迫ひ、星象を至尊に感ず、その明主を干して而して當時を驚動する、彼の三大禮賦の如きあり、今は乃ち白頭低垂して、この秋興の吟を成し、以て徒らに京華を望む、安んぞ楓林の蕭瑟を傷んで故國の平居を思はざるを得ん耶。浦二田の謂はく、綵筆の句、七字承轉、通體靈動す、末句今日の窮老哀吟を以て、本章を結び、卽ち八首を結ぶ、再び一「望」字を着して八首京華の想に向つて眼光を一亮し、而して又、「低垂」と曰ふ、則ち嗒焉自喪の狀、見るが如しと、眞に能く作者の意衷を剔出したり。

昔人、紅豆の二句を拈して又、一公案を作り、倒裝句法の妙を得たるものとす、然れども此等は本と瑣末

枝葉の說のみ、必ずしも深く講究せず、故に蔡寬夫が詩話に云はく、詩語は大いに用工の太だ過ぐるを忌む、句勝てば則ち意必ず足らず、語工にして意足らざるときは則ち格力必ず弱し、此れ自然の理なり、杜が紅豆・碧梧の一聯、精切と謂ふ可きも、その集中に在りては、本と佳處に非ずと、此れ字句に沾沾として小言自ら喜ぶものゝ爲に棒頭の一喝と爲すべし。或は紅豆を香稻に作り、又紅稻に作る、孰れも通ずべからざるは無し、要するにこの句紅豆粒・碧梧枝は是れ曾遊の時の見る所のもの、自己が之を留賞せしを以て、鸚鵡の之を啄し鳳凰の之に棲むに喩ふ、その自ら負ふ所、正に復た少からず、而して「餘」、而して「老」、妙に秋興の節物を離れずして、その物は在りと雖も、自身は再び啄し再び棲む能はざるの意あり、浦二田は此れを賦にして比なるものとし、當時京室才賢の盛を借影するものにして、秋景に着して說くべからずと云ふ、故にこの詩の秋景を脫却するを辨じて、作者此に於て偏に當日の京華を將て、春夏の麗景を寫出し、末、但〻吟望低垂の一語を用ひて翻轉す、而して憂遠く秋高きの況、言表に悠然たり、所謂意到つて筆到らざるものなり云云の曲解を費さゞるを得ず。又、唐仲言は之を倒裝句法に非ずとして云ふ、紅豆は乃ち是れ鸚鵡啄餘の粒、碧梧には則ち鳳凰を棲老するの枝あり、蓋し鸚鵡を擧げて以て二物の美を形容すと、此等並に未必の論なり。

佳人仙侶の句は則ち當時身歷の實事、仙侶同舟の岑參兄弟輩と宴游するの事たるは論を待たず、想ふに佳人の句も亦指斥する所あり、或はその麗人行に敍述するの事たるも亦未だ知るべからざるなり、少陵亦曾て云ふ、「氣衝星象表。詞感帝王尊。」（詩題曲江獻納二舍人）と蓋し亦天寶の末獻賦召試の事を指す、以てこの篇七句の絕妙注脚たるべきなり、邵國賢等乃ち云ふ、「干氣象」とは、漢陵の氣象を干歷するなり、

彼の時筆を弄し、以て氣象を干歷し、尙ほ飛騰せんことを擬し、今は却つて白首、峽に在つて漢陵を吟望す、何ぞ其れ低垂して奮飛すること能はざる耶と、迷妄の甚だしき、それ復た夢に車に乘じて鼠穴に入る者歟。

八詩大體沈雄富麗にして、哀傷限り無し、盡く言外に在り、故に自ら確實を脈はず、小家數彷彿すべからざるのみとは劉會孟が說なり。詩に六義あり、興はその一に居る、凡そ陰陽寒暑、草木鳥獸、山川風景、適然の感に得て而して詩を爲すものはみな興なり、老杜の秋興八首は深く詩人の閫奧に詣るとは吳澂が論なり。雲霞空に滿ちて、回翔すること萬狀、天風浪を吹いて、怒濤湧くことなし、老杜が秋興に喩ふべしとは陳眉公が評する所。秋興八首命意練句の妙は自ら必ず言はず、卽ち章法を以て論ずるに、之を分てば駁雜の犀の如く、四面みな見え、之を合すれば常山の蛇の如く、首尾互に應ず、蓋し子長・孟堅、合して一手と爲すものなりとは陳說巖が斷ずる所、而してその章法の妙を說くは大抵錢處山が一事にして疊して八章と爲す、章は八ありと雖も、重重鉤攝し、無量樓閣門の在るありと謂ふものを以て尤も確切なりとす、乾隆帝、錢謙益を目するに孟八郎を以てすと雖も、猶ほ言ふ、その箋十に八九を得たりと、故に余が評釋亦多く錢箋に本づく。錢が如きも初めは曲江の一首に於て、吐蕃、長安を陷るを指すとし、昆明池水の一首に於て、武帝を借りて以て玄宗を喩ふるものとす、後來再訂を經るに及んで、始めて前說の非を悟り、自ら解駁を加ふ。渠をして更に三訂を施さしめば、余が適〻是正を加ふる所、安んぞ又、その遼東の豕たらざるを知らんや。

吹笛（ふえをふく）

吹笛秋山風月清。
風飄律呂相和切。
胡騎中宵堪北走。
故園楊柳今搖落。

誰家巧作斷腸聲。
月傍關山幾處明。
武陵一曲想南征。
何得愁中却盡生。

此れ亦少陵、夔帰の作、昔、院晨、笛を聞いて曰はく、客中月夜にこの聲韻を聞けば、人をして斷腸せしむと。況や亂離を經て遠く家鄉を離るるものをや、時地は則ち秋山、光景は則ち風月、この清夜に當つて、忽ち笛聲を聞く、吹く者は誰が家ぞ、我をして腸を斷たしむ。領聯は風月を分承す、而して笛曲に關山月あり、便に隨つて湊入す、風能く律呂をして相和して亂れざらしむ、是れ所謂「巧作」を申する所以、月は則ち關山に傍うて倍〻その聲の悲を助く、家鄉の感、凄然として以て深し、幾處明と云ふものは、その悲離を照らして歌合を照らさゞるを恨むものの如し。

晉の劉琨、胡騎のために圍まるる事數重、中夜、月に乘じて胡笳を奏ず、賊みな流涕し、人ごとに懷土の思あり、遂に圍を解いて去る、此れ顯著の故事、亦曾て五律の部に注明す。この詩、笳を借りて笛に比す、按ずるに周弘讓が長笛吐清氣の詩に、「胡騎爭北歸」とあり、則ち笳の事を以て笛に應用するは獨り少陵が創作に非ざるを見るなり。漢の馬援、武陵の南蠻を征するとき、援が門生袁寄生なるもの善く笛を吹く、

援乃ち歌を作つて以て之に和し、武溪深と曰ふ、武陵一曲は此れを指すなり。當時吐蕃・回紇交、中原を擾亂す、故にこの篇古を用ひて當時の寇亂に印合す、自家が天涯に飄泊して歸ることを得ざるは亦この寇亂のためなればなり。又、笛曲に折楊柳あり、今之を翻用し、「故園」の二字を冠して家鄉の感に切ならしめ、「搖落」・「盡生」を以て「秋」字と呼應を爲す、言ふ故園の楊柳今方に搖落するの候、如何ぞ愁中に於て更に發生して折るに堪へしめん乎、となり、句句詠物にして筆筆意を寫し、格法又一奇を出す、結句の斡旋、實に翻意に工なるもの、浦二田に似抽の譏あるは深く辨ずるに庸なきのみ。

大抵通篇、呑吐含秀にして安詳合度す、頓挫の妙を極めて高雅人に絶す、明の何景明が七律は全くこの種を以て粉本とす、當時李(夢陽)・何、齊名して俱に少陵を刻摸す、而して何が着眼は氣魄凌鷙の處に在らずして才思秀邁の處に在り、故に一時は空同が陵轢する所と爲ると雖も、後人の月旦終に「俊邁終憐何大復。靈豪不解李空同。」の語あるを致せり、此れ任口の抑揚、固より兩家優劣の定論と爲す能はずと雖も、亦何が一眼飄定の處の大いに識力あるを見るに足るなり。

閣夜

歲暮陰陽催短景。
天涯風雪霽寒宵。
五更鼓角聲悲壯。
三峽星河影動搖。

野哭千家聞戰伐。
夷歌幾處起漁樵。
臥龍躍馬終黃土。
人事音書漫寂寥。

從來詩を說くもの、「五更鼓角」の一聯及び「錦江春色來天地。玉壘浮雲變古今。」の二句を以て杜律中最雄傑の句と爲し、聲調家の奉じて圭臬を爲す所に屬す、然かれども善く詩味を尋繹するものは、主として全篇の音節如何に雄渾に、波瀾如何に壯闊なるやを熟玩し、始めて杜律を說くことを許す、若しその人口に膾炙するがために、一聯一節に就きて盲稱嘖贊を加へば、此れ又是れ悠悠耳食の論、李天生は曰はく、壯采を行ふに朴氣を以てす、泛に聲調を爲すものの比すべきに非ずと。所謂朴氣は則ち是れ作者全幅の精神赴く所、若し之れなくんば聲調の響亮、亦何ぞ多く貴とするに足らん。余特に之を辨析するもの、大いに近日格調を遵奉するものの、日に空架子に淪陷するの傾向あるに寒心せるを以てなり。

代宗の永泰元年夏、嚴武卒して郭英乂を以て之に代ふ、漢州の刺史崔旰、英乂と隙あり兵を出して之を攻む、英乂簡州に奔り、韓澄の殺す所と爲る、既にして英乂の甥楊子琳等、兵を起して崔旰を討つ、此れより蜀中大いに亂る、年譜に據れば子美大曆元年の秋間仍ほ夔に滯し西閣に寓す、大曆元年は實に永泰元年の翌歲たり、時に於て荊羌の諸蠻又多く夔峽を擾す、獨り崔旰が亂のみならず、詩蓋しこの時に作るなり。「陰陽短景」是れ歲暮日月の窮迫、「霜雪霽宵」是れ閣夜將に曉けんとするの候、中に中夜耿耿として寐ねられざる一片の惻衷あり、以て後半の傷心を逼出す、三四は則ち霽寒宵の三字より生出し、以て第二句を緊頂したり。

鼓角五更に値はざれば聲透らず、五更は最も凄切の時なり、再び悲壯の字を着けて、直に睡醒の耳根に透る、星河は三峽に映せずんば影爍かず、三峽は最も湍激の處なり、再び動搖の字を着して、直ちに蒙朧の眼光を閃す。漢武故事に、星辰動搖す、東方朔之を民勞の應なりと云ふとあり、卽ちこの句將に曉けんとするの景を極寫すと雖も、亦暗にこの典を用ひたるものと做して看るべし、故に宋の蔡絛はその西淸詩話に於て、詩を作り事を用ふるは水中に鹽を着し、水を飲んで乃ち鹽味を知るが如くなるべし、此れ詩家の祕藏なり、子美が三峽星河云云の如き、人は徒らに造化を陵轢するの工を見るも、乃ち故事を用ふるものなるを知らずと謂へり。

寂寥の時に於てこの景象に對す、已に是れ禁持すべからず、況や蜀亂未だ平がずして羌夷雜處す、觸るるに野哭夷歌の聲を以てす、焉んぞ感焉として傷心せざるを得んや、蓋し野哭を聞きては千家の猶ほ戰伐に惱むを知り、夷歌を聞きては漁樵の羌夷と相混ずるを見る、良民は兵を畏れて哭し、夷人は戰を樂しんで歌ふ、老去つて此に逢ふ、何時か再び淸平の世界を見ることを得んやとなり、臥龍は諸葛亮、躍馬は公孫述、蜀都の賦に公孫躍馬して帝と稱すとあり、因つて以て臥龍に對す、夔州には孔明の祠廟ありて、白帝城は卽ち公孫の遺跡、是れ眼前の故事に就きて、忠逆賢否の同じく盡に歸するの適例とす。臥龍は亂を定むるものなり、躍馬は亂を起すものなり、黃土寂寞賢愚も亦一邱のみ、既に定亂の人なきを慨し、更に起亂の多事なるを歎ず、目前の人事、遠地の音書の如きは亦只之を寂寥に付するのみ、「漫寂寥」とは運に任するの意、實に是れ如何ともすべきなきの語、その詞は寬に似たるもその情は彌〻結べり。

淸の趙翼が論に云はく、「五更鼓角聲悲壯。三峽星河影動搖。」「錦江春色來天地。玉壘浮雲變古今。」固よ

り是れ絶唱、然れども三峽・錦江・玉壘等の字を換却すれば、何の地にか移用すべからざる、則ちこの數聯も亦識すべき無からず、祇此等氣魄は從前未だ有らず、獨り少陵より創するを以ての故に、群相尊奉して、劈山開道の始祖とし、異詞なきのみ、自後も亦竟に能く嗣響するものあることなし、東坡は歐陽公が「蒼波萬古流不極。白鳥雙飛意自閑。」「萬馬不嘶聽號令。諸蕃無事樂耕耘。」及び坡が自作「令嚴鐘鼓三更月。野宿鮑絲萬竈煙。」（次韻錢穆父尚書侍嗣郊邱瞻望天光迫而相繁引蘇醉令）「露布朝馳玉關塞。捷書夜到甘泉宮。」（聞洗西捷報）を擧げ、以て之に繼ぐべしと謂へり。然れども聲調は已に稍〻減じたり。元人月夜登樓の一聯「大地山河微有影。九天風露寂無聲。」近時朱竹垞の「絶頂蚊龍晴有氣。虛堂神鬼晝無聲。」（題南昌繼杜觀。原作は絶頂を陰洞に作る。）は較〻宋人に勝るに似たり。鄙作（卽ち趙が自作）西廠の煙火を觀るに云はく、「九邊塵靜平安火。上苑春開頃刻花。」亦頗るこれに近し、他は滇南從軍に、「一軍皆甲晨聽令。萬馬無聲夜踏邊。」と云ひ、鳥山祥符寺に宿するに、「半夜月明鴉鵲警。九霄風急斗星搖。」と云ふ如きも、亦力あるに似たり、然れども何の地なるを切定すること能はず、若し地理に切定して又能く聲金石を出すは、則ち惟〻陳恭尹が廣州鎭海樓の一聯「五嶺北來山到地。九州南盡水連天。」のみ、少陵と雖も亦當に視て畏友と爲すべきなりと（題北詩話卷二）。この說未だ已れを露はす太だ過ぐるを免れず、又その選する所の「大地山河」の一聯の如きは、本と鬼詩の讖あるものにして、杜が高馨と比肩し得べきものにあらずと雖も、亦大體の論旨、格調の空架子を喜ぶものと同じからず、此れに由つて入る、庶幾くは膚廓の病を免るべきなり。

返照

楚王宮北正黃昏。　白帝城西過雨痕。
返照入江翻石壁。　歸雲擁樹失山村。
衰年病肺惟高枕。　絶塞愁時早閉門。
不可久留豺虎亂。　南方實有未招魂。

崔旰の亂、年を逾えて未だ已まず、而して楊子琳、郭英乂がために義を倡ふと雖も、實に亦異志あり、その變將に測るべからざらんとす、故にこの篇、興を返照に起して、亂邦久しく居るべからざるの意に入り、年老・多病・傷時・思歸の感を併發す、蓋し亦大曆元年の作なり。杜が蜀の諸作は大抵亦所謂年老・多病・傷時・思歸の意に外ならず、之を横說し竪說し、反說し正說し、その情を曲盡せずと云ふことなし、而して四項俱に一篇中に具備せるものは當に首としてこの篇を推すべし。黃生（山谷）は云ふ、前半は寫景にして詩中の圖畫と作すべく、後半は言情にして能く紙上の淚痕を濕すと。楚王宮・白帝城俱に是れ夔峽の古蹟、宮は巫峽の傍に在り、將に返壁を寫さんとす、故に晚眺よりして寫起す。宮北は則ち天已に昏暝、而して城西は過雨初めて霽る、故にこの返照あるなり。日は江に映して石壁動くかと疑ひ、雲は樹を擁して山村失するが若

し。「翻石壁」と云ふものは、石壁その影を翻倒して江波中に隱汨するを謂ふ、正に返照の光の乍ち見え乍ら滅するを狀す、亂雲濛澒中、忽ち日脚を漏らす、眞にその情狀あり、而してその地漸く危殆に逼り、禍亂將に相及ばんとするの象、不言の中に反挑し出さる。

老病多愁にしてこの絶塞に閉門伏枕す、愁時と謂ふものは當時の亂を愁ふるなり。結二句尤も悽神憂魂す、楚辭招隱士に云はずや、「山中不可以久留」と。又、燕寧が子に與ふるの書に、晉地豹虎正に亂る、久しく留るべからず、速かに馬に鞭つて關中に去らば甚だ佳なりと。今や蜀憂の地、揚崔の徒交〻相鬩墻す、洵に所謂豺虎の亂なるもの、孤客の以て久留すべからざる所にして、而して我れ終に閉門伏枕して亟かに去ること能はざるものは、この南方に淹滯せしより人事日に非にして兵亂相迫り、我が旅魂之が爲に驚散して、復た實に未だ遽かに之を招きて北に歸る能はざるを以てなり、杜が彭衙行は祿山の難を脱せしときの流離困頓の狀を寫す、その句に「煖湯濯我足。剪紙招我魂。」の語あり、亦是れ驚魂を安定するの意、取つて以て本篇の「未招魂」の義を解すべし。「不可久留」の字已に楚辭招隱士の語を用ふ、故に便に隨つて招魂と謂ふのみ、此を以て死鬼の魂魄を招くの意に泥扭すべからざるなり、後、三年にして揚子琳果して夔州の別駕張忠を殺してその城に據る、少陵之を豺虎に喩ふ、その變を逆知したるものと謂ふも誣ひざるに似たり。

翁覃溪(方綱)亦この詩を詠物律詩偶記中に牧む、而して曰はく、此の如きの大篇、驚心動魄、本と詠物を以て之を目せず、但〻題して返照と云ふ、卽ち借りて以て萬象に攝入す、五律の「已低魚復暗。不盡白鹽孤。」(返照)(校訂者云ふ、魚復は浦の名)、「荻岸如秋水。松門似畫圖。」(返照)等の專ら返照を寫すものとは固より同じからず、昌黎が所謂雲蹴巨刄は斯れそれ至れりと。

登高

風急天高猿嘯哀。
渚清沙白鳥飛廻。
無邊落木蕭蕭下。
不盡長江袞袞來。
萬里悲秋常作客。
百年多病獨登臺。
艱難苦恨繁霜鬢。
潦倒新停濁酒杯。

此れ獨客登眺、悲秋輟飲の總概なり、上四句は是れ登高の見る所、則ち是れ望中、下四句は登高の感ずる所、則ち是れ意中、八句みな對にして、一氣に貫串し、全く神を以て行ふ、故に層層清く、字字響けり、明の胡元瑞、之を論ずること極めて悉す(詩藪)、その略に云はく、五十六字、海底の珊瑚の瘦勁にして移し難きが如く、沈深にして測ることなく、精光は萬丈、力量は萬鈞なり、通常の章法・句法・字法、前に古人なく、後に來者なし、此れ當に古今七律中の第一たるべしと、蓋しその氣象の高渾なる、巫峽千尋の雲に走り風に連なるが如し、七律中希有の作たるは論なきのみ。

風急に天高ければ、則ち秋氣肅にして猿嘯くこと哀し、渚清く沙白ければ、則ち秋江冷かにして鳥飛び廻る、今や登高して、而して秋風搖落の時、沙渚清幽の處に當る、啼猿飛鳥各自に情あり、落木長江、一望際

なく、蕭蕭たるもの無邊にして、袞袞たるもの盡きざるなり。萬里みな秋にして、久客を以て此れに値ふ、その悲は知る可く、而して又獨身臺に登る、その愁更に想ふべし。蓋し客と作ること久しければ則ち艱難備さに嘗む、艱難備さに嘗むれば白髮彌〻添ふ、病多ければ則ち潦倒日に甚し、潦倒日に甚しければ、酒盃擧げ難し、況や鬢は是れ繁霜、酒は是れ濁醪、苦だ恨んで而して新たに停む、何を以てかこの窮愁を慰めんや、落木蕭蕭はその聲を寫すなり、以て風急天高に應じ、長江袞袞はその勢を寫すなり、以て渚清沙白に襯す、常に客と作るは則ち家なきを見、獨り臺に登るは、則ち侶無きを見る、是れ猿嘯を聞いて而して傷み、鳥飛を觀て而して羨まざるを得ざるなり。

風急一天高二猿嘯哀三。渚清一沙白二鳥飛廻三。一句中に三層折を作す、格奇にして變ず、故に後聯亦「萬里」一層「悲秋」一層「常作客」一層、「百年」一層「多病」一層「獨登臺」一層、亦三層の句法を爲して相呼應す、その骨力なくして、徒らに肖似をその聲貌の間に求むるときは、適〻釘餖堆砌累を貽すのみ、外强く中乾き、神氣は索焉として盡く、明代七子の病とする所當に復た此に在るべし、或は兩聯俱に上の二字を藏ち去るべしと說くものあり、此れ則ち門外漢のみ。この詩の好處は正に「無邊」・「不盡」・「萬里」・「百年」の四語に在り、若し只「落木蕭蕭下。長江袞袞來。悲秋常作客。多病獨登臺」と云はゞ、將た何の趣味かあるや、范樟は曰はく、善詩の者、景中に就いて意を寫さんよりは、意中に景を尋ぬるに如かず、杜詩の「無邊落木蕭蕭下。」「疎燈自照孤帆宿。」(夜)「殊方落日玄猿哭。」(晴具即近過北舍)の諸聯の如きは、即ち景物の中、多少愁恨の意を含蓄す、若し說き出せば便ち短淺なりと。夫れ然り、故に深長の處は曾て說き出でざるに在り、說き出でずんば則ち悟るのみ、是に於てか嚴滄浪の一說、遂に千古不易の論たるを知るべし。

閿下贈裴舍人　錢起

一月黃鸝飛上林。春城紫禁曉陰陰。
長樂鐘聲花外盡。龍池柳色雨中深。
陽和不散窮途恨。霄漢長懸捧日心。
獻賦十年猶未遇。羞將白髮對華簪。

大曆の十才子、藻を文林に聯ね、銀黃相望む、錢仲文實にこれが冠冕たり、已に王摩詰の擊賞を受け、又「曲終人不見。江上數峰淸」を以て、譽を當代に馳す、前賢の之を評して、體製新奇、理致淸贍、宋・齊の浮游を芟り、梁・陳の媻靡を削る、迥然として獨立せりと云ふは、或は甚だ過ぐるなしと云ふべからざるも、新奇淸贍卽ち復た確論に屬す、この篇の如きは當にその淸贍の一適例たるべし。

仲文は天寶十年李巨卿が榜に及第す、この詩は蓋し未だ第せざるときの作、時に裴夷直、中書舍人たり、この詩を贈つて併せて引薦を求むるの意を致したり、閿下は猶ほ輦下と云ふが如し、身は江湖の上に在りて心は魏闕の下に繫がる、是れ二字の出處、詩中亦「霄漢長懸捧日心。」の句あり、特に之を題首に置きたるに觀

て、その命意の在る所を推知すべきなり。

前半は是れ闕下春景、卽ち舍人が日夕出入親睹のもの、黃鸝の上林に鳴飛するを以て起興す、暗に幽を出で、喬に遷るの意あり、舍人の得意亦想見るべし、時に於て春城紫禁、曉色陰陰たり、是れ景物を寫すと雖も、底下一層の意は、螢敲の下猶ほ抑鬱無聊、我の如きものあるを影躍す、この意を帶んで見ざれば、第五句に至つて活動の趣に乏しきを感ずべし、前聯長樂の鐘聲正に花外に悠揚す、紫禁の曉色を申言する所以、龍池の柳色は雨中に搖蕩す、春城の陰陰を申言する所以なり、是れこの二句は端的第二句を緊頂し、その華贍にして更に風致を見るは才筆と稱するに足るなり。

後半は自家流落の懷を寫し、贈裴の意に終ふ。第五句は春城紫禁曉色猶ほ陰陰たるの景を融化して理致と爲し、陽和は澤を布くと雖も、終に我が窮塗の恨を散ずること能はず、是を以て幽懷鬱結し、この春陰を爲すと云ふものゝ如くす、轉筆極めて妙、空しく霄漢を瞻て、常に捧日の心を懸く、その志あつて未だ遂ぐること能はざるなり、妙は霄漢捧日亦春陰を反援して來る、誰れか春陰の霽和と爲るを欲せざらん、苟も之を欲せば、則ち當に捧日の忠を抱いて窮塗の厄に困する我れの如きものを拔擢して之を霄漢紫禁の上に置き、以て鬱氣を一散せしむべきのみ、事此に出でずして、鐘は花外に盡き、柳は雨中に深し、九重深遠にして、路の通ずべきなく、十年賦を獻じて、今に至つて未だ遇はず、この運暮の白髮を以て舍人が得意の華簪に對す、寧ろ悠然として自ら羞ぢざらんや、朱軫嚴以爲らく、此れ微に裴を諷ず、白髮華簪に因つて自ら淪棄を甘んせず、言下又矯矯不群の氣概あるに似たりと、此れ未だ深文の論たるを免れず。

和王員外晴雪早朝

紫微晴雪帶恩光。
長信月留寧避曉。
獨看積素凝清禁。
題柱盛名兼絕唱。

繞仗偏隨鴛鷺行。
宜春花滿不飛香。
已覺輕寒讓太陽。
風流誰繼漢田郎。

この雪後の早朝、蓋し岑參と同時の作、大抵彼の詩を解する所以のものを以て之を解せば再び疏明を加へざるべからざるの處あることなし、但、彼れは七八に於て「白雪」の二字を點出す、此れは惟〻題柱の盛名を以て員外の詩を美す、未だ晴雪の本題と甚だ離れたるを免れざるのみ。

前六句晴雪の景を詠ず、亦岑作と異なることなし、只冒頭「帶恩光」の三字、力を極めて早朝のために雪意を洗發し以て全篇を振起す、之を他處に移易し得ず、此れ則ち岑に勝ると云ふとも劣ることなきなり、前聯雪を刻劃す、岑が「西山落月臨天仗。北闕暗雲捧禁闈。」に較ぶれば巧緻は之に過ぎて、氣象は稍〻遜せり。「獨看積素凝清禁。已覺輕寒讓太陽。」此れ恩光の二字を頂して言ふ、晴雪を寫して和煦の象を帶ぶ、造語の微妙に詣れるを味はふべし。

錢起が七律、空靈なるもの、「輕寒不入宮中樹。佳氣常浮仗外峰」（温泉宮）、警動なるもの「玉帛不朝金闕路。旌旗長繞彩霞峰。且貪原獸輕黃屋。寧畏漁人犯白龍。」（溝式出驪）、幽深なるもの、「石潭倒映蓮花水。塔院空聞松柏風。」（寺）、清奇なるもの、「幽溪鹿過苔還靜。深樹雲來鳥不知。」（山中）、みな是れ必傳の作、而して滄溟一輩の斥して以て中唐と爲す所のものなり。

自鞏洛舟行入黃河卽事寄府縣僚友　韋應物

夾水蒼山路向東。東南山豁大河通。
寒樹依依微遠天外。夕陽明滅亂流中。
孤村幾歲臨伊岸。一雁初晴下朔風。
爲報洛橋遊宦侶。扁舟不繫與心同。

前半四句舟行の景、出すに自然を以てす、此れ天籟たり、孤村の一聯、景中より情を生じ、一雁を以て密信の意を遞下す、亦羚羊の掛角の如く、その痕路を尋ぬべからず、上半は明かに舟中の見る所にして、而かもこれを道破せず、結句に至りて勢を趁うて舟の字を點し、以て飄搖不繫の心跡に比す、穩秀にして化に入る。

伊岸は伊水の岸、則ち鞏洛の地、「洛橋游宦侶」は題の所謂府縣僚友なり。「寒樹依微遠天外。夕陽明滅亂流中。」余甚だ之を愛誦す、丁亥の冬、余琉球より返つて舟五島の玉浦に入る、句あり云はく、「五島松濤蒼海上。一船空翠亂山中。」蓋しその體に效ふなり、庚寅の夏、晃山に游ぶ、亦「回首中原何莽蒼。夕陽明滅大蛇川。」の句あり、蓋しその語を用ふるなり、今にして首を回らせば、昔游恍として夢寐の如し、肯へて蘇州を規撫すと云ふに非ず、只予が嚮往を志すのみ。

贈錢起秋夜宿靈臺寺見寄　郎士元

石林精舍武溪東。夜叩禪扉謁遠公。
月在上方諸品靜。心持半偈萬緣空。
蒼苔古道行應遍。落木寒泉聽不窮。
更憶雙峰最高頂。此心期與故人同。

郎君胄は錢起と名を齊しうし、時に朝廷の丞相より以下、出牧奉使の事ある毎に、錢・郎二家の祖餞の詩篇を得ざれば、人以て愧となす、その一時に愛重せらるること此の如し。二人の體調は大抵相同じ、王阮亭曰は

く「中興(中興間氣集)高步屬錢郎。拈得維摩一瓣香。」(論詩絶句)と、此れ二人を以て俱に王摩詰の傳統を受けたるものとす、精當と稱するに足れり。

前半は靈臺寺の夜景を寫す、錢起を主として落筆す、後半は靈臺寺に在るの錢起を寫す、自家を主として落筆す、錢が原作に云はく、「西日横山含碧空。東方吐月滿禪宮。朝瞻雙頂青冥上。夜宿諸天色界中。」と、因つてその夜宿の光景を想像してその事を賦す、首句は是れ寺の在る所、次句は錢起が投宿の時、領聯は卽景悟禪の意、禪悅に深きものに非ずんば一辭を着くること能はず、李東川が「片石孤雲窺色相。清池皓月照禪心。」(題鑑公山池)又、常建が五言「山光悅鳥性。潭影空人心。」(題破山寺後禪院)と並び傳へて絶唱と爲すべきなり、佛家に上方世界あり、今借りて山寺を稱す、諸品は猶ほ諸塵と言ふがごとく、群動の物を云ふなり、半偈は報恩經に見え、又、徐陵が大士の碑に「聞半偈于涅槃」とあり、今借りて錢が詩を稱す。傳燈錄に云はく、二祖此れよりみな萬緣を息め、心枯木の如しと、句意此れに本づく。「行應遍」・「更憶」・「期與同」虛字を用ひて、我れより彼の當に然るべきを打諒す、所謂自家を主としたればなり、錢が詩已に「朝瞻雙頂青冥上」の語ありて、その轉結又云ふ、「萬里故人能尙爾。知君視聽我心同。」と、故にその意を推拓して以て之に答ふ、蒼苔古道の裏、落木寒泉の間、君が經行の幽勝なる、想見に餘あり、我が憶ふ所は則ち此に止まらず、更に雙峰最高の處を尋ねて登覽せんとす、料るに故人の心賞、亦應に我に同じかるべしとなり。

前賢、郎を評して錢に視れば稍〻更に閒雅、康樂に逼近す、珠聯玉映、覺えず編を成し、時流に掩映す、その名虛しからずと、此れ蓋し五言に就いて言ふ、七言に至つては「客路詩常隨竹影。人家大抵傍山嵐。」(江南謝閒屋作)、「長溪南路當群岫。半景東隣照數家。」(半日村別業)等の句、清幽秀澹の致多し、然れども大段は錢に及ばず。

長安春望　盧綸

東風吹雨過青山。　卻望千門草色閒。
家在夢中何日到。　春來江上幾人還。
川原繚繞浮雲外。　宮闕參差落照間。
誰念爲儒逢世難。　獨將衰髮客秦關。

盧允言も亦是れ大曆十子中の翹楚、故にその作る所特に勝り、三河の少年の風流自賞するが如しとの評あり。德宗その才を愛し、禁中に召見す、河中の判官たるに及んで、帝忽ち之を憶起し、詔して還朝せしむ、會〻途に卒す、後、文宗亦その詩を喜び、李德裕に命じて、中使を遣はし、その巾笥を索め、詩五百首を得て之を獻ず、その官たる太だ達ならずと雖も、兩代帝王の知己を得たる此の如し、綸たるもの亦憾なかるべきなり、傳に稱す大曆中屢〻試して第に入らずと、この詩當にその時に作れるなるべし。

首二句點題す、東風・青山は是れ春望、千門・草色は是れ長安、而して望む所の青山、早く已に家鄉の思を

注定す、是を以て雨過ぎ草閉に、萋萋たる芳草、王孫游んで歸らざるの歎を興す、故に三四はその情を言へり。「草色閉」の「閉」の字、下し得て無聊の極、正に是れ歸らんと欲して未だ歸らざる人の眼中なり、我れこの地に羈旅と爲りて毎に夢中に於て家に歸るも、身は長安に在り、未だ何日か到るべきを知らず、然れども春に入りて以來、江上に客の還るを見る、果して是れ幾人ぞ、明かに歸客の少なるなり、以て聊か自ら慰むべし。この二句情思婉轉にして、筆を用ふる又綽約として姿致あり、五六は春望を正寫す、見る所のものは則ち川原浮雲の外に繚繞し、宮闕落照の間に參差す、上句は是れ遠望の思ふ所、この七字中無數の鄉愁の在るあり、下句は是れ近望の見る所、この七字中、僅かに夕陽一人の影あり、客況蕭條として鄉山迢遞なり、誰れか我が儒生にしてこの世故の艱難に遭逢し、衰鬢蒼髯に至るまで、久しく秦關に客たるを念ふものぞや、傳に據れば綸、天寶の末、亂を避けて鄱陽に客たり、既にして京に上り屢〻策試に意を得ず、所謂「逢世難」は當に此れを指すなるべし。

唐仲言は此れを以て長安吐蕃の亂に遭ひ、代宗陝に幸するときの作とす、故にその解に云はく、春雨乍ち過ぎて、千門の間、鞠して茂草と爲り、荒委して人なし、我は卽ち家を思うて返ること能はず、彼の在朝の士の春に當つて還るもの幾人ぞ、正に兵戈の阻截せるを以てなり、是に於て川原の浮雲を望んで、而して居民の蕩盡するを知り、宮闕を落照に觀て、而して國步の將に傾かんとするを知る、且つ世治まりては文を尙び世亂れては武を尙ぶ、我れ儒と爲るを以て世難に逢ふ、卽ち建明する所なし、徒らに衰老してこの秦關に客たり、亦悲しむに足れりと、此れ亦通ずべからざるに非ず、唯〻平心にこの詩を反復するに、少しも所謂吐蕃亂後の長安たるを見出すこと能はず、若し只〻「草色閉」と「遭世難」の二語に依りて之を强會するは未だ甚だ武斷たるを免れず、確乎不拔の證左あらざるよりは、遽かに從ふこと能はざるなり。又「春來江上幾人還」を解して他人の歸鄉するもの多きを羨むと爲すものあり、此れ膚淺の見、與に語るに足らざるのみ。

允言が詩「估客晝眠知浪靜。舟人夜語覺潮生。」（晚次鄂州）、「路繞寒山人獨去。月臨秋水雁空驚。」（途中）、「陰洞石幢微有字。古壇松樹半無枝。」（酬道士見寄）、「上方月曉聞僧語。下路林疎見客行。」（題寺）、「萬家廢井生秋草。一樹繁花對古墳。」（舊居）、詞致清嬌洮洮として諷ずべし。

陸勝宅秋雨中探韻　張南史

同人永日自相將。　深竹閉園偶辟疆。
已被秋風敎憶膾。　更聞寒雨勸飛觴。
歸心莫問三江水。　旅服從沾九月霜。
醉裏欲尋騎馬路。　蕭條是處有垂楊。

張南史は字は季直、幽州の人、常に幅巾黎杖にして王侯の門に出入し、高談濶視して旁、人なきが如し、藍

し亦是れ一個儻慷慨の奇士、說くものその奕棋に工にして、神算敵なきを以て、漫に目して棋客と爲すは深く南史を知るものに非ざるなり。始め苦節して文を學ぶも、希世苟合の意なし、その詩は則ち調體超閑にして情致兼美、幷燕の老將の如く氣韻沈雄、時に之に及ぶもの少し。肅宗の時奬拔せられて、左衞倉曹參軍となり、後、亂を避けて揚州に寓居す、再召に及んで未だ赴かずして卒す。郎君胄の贈詩に云はく、「雨餘深巷靜。獨釣送殘春。車馬雖嫌僻。鶯花不棄貧。蟲聲粘戶網。鼠跡印牀塵。借問山陽會。如今有幾人。」、亦以てその人と爲りを窺ひ見るべし。

陸氏の宅、偶〻同人を招飲して雨中の宴を開く、晉の顧辟疆、名園あり常に賓客を會す、故に以て陸に比す、偶は配偶の偶、深竹の閒園以て辟疆に匹敵すべしとの意なり、二聯上句みな張翰が事を用ひ、自己が客中歸心の常に切なるを言ふ、下句はみな目前の景物、節候を以て之が對とす、一種異樣の創格たり、その典あるものは俱に自己に就いて之を申言し、その典なきものは、亦俱に陸に就きて歸意を翻倒し、その歡遊の興のために思鄉の念を忘れしむるの義とす、故に七八醉歸の途次、仍ほ歸路を失せんと欲するの意を以て之を推拓し、步々欵待の謝意を陸に繳還す、供給應付の語を用ひずして能く應酬委曲の體を得るものと謂ふべきなり。

張翰は吳郡の人、その洛に在るや、秋風の起るを見て、忽ち吳中松江の菰蓴鱸膾を思ひ、遽かに歸駕を命ず、是れ習熟の典、按ずるに晉書張翰が傳に云ふ、齊王冏、翰を辟して大司馬東曹の掾とす、冏、時に權勢あり、翰同郡の顧榮に謂つて、去ることを求めんと欲するの意を語る、榮その手を執つて愴然として曰く、吾も亦子と南山の蕨を採り、三江の水を飲まん耳と、三江は卽ち松江なり、この事之を知るもの甚だ鮮し、「寒

雨」の句は則ち秋雨中の題面、「旅服」の句は醉中興に乘ず、復た客衣の沾ふを辭せざるを謂ふ、「九月霜」は只是れ時候を以て謂ふのみ、必ずしも霜字を病とせず。

鹽州過胡兒飲馬泉

李益

綠楊著水草如煙。　舊是胡兒飲馬泉。
幾處吹笳明月夜。　何人倚劍白雲天。
從來凍合關山道。　今日分流漢使前。
莫遣行人照容鬢。　恐驚憔悴入新年。

李益のこの泉を過ぐる適〻春初に値ふ、故に「綠楊著水草如煙。」と言ふ、而してその落筆の意、肯へてこの處に道破せず、直ちに第六句に到つて之に吸應し、七八を以て始めて命意の在る處を點醒す、通篇の靈動、實にこの用筆の雋拔なるに在るなり。

綠楊芳草の地、乃ち是れ舊日胡兒が馬に飲ましむるの處、「舊是」の二字、第六句の「今日」と相對して一奇峰を峙す、則ち前聯十四字はみなこの「舊是」より冒破し來らる、因つて念ふ舊日胡兒の馬をこの泉に飲ましむるは、正に是れ邊塞の多事の秋なり、この時に當りては四面みな胡笳の聲を聞く、故に「幾處吹笳明

月夜。」と云ふ、殆ど處として夜としてこの聲ならざるはなかりしなり、而かも一旦歸り去つて復た來らず、是れ豈に何人か倚天の長劍を揮うて以て胡塵を掃蕩したるに由る耶、否否、決して然らず、胡兒の再びこの地に來てこの泉に飲まざざるものは、實にこの水の關山の道と俱に凍合したりしが故のみ、四五の二句承轉の處、此の如くに說き去つて始めてその神理を領解すべきなり、今日この水偶〻又我が前に分流す、是れ陽春の和氣自ら我が漢使に隨うて至れるが故なるべし、故に芳草は煙の如くにして綠楊は水に著したるなり、氷の漢使のためにして解くるは大いに喜ぶべきに似たるも、氷解くるは是れ胡兒再び來るの候たるを想へば、更に大いに憂危すべきものあり、況や我が經年の容鬢、風塵に憔悴す、何ぞ水に照らして看るに耐へんや、要するに自己が邊境に衰老するの歎を發して、兼ねて伐胡の人なきを恨む、己れ躬ら白雲倚劍の慨ありと云ふにはあらざるなり、從來「幾處」・「何人」の二句を說くもの、多く現時の情景を寫すものとして解す、爲に流走飛動の文字をして猶ほ一塵を隔てざるを得ざらしむ、膜を隔てて花を觀る、迷うて霧中に墮ちざる鮮し、嗚乎誰れか金篦を以て之を一刮するものぞ。

李益は卽ち所謂痴妬尙書李十郎なるもの是れなり、吾れ霍少玉の傳を讀む每に只〻黃衫客の手軟かにして未だこの負心漢を椎殺する能はざるを憾むのみ、然れどもその風流にして文藻ある、實に亦是れ曠世の逸才、一篇就る每に、樂工爭うて之を賂致し、雅樂に被らして天子に供奉す、又その征人早行の篇の如きは、天下みな之を繪畫を施すに至る、之を高適・岑參の列に置くは阿好嗜痂の私言に過ぎずと雖も、その抑揚激厲悲離の作、固より誦すべきもの尠からず、人を以て詩を廢する能はざるなり。

登柳州城樓寄漳汀封連四州刺史

柳宗元

城上高樓接大荒。
海天愁思正茫茫。
驚風亂颭芙蓉水。
密雨斜侵薜荔墻。
嶺樹重遮千里目。
江流曲似九回腸。
共來百粵文身地。
猶自音書滯一鄕。

永貞の獄、王叔文敗れてその黨みな一網に打盡し、柳子厚乃ち韓泰・韓曄・劉禹錫・陳諫・凌準・程异・韋執宜の七人と共に斥逐せらる、時に之を八司馬と稱す、準と執宜は俱に貶所に卒し、程异は先づ召用せらる、憲宗の元和十年に至りて、子厚等五人京師に召還し、又出されて、刺吏と爲り、子厚は柳州に、泰は漳州に、曄は汀州に、諫は封州に、禹錫は連州に貶す、初め禹錫は播州を得たり、子厚慨然として曰はく、播は人の居る所に非ず、禹錫は親、堂に在り、吾れその窮にして辭の以て大人に白するなく、又如し往かずんば、便ち母子の永訣たるに忍びずと、卽ち具奏して、柳州を以て劉に授け、自ら播に往かんことを請ふ、時に御史中丞裴度も亦劉の爲に、播は極遠の地にして猿狖の宅る所、禹錫が母八十餘にして往くこと能はず、當にその子と死訣すべく、恐らくは天子の孝治を傷つけんと言ひ、その稍〻內に遷されんことを請ふ、帝曰はく、

人子たるものは宜しく事を慎みて親に憂を貽さゞるべし、禹錫が若きは他人に異なり、尤も赦すべからずと、度對ふこと能はず、既にして帝改容して曰はく、朕が言ふ所は人子の事を責む、終にその親を傷るを欲せずと、乃ち連州に改貶せらる。この詩は子厚既に柳州に到り、城樓に登つて觸目傷懷し、因つて以て彼の四友に寄するなり、樓は大荒に接して海濶く天空し、一望際なくして愁思之と瀰漫す、正に茫茫として紀極すべからず、芙蓉を敗るの驚風、颯颯として飄颻し、荔墻を渡るの密雨、霏霏として斜侵す、芙蓉・薜荔は並に是れ本地の風光、驚風・密雨は適〻その遭ふ所、而して飄颻・斜侵我が愁思に觸れて愈〻情を爲し難し、則ちこの二句は自ら讖を被りて斥逐せられしの驚懷を興したるものと知るべし、況や嶺樹は重疊として既に我が遠望の目的を遮り、江流は盤曲して又、我が九迴の腸に似たり、四州を望んで卽くべからず、四州を思つて止む時なし、抑〻爾我遷謫の州はみな是れ古の百粵の地にして斷髮文身の蠻疆たり、共にこの荒徼に來る、物の心を慰むべきなく、賴む所は音書の往復のみ、乃ち復た各自一鄉に阻滯して互に相通ぜず、轉た更に悲しむべからずや。「共來」・「海目」の二虛字下し得て痛眞に骨に入る、二聯の驚風・密雨、嶺樹・江流、往〻として愁思に非ざるは莫し、此れ亦楚騷の遺響なり。

夫れ屈靈均の澤畔に行吟せる、侘傺彷徨、憔悴枯槁を極むと雖も、その思を荒幻杳冥の域に騁せ、有戎の佚女を求め、宓妃を洛濱に問ふ、離騷の文字、仍ほ一段の餘地をその性情の裏に存す、而かも班孟堅はその怨悱傷亂を病として、揚才露己の跡あるを刺る、柳州が如きに至つては憂憤敦迫、一些の餘裕を着する處なく、終に此を以て殞命するに至る、是に於て蔡寬夫が理に達せざるの言あり（蔡寬夫詩話）。寬夫がこの言のために柳州を是非する能はざるは、固より孟堅が論斷を以て靈均を增損する能はざるが如し、然れども言豈に一端、

各〻その當あり、人を知り世を論ずるものは、必ずその正面を審詳すると共に、亦その裏度を反面に求めざるべからず、故に孟堅が一隅に因つて靈均の性情愈〻顯はれ、寬夫が一言のために、柳州の悲況益〻見るべし、若しその「不達理」と云へるを以て、柳州の人と爲りを嘲り、幷せてその詩に及ぶものとし、之が爲に觀樓千言の辯を費すに至りては、知らず此れ又眞に理に達したるものなりや否や、會〻感ずる所あり、因つて此に及ぶ。

奉和庫部盧四兄曹長元日朝廻　韓愈

天仗宵嚴建羽旄。　春雲送色曉雞號。
金爐香動螭頭暗。　玉佩聲來雉尾高。
戎服上趨承北極。　儒冠列侍映東曹。
太平時節身難遇。　郎署何須嘆二毛。

韓文公に至つては余本篇に於て肯へて復た喋辯を費さざるべし、韓の詩は所謂百篇を累ねて驅駕す、氣勢は掀雷走電の如く天地の坍を撑決するものにして、李・杜の後を承け、太白が壯浪縱恣と少陵が渾涵汪茫を併せて一手とし、風骨峻嶒腕力矯變、又能く奇を二人の外に拔き、自ら一家を成し乾坤を震盪し萬類を陵轢す、宋

人に押韻の文の說ありしより、元・明の二代を經て異論間出し、訾警(しぎう)して休まざるは、是れ所謂太歲頭上に土を動かすもの、眞に一笑に資するに足らず、于麟輩が唐詩を選ぶに當つては亦唯〻その最も不得意とする所、寧ろ委棄して顧みざる所の律體に於て、僅かにその一を錄し、渠が豪放奇險の大本領に至つては擧げて之を闕焉に付す、此の如くなれば寧ろ初めより昌黎を選せざるに如かざるなり、故に今肯へて多言せず、略〻前後の體例に沿うて聊か字句を疏釋するのみ。

起句は是れ隔夜先づ仗衞を設く、故に「宵嚴」と曰ふ、二句は卽ち元日、金爐香動くの時に當りて螭頭の天色未だ明かならず、旣にして玉佩鏗鏘の聲を聞き旋〻亦雉尾扇の高く擧るを覩る、正に戶外の昭容紫袖垂るるの時なり、五句は武官の趨殿、六句は文官の拜朝、而して東曹の中、乃ち盧曹長のあるあり、末は言ふ、太平の時節は人の遇ひ難しとする所、爾我共に明時に際す、卽ち郎署の下僚を以て鬢に二毛を生ずるの時に至るとも、亦嘆嗟することを用ひずとなり、昌黎時に比部郎中たり、盧と同曹に屬す、故に云ふ。

唐詩選評釋　卷六

五言絶句

賀知章

題袁氏別業

主人不相識。偶坐爲林泉。
莫謾愁沽酒。囊中自有錢。

詩は絶句に至つて一毫の才氣を用ひ盡せず、半點の魄力を費し得ず、唯〻その興象・風趣何如を顧るのみ、語は淺からんことを欲し、情は深からんことを欲す、調は近からんことを要し、意は遠からんことを要す。抑〻才氣厚からずんば豈に情の深きを得んや、魄力具はらずんば意の遠きを致すこと無し、然り而して又之をその語調の間に用ひ盡せず、又之をその句字の中に費し得ず、故に詩の至難とする所は全く絶句に在り、而して至難たる所以は全くその天籟たるに在るなり。「詩に別才あり、書に關するに非ざるなり、詩に別趣あり、理に關するに非ざるなり、然れども多く書を讀み、多く理を窮めずんば、則ちその至を極むること能はず。」(滄浪詩話)、滄浪(嚴羽)の一語、凡そ詩みな然らざるはなくして、而して絶句に於て尤もその當を見る、後人その後半語に重きを置く能はずして、唯〻別才・別趣を擧げて、以て詩家の公案とす、是に於てか復た情意の深遠にして微に入るものあることなく、唯〻語調の淺近にして顯はれ易きをこれ喜ぶ、今の所謂詩人、黄茅

白葦、彌望みな是なり、歎ぜざる可けんや。

徐伯魯云はく、五言絶は眞切を尚ぶ、質多く文に勝れり、七言絶は高華を尚ぶ、文多く質に勝れりと、所謂質は質俚疎鄙の謂に非ず、是れ質實の質、故に眞切と曰ふ、則ち文と云ふも固より浮文飾詞の義に非ず、故に高華と稱す。王阮亭は云はく、五言絶は樂府に近く、七言絶は歌行に近し、五言は七言より難し、五言は最も渾成に難きが故なり。要するにみな一唱三歎の意あれば、乃ち佳なりと(帶經堂詩話卷二十九答問)。一唱三歎とは卽ち情意深遠の妙詣、渾成に難しとは正にその天籟自然にして湊泊すべからざるを形はす、絶句の極則、洵にこの數語の外に出でず、今、本評釋毎卷首の例に依り、玆に少しく五絶の起源に泝りて、剖說を加ふべし。

五言絶句は漢魏小樂府の變體にして、その初めは隱語・謎辭を短調の中に寓し、多少諧謔の意を帶んで男女相愛の情を述ぶるに過ぎざりき。就中最古にして又、最も人口に膾炙せる「欒砧今何在。山上復有山。何當大刀頭。破鏡飛上天。」(古絶句)の如き、毎句みな隱語を用ひ(第一句は夫、第二句は出、第三句は還、第四句は半月の意を寓す。)、降つて子夜、歌聞、前溪、讀曲の諸歌辭に至り、亦多くこの體に依れり、曰はく「我念歌的的。子行由豫情。霧露隱芙蓉。見蓮不分明。」、曰はく「千葉紅芙蓉。照灼綠水邊。餘花任郎摘。愼莫擺儂蓮。」(讀曲歌)、曰はく「種蓮長江邊。藕生黄蘗浦。必得蓮子時。流離經辛苦。」此れみな蓮字の音を以て憐戀の義と爲すなり、曰はく「憐歌好情懷。移居作鄉里。桐樹生門前。出入見梧子。」曰はく「仰頭看桐樹。桐花特可憐。願天無霜雪。梧子解千年。」(讀曲歌)、此れ皆梧子を以て吾子の義と爲し、婦人その所歌(戀人の意)を稱するの詞と爲したるなり。「十期九不果。

常抱懷恨生。燃燈不下炷。有油那得明。」「下帷燈火盡。朗月照懷裏。無油何所苦。但令天明爾。」（讀曲歌）、此れ則ち油を以て憂と爲す、亦音通に取るなり、此餘石闕は碑たるが故に、借りて以て悲と曰ふは、猶藁砧は鉄たるが故に借りて以て夫を稱するが如き例、一にして足らず、その全く隱語を用ひざるものと雖も「宿昔不梳頭。絲髮被兩肩。婉伸郎膝上。何處不可憐。」「暫出白門前。楊柳可藏烏。歌作沈水香。儂作博山爐。」（讀曲歌）、「燒火燒野田。野鴨飛上天。童男娶寡婦。壯女笑殺人。」（讀曲歌）「新買五尺刀。懸着中梁柱。一日三磨拳。劇於十五女。」（郢歌）等の如く、特に謎語を成せるのみならず、甚だしきは則ち褻意を帶びたり。その中亦間〻「東山看西水。水流盤石間。公死姥更嫁。孤兒甚可憐。」（郢歌）凄惋なる者、「男兒可憐蟲。出門懷死憂。屍喪狹谷中。白骨無人收。」（企喩歌）、沈痛なる者等無きに非ずと雖も、此等は寔に千百篇中の一二に過ぎず、齊・梁・陳・隋、淫哇風を成し、滔滔として返るを忘る、是に於て乎五絶は全く只〻蕩子・浪婦が信口道情の具と爲り、遊戯文字として詞人が播弄に供するのみ、終に之を大雅の堂に上す能はざりしなり。

唐に至つて絶句則ち一代の樂章と爲り、五字の宮商、鏗鏘劉曉、淵淵乎として金石の響あり、是に於て李太白の高妙にして深婉なる、王摩詰の自然にして清微なる、韋蘇州の古澹にして幽遠なる、並に化機に入り各〻勝場を擅にす、五絶の神變、是に至つて發洩して殆ど盡きたり、故に歷代有數の詩家、その述作、汗牛宮ならずと雖も、五絶の傳ふ可きものは寥寥として響を絶す、偶〻之あるも實は三家の軌轍を超軼すること

能はず、謂つて詩中至難のものと爲す、此れその一證なりと謂ふ可し。五絶の起源已に上述の如し、則ち三家にして外、有唐の詩人、時に猶ほ筆を極淺極近の處に着し、間〻諧意を帶べるものあるが如きは、是れ六朝以來因習の風、未だ全く脫し去る能はざるの故にして、免る可からざるの數なりと知るべし。

賀監がこの一絶、亦是れ一種の諧謔に外ならず、而して飄逸灑脫、特にその禮法に拘せざるの性情を見る、飲中八仙の首魁たるもの、自ら當に是の如くなるべきなり。昔、王子猷は顧辟彊が家に名園ありと聞き、本と主人と相識らずして、徑にその家に造り、坐して竹石の勝を看る、此れ傳へて千古曠逸の談柄たり（世說新語任誕）。賀監がこの作、當時の實事を寫すと雖も、意亦是に此に取れり。偶坐の偶は對偶の偶と做して解するを可とす、今、袁氏の主人と初めより相識れるに非ず、而かもその別業に來り相對して坐するを辭せざるものは、林泉の景勝冠絶なるがためのみ、抑〻知章が酒客たるの狂名は當時盛に喧傳する所、相識ならざるも亦知聞せざるものなし、則ち主人は我が此に來り坐するの眞意を知らずして漫に酒を沽はんことを愁ふる莫きか、我が來りしは林泉のためにして、酒のためならず、好し又、酒を沽はんにも、我が囊中自ら孔方の在るあり、斷じて哺啜の事を以て相識らざるの主人を累はすを欲せざるなり、主人たるもの意を安んじて可なり。「莫愁沽酒」は作者が意を以て主人の胸中を忖度するものと看るを要す、若し主人を禁遏するの語と做さば、意味直率にして索然盡き易く、曲折の妙なきなり、史記の滑稽傳に「王先生懷錢沽酒」の語あり、三四此に本づき滑稽の意を離れず、知章の初めて李太白と相見るや、子は謫仙人なりと曰うて乃ち金龜を解き酒に換へ、終日相樂む、この種任誕の襟期、この一絶亦以て彷彿想像するに足れり。

知章の將に鑑湖に還らんとするや、玄宗、文詩を賜うてその行を壯んにす、文に曰はく、天寶三年、太子

賓客賀知章、止足の分を鑑み、歸老の疏を抗す、組を解き、榮を辭し、志入道を期せり、朕その年遲暮に在るを以て、用つて掛冠の事に循ひ、赤松の游を遂げしむ、正月五日將に會稽に歸らんとす、遂に東路に餞し、乃ち六卿庶尹大夫をして靑門に供帳せしむ、行邁を寵すればなり、豈に惟〻に德を崇み齒を尙むのみならん、抑〻亦俗を勵まし人を勸め、二疏をして獨り漢册に光あらしむること無からしむ云云、詩に云はく、「遺榮期入道。辭老意抽簪。豈不惜賢達。其如高尙心。環中得祕要。方外散幽襟。獨有靑門餞。群英悵別深。」天子の爲に崇重せらるゝ此の如し、宜なり一時の賢達みな之を傾慕し、陸象先の如きは、季眞の淸談風韻ある、吾れ一日見ざれば則ち鄙吝生ずと云ふに至れること。季眞とは知章の字なり、但、知章は開元・天寶間の人なり、于鱗の本選卻つて之を初唐諸傑の上に置き、特に四明狂客を取りて卷首を壓したる所以、豈に復たその人物の高尙なるに推挹する所ある歟、然れども本選編排次第の解すべからざるもの、一にして足らず、此れ亦遽かに臆を以て定むべからざるなり。

夜送趙縱

楊炯

趙氏連城璧。由來天下傳。送君還舊府。
明月滿前川。

前川の明月は是れ夜送の實景、この實景を摘捉し來つて以て一篇の結穴とす、看よ他が如何んか落筆し出

すを。

古へ連城の璧は終に趙國に還る、今や趙縱亦將にその舊府に還らんとす、而して趙の才名天下に聞ゆる、亦實に夫の璧の萬國に傳稱せらるゝが如し、是れ趙姓に由つて想うて連城の璧に到り、連城の璧に由つて借つて趙が才を形出せり。然れば則ち趙が府に還るは亦璧の國に還るが如く、その光輝必ず掩ひ難きものあらん、果せる哉之を送る正に夜にして、明月は前川に滿ちたり、連城の美、その人を得て益〻顯はれ、夜光の名、この景に對して愈〻虛しからず、是に於てか人を以て璧に喩ふるの獨りその姓氏より牽連し出せしに非ず、亦以てこの眼前の實景を點化するの良意匠たるを悟すべきなり、その璧月雙關の妙、仍ほ讀者の神會を待つ、蓋し絶句此等の處は、その神味、一字を著くべからざるに在ればなり。

盈川がこの篇細かに作法を推究すれば、實に亦魏晉六朝間隱語夾喩の體に根す、試に前段引く所の古辭數首を誦過し、然る後沈思冥想靜參熟玩せば、古今文字の替變とその奪胎の工とに於て恍然發悟する所あるべきなり。

易水送別

駱賓王

此地別燕丹。壯士髮衝冠。昔時人已沒。
今日水猶寒。

「風蕭蕭兮易水寒。壯士一去不復還。」唯この一歌、天地黯慘、風雲色を變ず、千秋の下之を誦す、猶ほ且つ悚然として神動き、粟然として心悲しまざるものなし、況や當時白衣冠の士親しく漸離（高漸離。荆軻の盟友の樂人）、變徵の筑（五絃の樂器）の以てこの羽聲忼慨なるに和するを聞く、その情果して如何ぞや、史に稱す、士みな目を瞋らし髮盡く上つて冠を指すと、是れある哉この別れ、虹の日を貫くを致す、想ふに當に然るべきなり。駱賓王生れて唐室の傾危に遭ひ、眼に周廷の穢亂を觀る、蟾蜍の漸く太清に薄るを慨し、日景の將に崦嵫に淪せんとするを傷む、彼の討賊の檄に所謂一杯の土未だ乾かず、六尺の孤安くに託せん、請ふ看よ今日の域中、竟に是れ誰家の天下ぞと云ふに至つて、その武后に於ける、實に義、周粟を食はざるの概あり、斯人にして易水を過ぎ亦以て別を送る、安んぞ歔欷感憤、涕泗横流、壯士衝冠の態無きを得んや。その意言ふ、古人も亦嘗て此に送別す、その人は沒すと雖も、その水は猶ほ寒し、誰か今人の古人たる能はずと、謂ふやと、荆卿を以て自ら況す、俠氣凜然として言外に見はる、その短節中稜稜として芒角あるは、多く荆卿の原詞に讓らずと謂ふも、斷じて過稱に非ざるべきなり。

送別の何人たるを點明せざるも、詩中故らに燕丹を用ひたるより推して、是れ必ず徐敬業と別るゝの作たるべきを信ず、敬業事敗れて終る所を知らず、或は謂ふ賓王は海に泛んで去ると、而して兩人分手の地、適〻又易水に在り、故にその悲慨の更に深きこと一層なるを見るなり、毎句韻脚、丹・冠・寒、俱に荆軻の本事を離れず、その合拍殆ど天工かと疑ふ、此等は則ち後世詠史小樂府を作るものゝ奉じて珙璧と爲す所なり、毛稚黄この詩を上の楊盈川の作と並論して云はく、初唐の四子は人その才綺餘あるを知るも、故より自ら神韻に乏しからず、楊が夜送趙縱は第三句一語題を完うし、前後俱に虚境を用ひたり、又、駱が易水送別は、軻・

丹の事を借り、一別字を用ひて顔面を映出し、餘は憑弔の語を作して、而して神理は已に足れり、僅に二十字の中、恢恢乎として游刃ある此の如し、何等の高筆ぞやと、此れ亦能くその一部の妙義を抽象したるものと謂ふべきなり。

贈喬侍御　陳子昂

漢庭繡轍臣、白首爲誰雄。
雲閣薄邊功、可憐駿馬使。

漢庭繡轍の臣、日に巧臣の榮進するを見る、巧宦は辯佞の徒を謂ふ、明らかに戇直の士を容れざるなり、則ち一代の勳伐として雲閣の上に貌圖せらるゝものも、亦濫賞倖受の輩に過ぎずして、眞に邊功を重んぜらるるものあることなし、二語、昇平の世、文武弛懈の通弊を曲盡す、一に何ぞ痛切なるや、後漢の桓典、御史を拜し、常に驄馬に乘る、人之を畏憚す、驄馬使は蓋し喬侍御を謂ふなり、喬は想ふに邊功ありて巧宦ならざるもの、白首暮年にして壯心未だ衰へずと雖も、抑〻將た誰が爲にか雄なるぞや、此れを以て今日に用ひられんことを望むは、猶ほ黄河の清を待つに異ならず、故に可憐と曰ふなり。「可憐」「爲誰」の四字相呼應して無限の悲思を含む、痛眞に骨を刺すが如し。

唐汝詢は云はく、此れ時の爲すべからざるが故に白首淪落せるも、世に用ひらるゝに拙なるには非ざるを